

724-294



學活談

明治
45. 5. 16
丙寅

臨濟宗大本山高野永源寺管長贊辭謹爲題辭揭焉

寄原僧運禪師師大圓正覺禪師法嗣故及

相海昂々正覺禪 匹如富嶽秀東天

毫端氣魄排雲聳 鑽仰高堅顯大圓

讀僧運禪師著述賦呈 瑞阜 石蓮 全

禪學活談序

或問余曰。禪本無門而曰入門者何也。曰既曰無門也。即門也。如何而爲無門乎。子果知無門之門乎。或無語遷延而去矣。

相之高座新磯原舜應禪師嚮有唯心禪話。一味禪旨及禪學早解之著。今又見著本篇。余薰香三拜讀之。猶實參於老禪師聞便便法話。余以爲世間志禪學者。購一本而夙夜熟讀之。則終透過無門亦何有。

余慶貴著刊行遂布會問之語以爲序

明治辛亥年霜月穀旦

淋南 獨笑居士廣誌

自序

禪學といふ語は賢人君子の頭腦に如何に響いて居るであらう。敢て禪學と云へばとて、喝を用ひ棒を揮ふには及ばぬ。又徒らに禪理を説き、禪那哲學だと云ふやうな、七面倒臭いことを言ひ立て、世人の耳を驚かすにも當らぬ。但だ禪理を以つて社會人事に應用し、活々としたものとして、人生を禪學に同化させたいと思つて居るのである。之れが余の禪學で、余はこの老婆心に驅られ、日々鼻紙上に記して置いたのが重つて、一篇を成したのである。

又世の中の人々は、書物を讀まないで、その著者の肩書を讀んで居る風である。さういふ人には、余の著書は價あるまい。然しながら、若し余が精神の存在する所に讀到する者があつたならば、屹度小膝を打つて思ひ當る所があるであらう。爾の頭も信心からで、何事にも信仰が大切ぢや。余が著書固より鉛が鐵位のものであるけれど、所謂信心を以つて之れを讀めば、マイアモンド以上の光明あることを自知するであらうと信ずる。

余は元來俗世の名聞を好まぬ者である。又敢て知らるゝ程の學識もなく徳望もない。唯だ世間未到の人をして、土偶人形たらしめず、此の俗世をして光明赫々たる極樂淨土とし、其の極樂淨土に活如來として活動せしめ、各自の本分を全うせしめたいとの、一片の衷情が凝り固まつて、この著を爲すに至つたのである。

明治四十五年三月下浣

七十六耄人 僧 運

禪學活談

目次

一、 自他平等の活如來	一
二、 正信無常觀	六
三、 理窟禪	三
四、 三升鍋で山河を煮る	九
五、 持つて生れた爵位	五
六、 性は善か將た惡乎	六
七、 直覺的安心立命	七
八、 有情非情同時成佛	四
九、 蟬の聲、鴉の聲	三
一〇、 世人不識の活佛	五
一一、 我が心の一櫻的實翁	七

一、 本來無一物……………五

二、 道は近きに在り……………五

三、 戀と禪……………五

四、 現異祈禱は眞法に非ず……………六

五、 山間の清音……………六

六、 土偶人形の躍り場處……………七

七、 宇宙を手毬と爲す……………七

八、 浮世の眞相……………七

九、 般若見識の見越入道……………七

一〇、 所謂ハイカラ思想……………八

一一、 瓜々の一瞥……………八

一二、 禪は骨董品也……………八

一三、 明開裡中の眞理……………八

一四、 古釘一束……………九

(一) 人情は萬國一也……………九〇

(二) 一片の回向……………九一

(三) 其の種を選べ……………九一

(四) 夢幻泡沫の世の中……………九二

(五) 三千世界を一呑にする……………九三

(六) 坐禪念佛一的に對す……………九四

二六、 追善の心得……………九五

二七、 槿花一朝の榮……………九七

二八、 鬚一毛で諸佛を縛す……………一〇〇

二九、 耶穌も達磨も我が肚裏の一物……………一〇二

三〇、 蛆虫佛陀同一體……………一〇四

三一、 人喰虫の福徳世界……………一〇六

三二、 朝露人生中の長壽法……………一一一

三三、 唯一乘法無二亦無三……………一二四

三四、金色の佛とは吾々の事……………一三〇

三五、我は無極の中に遊ぶ……………一三三

三六、土人形も立ち躍る……………一三三

三七、悲觀的より眞理に入り、眞理に入つて活動的となる……………一三五

三八、誠心を缺きし現代社會……………一三六

三九、絶對的快樂世界に遊ぶ……………一三三

四〇、斷煩惱とは煩惱になりきること……………一三六

四一、人生第一の窮理……………一三六

四二、死生天に在り……………一四三

四三、鐵牛哮えず……………一四五

(一) 道を得ること甚だ難し……………一四五

(二) 死即生、生即死……………一四六

(三) 余が性癖……………一四六

(四) 此の世の御暇には笑つて行かう……………一四六

(五) 釋迦の來迎……………一四九

(六) 地獄極樂の辻談義……………一四九

四四、心性實窮の捷徑……………一五一

四五、世の中を見るに芝居の如し……………一五四

四六、鸚鵡か猿か……………一五五

四七、見性の活意義……………一五七

四八、一念彌陀佛、即滅無量罪……………一五九

四九、草木國土悉皆成佛……………一六〇

五〇、柳は緑、花は紅……………一六三

五一、御幣擔ぎを打す……………一七五

五二、光陰は百代の過客……………一八〇

五三、國王の十徳……………一八二

五四、即身成佛門……………一八四

五五、一盲衆盲を引く莫れ……………一八七

五六、前滅後生……………一八

五七、鴉の鳴き聲を止む……………一九

五八、邪正一如……………一九

五九、法界是觀世音菩薩……………一九

六〇、凡情を盡して正念に歸せしめよ……………二〇〇

以上

拜讀高著呈一頌

石見 妙用寺 惠海

筆舌兩端俱振禪

心源開拓氣衝天

尙看相模灣頭月

照破迷雲影凜然

禪學活談

原 僧 運 著

一、自他平等の活如來

元釋迦如來が坐して、正法眼を開き給ひし所の蓮華の花弁には、各一千の花弁がある。其の一千の花弁にも亦一千の花弁があつて、一千の佛が坐つて居る。其の一千の佛の坐せる花弁にも亦各一千の花弁があつて、又一千の佛が坐つて居る。約り十億百億千億と、數限りのない佛の坐せる花弁にも、各一千の花弁があつて、又一千の佛が坐つて居るから、無量無邊の佛が、常々備つて居て説法して居る。而して無量無邊の光明と云ふも、又無量壽と云ふも、皆悉く菩提樹下に於て成道し、四十九年間説法した釋迦如來と、毫末の相違なく、同聲同音同時に、説法し給ふのである。之れが即ち毘盧舍那法界身で、千萬無量の佛も、悉く之れ丈六の金軀であつて、大も

一、自他平等の活如來

なく小もなく同一金軀である。此れが亦末世の衆生に眞實の心を知らしめ眞實の安心を得せしめんとの尊慮であつて大慈悲の塊である。是を以つて白隠禪師は隻手の聲と云つて聲なき聲を形なき耳で聞けと如何にも親切に示されたのである。又是れに依つて吾々衆生も眞實の境地に到れば成佛疑ないのである。吾人の心は固より天地の大元素であるから以一貫之の誠に至れば宇宙の陰陽森羅萬象も古聖古賢も孔子もゴッドも全く吾が胸中腹裏のものである。

先づ各自の顔に生へし髭一本を抜き取つて一二時間能く観て居よ。此一本の髭の中から赤門の寺あることを發見するであらう。其の門よりズーと遙に見渡せば庫裡もある本堂もある山門鐘樓もあつて七堂備つた大伽藍である。大衆も二十餘名あれば奴僕も四五名居る。又白髮の老僧が奥の間で目をムキ出して居る所まで、纒に此の髭一本で自由自在に観届けることが出来る。此に居ながら髭一本で何でも観届けることが出来るのは要するに人々具足の眞如の月があるからである。眞如の月と云ふも太古の眞相と云ふも更に變りはない。彼のソロモンの榮華も、足利徳川の榮華も百合の花も、權花一朝の榮も、共に之れ永遠無窮不變

不滅の眞理の上より照見すれば全く一である。是れ皆人々具足の心の研鑽に依つて顯れ來るのである。

然れば地球上十五億乃至百億千億の人があつても之れを眞正に徹貫すれば畢竟我が心の地球、我が心の世界であつて死ぬるも生きるも此の地球を持つて生れ、此の地球を持つて死ぬるのであるから何等の不足もないのである。然し百合の譽も權花の榮も、唯世人が見る所では其の外面に表れた所を見て居るけれども、尊ぶ所は宇宙を貫く一大原理を視貫く底の所に在る。故に釋迦如来が金波羅華を拈するも、唯猶り迦葉尊者が微笑するも、今の例と淺深の別こそあれ、同様の原理に徹底すれば是れと全く一であつて、一步も譲ることは無いのである。三千年前の金波羅華も、這の梅の一輪も、眞理の上より照見すれば更に變りはないのである。如何なる大智の賢人君子も己が自性を先づ自知すべきぢや。自性を知れば自性は無自性であることが分る。故に我と名づくべき者も無く、天即ち我、我即ち天、萬象即ち我、我即ち森羅の全體である。畢竟個々の小我が宇宙の大我に歸して、永遠に亡却せざる底の境地に到着するのである。言ひ換へれば吾人の心靈と宇宙の神

靈と全く同化するのである。故に斯る思想を惹起して、そろ／＼其の歩武を進め、實研に取りかゝるのを、老衲は歡迎するのである。

余は生來無常を觀する念深くあつた。余が七歳の時、余が母は十一人の子供を遺して病歿せられた。當時余は子供心にも、母の墓に參つて、萱の中に高く土の埋つて居るのを見て、母様の御貌姿を今一度見たい、母様の御聲を今一度聞きたいと、落涙して、天を仰ぎ地に伏して、祈願したけれども、唯だ西風そよ／＼と萱を動かすばかりであつた。此の時天を尋ねても、地を探がしても、我が母は、唯だ一人であると思つて、泣く／＼其の邊を見廻すと、白骨があつた。今考へれば、無論他人のであつたが、余は子供心に、此れは我が母の白骨である。嗚呼、此れこそ我が五體を貫つた母様の白骨であると、伏し拜み／＼、砂の上に坐して念佛を唱へた。能く／＼考へれば、母様の形體は、鎔けて無くなつたが、御存命で御座つた時は、母様と呼べば、ア／＼と返辭をなさつたが、今となつては、百度呼んでも返辭が無い。さては返辭する母様は、骨や皮でない、心と云ふものであると思ひ、此の骨を元の處に置いて、我が家に歸つて來たこともあつた。

此時より我が命も無常なるものと思ひ、人も我も凡そ此世に生れ來るものは、悉く皆死を免るゝものなく、一度息絶えなば、何れの國へ消えて行くのであらう。眼を閉ぢて仕舞へば、晝も尙ほ闇である。我今此處で死んだならば、眞暗闇へ、心ばかり、懼しき夢のやうな苦患を受けつゝ、地獄とやらへ行くことかと思へば、實に眠たき眼も、はつきりと覺め寝ることも出來ぬ。唯上氣して、ワイ／＼と心惑ひ、心もここに在らざる感に沈んだのである。之れに依つて子供ながらも、諸天善神に誓つて、希くば我之れより出家して、生涯安心安樂の法さへ得れば、寺は持たず、唯獨り往來旅人難澁の場所を見付け、其の地に身體を容れる程の家を營み、禽獸虫魚に至るまで、凡そ生きたし生ける者を救ひやり、人民は自分より下の者、惡病又は支離等の極難澁の者には、其の厭ふ所を救ひ、之れを一生の業となすゆゑ、願くは諸天善神、余が安心の法を得るまでは、我が壽命を延し給へと、祈念を凝らしたことも、毎々であつた。其の後九歳にして、坊主となり、寺の墓や、又は半鐘の下杯に坐して念佛を唱へたり、種々雜多の考を起し、何でも心とか魂とか云ふ鏡の如く、光り輝く一物でもあるかと思つて、石地藏や庚申塔を見ても、二三丁前から、心中に祈念して參つたの

である。處が十七歳の春初めて禪堂に入り、雪航老師が美濃の虎溪山に入らせられると聞き、掛錫して、禪堂の直日と云ふ役を勤めた。其の時妙首座と共に、田治見組へ行く所の川を越え、小石原で洗ひ流された本佛の粗末な像を拾ひ、情々考ふるに、木にて造られし佛の姿を爲して居る。即今道の一物こそ誰れなるかと、疑を懐き、夫より是れまでとは、一二倍も奮發して、志を堅くし、愈身命を抛つて、一兩年の後、靜に思ふに、心となり、我となり居るものを實窮すれば、我が體内より細き煙の如く湯氣の如く、常に恒に沸き出づる一物こそ其の儘が此の呼吸の一息であると思ひ、夫より總身に氣息を込めて、晝夜不臥なることも毎々あつた。其の時分直日の某は、ひそかに老師へ告げて曰ふには、渠は發狂も爲し難し、渠入室の時は、宜敷訓示し給へと。此れも後に聞いたことであるが、斯んなことも有つた。終に廿一歳の臘入第五日目の夜、鷄鳴の頃、我が首の前に掛ける絡子の白きを見て、初めて此の一息が、其の儘自性本來現成にして、宇宙も森羅も萬象も、皆此の一息であつて、天は我、地は我、萬象は我と、茲に至つて自他平等の活如來に達着相見することが出來たのである。而して此の活佛は、六合をも包んで居て、一大圓鏡であつて、玲瓏たる性心は、玲

瓏たる玉の中に、常住不變であることを知つた。全く覺知したのである。この時こそ眞に離言絕慮機法雙滅である。是に於て初めて、禪と云ふものも悟つた。不生不滅、全く永く生きて死せざる法とは、唯此の自性を自得するのみであると知つた。また理盡き言極まるに至つては、千言萬語も、一の實際に如かざることを知つた。是れ所謂内外中間、八絃四維、總て是れ一枚の大磐石にして、此の時に當つて、初めて自己即ち是れ天地に先んじて生じ、虚空に後れず、死して眞洞に沈まず、長生久視の大神仙なることを覺得するのである。古歌に、

眞實に自がさめたれば世の中に、
ういもつらひも皆嘘の皮。

と云ふ。余も亦之れに倣つて、一首を得たのである。

眞實に目が覺めぬからわが物を

ひとごとにする天地萬物。

總て己が心性を自得すれば、見聞覺知の世界乃至森羅萬象、悉皆我眼界に注入して居る。故に古人も、一月普く一切の水に現すと云うて、億萬衆生の胸裏に、悉く這

の一月に接して居る。然れば神仙佛陀の這の一月と吾人の具有して居る一月と常に通貫して無礙圓融である。夫れ故に吾人も皆悉く此の大圓鏡の玉へ、晝夜毎々互泯雙亡して居ながら此の形體も一地球と云うて實に庭の小草も一つ宛の月が宿るのが其の儘不増不減の樂境である。

二、正信無常觀

先づ我等人間界の當相を觀すれば、一度此の世に生れた者は必ず死すべきものであつて、其の無常なること朝露にも勝り、電光よりも迅速である。然るに多くは此の世に通れ來て、世務に耽つて正念に住すること能はず。是れ此の世と此の身のはかなきこと、夢幻の如くなるを知らないからである。世人は夢のうち、種種の苦患を招き、幻の中に無量の歡樂を貪るに似たり。深く此の道理を辨へざれば、何時までも生きながらふべきものと思ふ。是れ謂ゆる煩惱妄執の繫縛であつて、その煩惱妄執に纏るが故に、あらゆる妄執のいやましに起り、轉た競うて止む時なし。昔も今も、皆人は口には夢幻の此の身で、焼けば灰埋むれば土と成ると言ひ

ながら、其の口に言ふ道に迷ふとは愚なることではないか。終日終夜目前の名利にのみ醒醒して生涯造つた業力に牽かれ、永く此の迷霧の街に彷徨するをも知らず、今生を空しく過す人こそ不憫で堪らぬ。無常の殺鬼念々に到り、露の命の旦夕に迫るに及んでは、國王大臣の威方を以つてするも、支ふることは出来ぬ。名醫良薬の効能も、是れを繼ぐに由ないのである。平生巧みし分別も、今や已に竭き果て、兩の眼漸く涙み、一の息永く絶えて仕舞へば、親族故舊集り來つて、歎き悲んで、更に其の甲斐がない。生者必滅、會者定離の理、老少不定の世態で、富貴も寔に夢の如く、紅顏忽にして草頭の露と化し、白髮空しく野邊の煙となる。誰れか百年の齡を保たうぞや。大隈伯爵の百二十五歳説も、當てにはならぬのである。

抑も佛陀の説きおさ給ひし、正信無常の觀念は、唯徒らに世を厭ひ、身を疎んせよとの教ではない。此の無常の世に處して、眞實に此の無常の原理を覺れとの教である。已に無常の原理を覺れば、無常固より恐るゝに足らず、其の故如何と云ふに、唯この有爲の假相に迷ふを凡夫と云ひ、悟れば世界の眞相を心の本體に注入して、一切宇宙の萬象も、悉く常住不變の無爲の極樂なりと觀するからである。然しな

がら、今日現業する善惡因果の理に由りて、過去現在未來の三世に涉り、三界苦樂の身を受けて、生々世々相續不斷なることを疑はない。斯の如く因果相續して不斷なるが故に、六趣四生歴然として輪回轉生することを免れぬのである。願ふに吾等久しく輪廻の苦海に沈淪したけれども、今や宿世の善因によりて、幸に千生難受の人身を受けたるのみならず、萬劫にも遇ひ難き如來の正法に値ひ奉る、喜の中の喜何事か之れに如かん。誠に良縁を得たるは、盲龜の浮木に遇つたがやうなものである。此の身今生に向つて、苦海の險浪を涉り、般若の法船に乗つて、彼岸の覺城に到らすんば、更に亦何れの時をか待たん。此の喜び勇める心をもて、頓に法性の妙土に入り、常住三寶に歸依し奉りて、凡聖同體淨穢不二の大圓覺界に安住せなくてはならうか。此の信念決定する者は、時處所縁を選ばず、朝暮佛前に、燒香禮拜合掌供敬して、至心正念に懺悔の文を唱へ、無始生死の罪過を除滅して、身口意の三業を清淨にし、次には三寶の名を唱へ奉りて、此の身より佛身に至るまで、其の冥加を被るべきものなり。此の功德力よく我身を濟ひて、永く惡趣の輪廻を出でしめ、迺に菩提涅槃の妙果を獲得して、今世安穩後世善處の身となること、諸佛の既に證明し

給ふ所、又諸祖の正しく信受し給ひし所である。我等も亦何で信受奉行せず居られようか。かくて三寶歸依の身となり、眞如三昧に入つて仕舞へば、忝けなくも、萬億恒河の諸善神、晝夜間斷なく守護し給ふ。衆の善事は海嶽ほど行ふべく、衆の惡事は毛の頭ほどのことまで慎むべしと願ふべきである。此の誓願空しからざれば、四恩總て報じ三有等しく資けて、六度善行體中に圓かになるであらう。

既に斯くの如くならば、其の身の賢愚貴賤、老若男女の別なく、苦に在りと雖も、苦中に亦樂あり、樂にありと雖も、樂中亦苦あるを覺り。我が身は生死無常の浮世に在りながら、心は高く眞如の都に遊びて、煩惱の塵苦には露ほども汚されぬのである。氣は卑く世間俗塵の衢に立ち交つて居ても、本覺の靈光更に其の光を味まされず。永久不滅の大光明を放つのである。願には世人のために愛護せられ、諸願速に成就し、幽には諸佛諸神のために冥助せられて、諸難滅除の利益を蒙り、自利々他圓滿具足とて、目出度く二世安樂の素願を遂ぐるものと深く深く信受して、金剛の如く其の信心を決定すべきものである。

がら、今日現業する善惡因果の理に由りて、過去現在未來の三世に涉り、三界苦樂の身を受けて、生々世々相續不斷なることを疑はない。斯の如く因果相續して不斷なるが故に、六趣四生歷然として輪回轉生することを免れぬのである。願ふに吾等久しく輪廻の苦海に沈淪したけれども、今や宿世の善因によりて、幸に千生難受の人身を受けたるのみならず、萬劫にも遇ひ難き如來の正法に値ひ奉る、喜の中の喜何事か之れに如かん。誠に良縁を得たるは、盲龜の浮木に遇つたがやうなものである。此の身今生に向つて苦海の險浪を涉り、般若の法船に乗つて、彼岸の覺城に到らずんば、更に亦何れの時をか待たん。此の喜び勇める心をもて、頓に法性の妙土に入り、常住三寶に歸依し奉りて、凡聖同體淨穢不二の大圓覺界に安住せなきてならうか。此の信念決定する者は、時處所縁を選ばず、朝暮佛前に燒香禮拜合掌供敬して、至心正念に懺悔の文を唱へ、無始生死の罪過を除滅して、身口意の三業を清淨にし、次には三寶の名を唱へ奉りて、此の身より佛身に至るまで、其の冥加を被るべきものなり。此の功德力よく我身を濟ひて、永く惡趣の輪廻を出でしめ、迥に菩提涅槃の妙果を獲得して、今世安穩後世善處の身となること、諸佛の既に證明し

給ふ所又諸祖の正しく信受し給ひし所である。我等も亦何で信受奉行せず居られようか。かくて三寶歸依の身となり、眞如三昧に入つて仕舞へば、忝けなくも、萬億恒河の諸善神、晝夜間斷なく守護し給ふ。衆の善事は海嶽ほど行ふべく、衆の惡事は毛の頭ほどのことまで慎むべしと願ふべきである。此の誓願空しからざれば、四恩總て報じ三有等しく資けて、六度善行體中に圓かになるであらう。

既に斯くの如くならば、其の身の賢愚貴賤、老若男女の別なく、苦に在りと雖も、苦中に亦樂あり、樂にありと雖も、樂中亦苦あるを覺り。我が身は生死無常の浮世に在りながら、心は高く眞如の都に遊び、煩惱の塵苦には露ほども汚されぬのである。氣は卑く世間俗塵の衢に立ち交つて居ても、本覺の靈光更に其の光を味まさず。永久不滅の大光明を放つのである。顯には世人のために愛護せられ、諸願速に成就し、幽には諸佛諸神のために冥助せられて、諸難滅除の利益を蒙り、自利々他圓滿具足として、目出度く二世安樂の素願を遂ぐるものぞと深く深く信受して、金剛の如く其の信心を決定すべきものである。

三、理窟禪

打てば響き呼べば應ずる者は是れも何物ぞや。何物が廣大の世界を見るか。何物が種々雑多の聲を聞くか。何物が行住坐臥するか。何物が此の如く腹を立て、堪忍せぬか。此の五尺の形體、土の化物の中へ出這入する所の口と鼻から吐き出す息が、つまり其の主人公である。此の主人公は無我無念の古郷に住し、五世や七世の主人でない。故に其の妙智力に至つては、天地を包も廣しとしない。又一毛端に收まつて、天地も狭く、一毛却て廣し。斯の如き主人公であるから、又極めて長壽である。過去現在未來まで、永却死せず生きずして、即今日日此の箸を持つて飯を喰ふこの主人である。然し誰れ人も此の理を研鑽せぬから、自ら甘んじて下劣の漢となつて、我は太郎なり、我は七兵衛なりと名付けて居るは、唯だ形體の假りの名のみである。現時人智開明の時に當つて、此の主人を自得して、人々に慰安心を與ふるのが、即ち宗教の本分である。此の主人公に名が多くあつて、或は魂魄と云ひ、或は性心と云ひ、或は眞如と云ひ、或は性識、杯と澤山に名づけられて居る。

此の十五貫目の形體を、足の踵から頭の腦天まで、切り刻んで見ても、唯々痛いくと泣き叫ぶ聲ばかり聞えて、少しも心だの魂だのと云ふ一物はない。唯だ其の泣き叫ぶ聲をよく、探穿すると、此の主人公である。そこで當時の人は悟道など無いやうに思つて居るが、之れは一體悟るのでない、自感するのである。譬へば佛者が宇宙の實相を知るは、畢竟窮むるのではなくて、感するのである。探るのでなく、観るのである。宇宙を知るのではなくて、宇宙に知られるのである。實相を悟るのではなくて、實相に證せられるのである。今吾人君子は、本來證せられつゝ在りながら、吾人自ら之れを肯せざるのである。故に本來の心を開覺すれば、坐禪も、念佛も、戒律も、唱題も、其の他科學より一切の學問は、畢竟自己實相に入得する教である。實相自己に入得すれば、自己は實相、實相は自己である。此の端的は全く離言絶慮であつて、言語に盡し難く、機法雙滅して、能所二つながら亡ぶるのである。強て宇宙天地となし、實相となすも、つまり文字を雇ひ來つて、假名を附すばかりのことである。

又世間に謂ふ所の自力と云ひ、他力と云ひ、唯心と云ひ、唯物と云ひ、或は主觀と云

ひ客観杯と云ふものは、理窟の凝結心より出づるものである。此の理窟と云ふ理の字は、木のモクメで、窟と云ふ字は、穴冠にカ、ムと云ふ字である。穴に身體をかめめることで、穴の中だけは見えるが、其れ以外の處は見えぬ。其れ以外のことは、夫へ這入つて居る理が、社會へ如何に影響を及ぼすか、如何に害を及ぼすかが、理其の物計り見えるのである。之れが即ち理窟である。木のモクメでも、全體に通るモクメと、一局部に限れるモクメとあるが、全體におしよせて通らないのが、謂ゆる理窟である。

佛敎は宇宙の大原理であつて、佛心は固より無性であるから、又元より無佛敎である。さて吾人君子が常々吞吐する所の、念起と念滅とは、其の極度に徹底すれば、其の儘光明無量の新宇宙を出現するのである。所謂此の五尺の小我から、宇宙の大我と、父母未生以前から互融して居ることを、初めて貫徹するに至るのを、悟道と云ふ歟。之れと云ふも、實は自己の智恵光の光に憑つて、這の無量の壽命を保つのである。希くは諸君子、此の眞實家郷と云ふは、吾人の性心是れであるから、更に他に求むることなく、唯だ自己を研鑽し給へ。

此の間東京小石川の紳商和田泡氏より、余が房へ寄せられた歌がある。和田氏は眞の念佛行者であつて、此の家郷に進んで、此の無量の壽命を自得せし人であつて、余と頃日道友の交り最も深いのである。

坐禪して彌陀は彌陀なり彌陀如來、

その場其のまゝ彌陀は彌陀なり。

心からむらがる鳥になやむなり、

案山子となりて申す念佛。

又天地萬物をはきだして見よと云ふ處へ、

粟粒に天地萬物いれて呑み

吐いて見たれば天地萬物。

入物を借りた粟粒人とは、

郵便函でほとゝぎすなく。

又理窟禪

窮窟なふとんの上も窟なれば

理窟の窟も同じ禪窟。

口頭禪を

はやるとて乗り人の頭ふへるなり

六道のちまた、口車禪。

又無我居士の發句を以つて示さば、

吉凶を離れて聞やほととぎす

山は山水は水なりほととぎす

見る人のしばし夢なり六の花

世間一切悉く皆心性は工畫師の如く、世相種々の五蘊を造るので、見るもの聞く物、森羅萬象、皆唯心の現成でないものはない。されば天地萬象の元氣凝結して、此の活潑なる心性を具有するものであるから、諸君子は博學英才であつて、數千萬卷の書を讀まんよりも、寧ろ天眞の原理は、全く吾人の心を研鑽するに如かざるのである。古人曰く、大難事は心性の窮理に過るなし、聰明利智も、田夫野人も、至り難きは心なりと。故に心性の原理を窮むる時は、天地萬物が、其の儘心となつて居るこ

とが、自知せらるゝのである。是れは全く萬物の靈長たる人間が、天地間に於て、此の一大原理を得て、實に我が心性は、天地と同根であつて、不生不滅の眞の活氣を備へて居るから、心性は固有であつて、不増不減であると云ふことを自知すれば、六塵の諸法も、吾が心の全體なることを覺了して、立地に生死の區域を越え、正覺の位置に入るべきである。正當恁麼の時、盡大千世界、八表四維、一微として別處なく、出沒一理に歸し、生死去來なく、萬法一理に歸し、一理萬法に攝するのである。無去無來、無生無死、五須彌山、白毫光、青蓮目、七重寶樹、八功德池も、悉く心上に煥爛として、目前に的然たりである。皆是れ人々本具の性である。然るに業感の強弱、福力の多少に憑つて、現行する所のものすべて同じくはない。地獄は之れを見て、鑊湯の爐炭と爲し、餓鬼は之れを見て、聚膿積血と爲し、修羅は之れを見て、刀兵戈戟と爲し、凡夫は之れを見て、娑婆世界と爲し、諸天は之れを見て、瑠璃界となし、佛は之れを見て、常寂光土と爲すのである。誠に是れ悟は美眠の如く、迷は噩夢の如し。固より人々具足、個々圓成の心性に至つては、無始無終である。這の心此の儘、一念相續して、永劫不變、唯だ業の所感に依つて、其の見る所同じくないのである。此れに依つて余

が狂歌がある。

唯心で搗きかためたる此の宇宙

うちそともなき月のさやけさ。

○心さへ持つて生れて亦死ねば

なに不足なきものところ知れ。

夢がまことで賊がゆめで

ゆめとまことは不去不來。

燈火の消えてくらきもあかるきも

いろそのまゝの同じまごゝる。

一圓の眞如の玉に寝おきして

土となつたり人となつたり。

三界は人畜鳥類蠢動含靈に至るまで、悉く此の一大圓鏡の如き玉の中の住居である。然るに此の無形の玉が、時々有形の姿に化けて、暫く右轉左轉して、命數の長短に隨ひて變化し、貴賤貧富の別を生ずるけれど、やはり土の變化物であるから、土

となつたり人となつたりである。然し其の實は、生死去來は、園林遊化の樂境である。

四、三升鍋で山河を煮る

「枝上徘徊す深夜の月、老龍吐は出す一團の珠」とは古人の詩である。此の松間に懸る一輪の明月は、是れそも何物ぞ。昔より月とは云ふが、一體此の名は假の名である。この白銀の大牡丹餅こそ、昔も今も變りはない。この白銀のピカピカの光明、是れ什麼何物ぞや。唯だ此の我と云ふ心を亡じて見よ。眞に無味極まるでないか。吾人君子の心の京である。此の親しき我と月とは、實に太古の姿である。回顧すれば、余が若き時、思ひ焦れた十七八の嬋娟たる別嬪があつた。別嬪は口よりも目の方が能く事を辨ずる。今晚は如何かと余が思ふのを早く悟つて、一寸と顔を横に振らずに縦てに振つて、莞爾と微笑した。其の面影は實に言ふに言はれず可愛らしい。其の笑窪の容態は嬉しくて、説くに説かれない。夫れと云ふのは、其の娘の心に此方の心がなりきつて居るから、以心傳心で、他人は知らないけれど、

己ればかりは能く知れる。是れは誰しも青年時代には、斯う云ふ験もあつたであらう、實に疑念はないのである。

さて此の松間の明月と云ふも、數千萬里を隔てたる這の玉兔と云ふか、月を呼ぶか。其の初めて月と云ふ名を付けた人も、又この月と同物同體で、約り我である。然れば又我を産んだ父母も、此の月と云ふ名の中に居る。又彼の十七八の娘の笑顔も、父母の皺顔も、其の誠の研鑽に到達すれば、吾人の心の笑顔であつて、決して他人の笑顔でない。寔に興味極るぢや。是れ實に天地の原理であつて、性心は不増不減の主人分であることも知れる。我と云ふ心は直ぐ様、松間の月である。今此の大玉は、名の無き太空に、此の明玉の形容をして居る一物は、是れそも誰れであるか。此の姿像をして居る月、此の月の嫦娥も、又黒雲の間に笑んで居る月、又薄雲の懸るのも、すべて此處から知れるのは、此れそも如何と研究すれば、畢竟嬋娟たる別嬪も、父母の親しいのも、悉く皆此の月を包んで居る所の、一大圓鏡であると知るのは、禪學初入門である。やがて夜も更け、月も山の端に傾く頃、我知らず目睡むと共に、早や其大玉も、別嬪も、何時の間にか姿を隠し、唯だ口と鼻から吐き出す、スー／＼

の聲計りである。此の時全く音もなく、臭もなしである。又其の無しと云ふ人もなし。之れを不可思議光如來と云ふのである。先づ少し禪に素養の有る者は、世間から憎まれたりすることがあるが、之れは世間が禪道修行の者を以つて、大法螺吹きのやうに誤解するからである。古人の頌に

手把琵琶半遮面、不令人見轉風流。

と云ふのがある。又

一粒粟中藏世界、三升鍋内煮山河。

と云ふのもある。何と大きいではないか。此の譯を噛んで合める様に嘶すと、前に言つた如く、心は宇宙萬象の根元で、此の心の外には一物も一髪も無い。經に一切唯心造と云ふのが、即ち之れである。左れば吾人の見聞覺知に觸るゝ物、悉く我が心である。此の心とは世界の真相で、此の世界は玲瓏たる、一天曇りなき活きたる一明玉である。故に茲に居ながら、數千萬里の日月星辰も、富士山を蟻が引くのも、蚤の牽丸入つ割りまで知れると云ふのが、此の玉のお陰である。それゆゑ一莖の草が、天地を包むと云ふも、一本の針が宇宙を呑むと云ふも、嘘言ではない。何等の

真理あつて、此の理を自得することが出来るかと云ふに、前に言ふ松間の月を、我と云ふ心が茲に存在して、彼の月を見ると思ふのが、實は誤謬である。一輪の明月は、隈なく照してゐるのを、月になり切つて、我と思ふ心を亡じて、無我無心になつて見れば、彼の月の中で、桂男や桂女が餅を搗いて居ると云ふ處へ、薄雲が少しかゝつて来て、チラホラ煙の様に消えたり、亦瞬く間に晴れて隈なく、月のさえ渉る、此の境界其の儘月ではなくて我、我ではなくて月、月では無く我、我でない月が、全く茲から幾萬里隔つと雖も、其の主人公は、唯だ一體の、真如の丸々丸く、際限のない、一大圓鏡の玉である。此玉は無形無象であつて、玲瓏たる活圓である。但し此の我を忘すれ盡した一刹那こそ、實に興味津津々たる宇宙の一大原理と謂ふべきである。古人が「彼見久遠猶今日」と云ひ、或は「風吹碧落浮雲盡、月上清山玉一團」と歌ひ、又針鋒影裏騎大鵬、墜落天邊月、美如西施離金闕、嬌似楊妃倚玉樓」と云ふも、皆な同一味である。耶蘇の百合も、釋迦の拈華も、又此の松間の月も、全く同一であつて、真理には古今の別は無いのである。唯研鑽する士に依つて、深淺の別を生ずるばかりである。釋迦や孔子や耶蘇の時の宇宙も、今日も、此の宇宙の真相には些の變りはない。鴉は

カア、く、雀はチウ、く、である。

余が常々心に希ふ所は、一人たりとも老人と同様の信仰に歸入して、此の本來常住の真如の月に、安慰して、全く不増不減なる各自の本心を、自知自得なさしめんと思ふばかりで、他事は無いのである。然し此の世に生を受け來つては、聖賢も凡夫も、此の肉體を保つ限りは、悉く皆生死を免るゝことは出來ぬ。此の點は、凡聖同一であつて、更に異りはないのであるが、若し自性を自得すれば、生と云ふも、死と云ふも、呼と吸とに安慰して居るから、彼の水禽の水に入つて、其の翼を潤さず、蓮の泥を出で、泥に染まざるの感があるのである。

又彼の松間の月に、我心を奪はるゝの端的を、約り永遠に保つて行くのである。此の修行を積めば、自性は無自性であることが分る。悟つて見れば、實に天地をも包んで居る所の、一個の水晶の玉である。今茲に居るのは、身體ばかりで、心と云ふものは、寸時の間も此處に留まつては居らぬ。「金剛經に應無所住而生其心」と説いてあるのは、即ち此の謂である。彼の松間の月が、此の世界を隈なく照して居るが、其の月になり切るのである。否、我が心を月に奪はれるのである。否、月に我が心

が染め込んで、我を亡くするのである。此の境界を見聞覺知の上に、永久に繼續することである。

要するに月となり別嬪と爲る一物は、素より無形無性であつて、始終化通しに化てゐるものである。唯だ月と別嬪とは、人の心を能く集注せしむるものであるから、之を以つて譬を取るのてである。心は萬物に随つて起る。故に一念生起する時、既に心が物に移照して、化けてゐるのである。然れば月と云ふも別嬪と云ふも、月と別嬪との二つ有るのでは無い。月即ち別嬪、別嬪即ち月である。其の他森羅萬象悉く斯の如くである。心の化けるのは、探海燈の移照と云ふても可のである。扱て吾人の見聞覺知に觸れる一物即ち心の化物には、種々替つた名を附けられてゐるけれども、之を研鑽すれば、口と鼻から常に出入してゐる所の、一鼻息である。此の鼻息は、父母の夜仕事で出来た物でないから、いつまでも無くなりはせぬ。實に此の處まで研鑽しなくてはならぬ。佛と云ふも神と云ふも、吾人固有の心と云ふものが、水晶玉の活潑にして碎けることのなきやうな、眞田地に到達することであると言ふが分り易く、亦此の手段を以つて進むのが捷徑である。

佛教は實に斯の如く易行簡單、修し易く行じ易き道である。然るに因果律に至つては、萬有悉く皆原因結果の連鎖に束縛せられぬものは無い。古人の偈頌に
機中織錦秦川女、碧紗如煙隔窓語、停梭帳然憶遠人、獨宿空房淚如雨。

と云ふのがあるが、此の二十八字中に於て、彼の松間の月と別嬪との關係が分るかな。昔の禪徳名匠は、世語にまで一則の公案を透過して居る。此の偈頌と同種の世語があるけれども、未だ修養中の者には、却つて修養の害となるかと思ふから省略して置く。

五、持つて生れた爵位

先づ人間と生れては、天爵と云ふことを自得するのが第一である。その天爵と云ふは、早く言へば此の世へ生れ來た果報と云ふことである。是ればかりは利口で發明でも、立派な椀木があるから、前生の種次第で、因果の實は、其の儘の天爵である。譬へは、玆に大惡黨があつて、今夜は何處の金満家へ忍び込んで、二三人も人を殺し、剩へ金銀を奪ひ取り、更に一人として知る者もない、先づ好都合で、思ひ存

分やつて来た、あゝ嬉しやと思つて、其の金を甘々遣つて一生涯を送つて居る盗石の如き者がある。然し此の悪黨も心の中では善いことを仕たとは決して思つて居らぬから、日夜戦々兢々として、巡査を見ては兎やせん角やせんと思ひ煩ひ、安心と云ふ日は管の一日も無いのである。丁度眞の闇夜に、白壁に向つて、心の思ふ通り、其の働きを書き寫すと同じやうなものである。成程其の時は誰れも知らぬけれど、己が心で證明して居る。故に天道様が東方より顯るゝと同時に、其の働は白壁の上に、あり／＼と寫つて居る。さあ斯うなつては、自業自得泣いても哮えても仕様仕方がないのである。吾人の心中で、善にあれば悪にあれば、皆な其の業を、心の鏡に寫し出して居る。是ればかりは隠すことが出来ぬ、第一自分が能く知つて、證明して居る。其の寫り出した鏡を、此の世へ持つて来るのが所謂天爵である。彼の悪黨が今茲で死んで仕舞へば、非常に幸福のやうではあるが、それはたゞ永遠の中、四十年か五十年間ばかりを見て居るからであつて、永遠の上から透見すれば、自然其の悪黨の業が種となつて、其の罪科を示す鏡を手に持ち、其の債を荷つて、又此の世へ生れ来るのは當然のことで、一絲一毫も違ひはない。之は屁理窟ではない。

全く天爵である。

今茲に二歳位の小兒に、火を挾んで與へんと云ふに、身を焼くとも知らず、善き物と思つて手を出す。然るに早や三四歳の子供になれば、火は暖く身を焼く物であると知つて、手を出さざるのみならず、身を後に退くのである。然るに堂々たる成人の男女が、善からざることに手を出し、自ら其の身を焼き、惡の報いを知らぬのは、三歳の童子にも劣ると謂ふべきである。水は如何に少しと雖も、必ず物を濕し、火は如何に僅なりといふとも、必ず物を焼く。如何に少惡であつても、惡因には必ず惡果ありで、此の因果律の法則は、少しも味まし、誤魔化すことの出来ぬものであるから、深く／＼因果の道理を信じて、一切の惡事を止め、一切の善事は、其の力の及ぶ限り、其の命のあらん限り、盡したきものである。

此の世の中は、穀物と同様で、米を蒔けば米を採り、麥を蒔けば麥を得る。決して米を蒔いて麥を採つた例は無いのである。故に人間も心が畜生のやうな心を持つてば、いやでも牛馬犬猫となつて仕舞ふ。寔に天道には間違はない、己が心が證明して居る通りになる、之れが即ち自業自得と云ふものである。故に無闇に威權を

以つて人を目八分に見るやうになると、實が入らぬから、やがて身代が潰れる基である。穀物でさへ實のほの頭の下の稲穂かなで、實が入るに随つて、御辭儀をする。況して人間は大に注意すべきことである。

六、性は善か將た惡か

古人も性は善と謂つて居る。吾人の心は正直正道の善であるのにも拘らず、其の心に反して心の許さぬ惡事をする。さあそこで主人公の心が知らぬ事だから、奴僕たる目や耳や手足などがイゼゴザ摺れ合つて末は、寝ても寝られず、兎や角と、主人公の心までが苦勞苦思して、約りは病の基となるのである。之れは正道の人、惡友に誘はれて後悔をする譬である。「涅槃經」に曰く、善惡報如影從形三世因果循環不失と、又古人の頌に曰く、

往古好學氣尤雄、今回顧總是如夢、夜來風雨花已凋、老來軀身難如何、
又大智禪師の頌に曰く、

念々無常代謝新、浮世安得久長身、百年三萬六千日、蝴蝶夢中空度春。

と、然らば吾々も、此念々無常の一事を大に覺悟して、修養に志さなくてはならぬ。

七、直覺的安心立命

凡そ佛教には大乘と小乗との區別がある。されど日本では、今日現行の佛教は、皆な大乘であつて小乗はない。假令自力と呼び他力と稱するも、要する所は同じ高根の月を見るのである。然し余が今述べんと欲する所は、専ら自力の禪に依るのである。扱て禪に謂ふ所の直覺的安心の域に進むには如何にすべきかと云ふに、其は乾坤宇宙の間に、一圓の鏡があつて、常に吾人の形體の中に秘在することを自知自得するにあるのである。人は之れを呼んで心と言ひ、靈と言ひ、或は魂と云ひ、神と云ひ、又は佛と言ひ、鬼と言ひ、ゴットと言ひ、禪者は之れを無と云ひ、有と云ひ、其の他萬般の名稱を附して居る。名は變はつて居るけれど、的は唯だ一である。先づ此の者を如何なるものと窮め知らんと要せば、普通の名稱を用ひて心と云ふべし。此の心は神にして、心能く萬法を具有する。此の心を離れて一法も存在せぬ。此の心は無形であつて、而も能く物に應じ、不動であつて、而も妙用を施し、威力

自在に到らざる所なしと謂はれて居る。先づ此の心を知らんには、第一に此の心の有無の問題を研鑽決定すべきである。如何んとならば若し心有と言はば、其の那邊に有るかを示さなくてはならぬ。又若し心無と言はば、朝に起き暮に寝ね、能く歩み能く坐し、且つ喰ひ且つ飲み、打てば響き、呼べば應ずる一物、是れも如何と研究しなくてはならぬ。此の兩端に亘つて能く答ふることの出来ぬ限りは、是非とも心無の問題を決擇して置かねばならぬ、然らば其の心の有無の問題は如何に研究すべきであるか。

此の問題の解決は宗教上の真理の存在する所を發揮しなくては分らぬ。手早く此の問題を解決しようと思ふ者は、須く寺の墓場か、將た又妖怪變化の現出すると傳ふる深山幽谷に到つて坐るがよい。其の時我が背後に、丈六の妖怪が目を睨らして立つ。此の妖怪も如何なる一物ぞと、端正に安坐して氣息急ならず緩ならず、臍下の丹田に氣を集め、一切の思慮分別、有像無像の愛憎、好惡等の妄念を抛擲して、唯だ寸陰寸刻にして、身は四大に歸し去り、冷たき土塊に歸する、此の時に迷んで、父母未生前の我は如何なるものぞと究めよ。其の研究の極度は唯だ口と鼻と

り吐き出す一息に歸す、其の一息こそ父母未生前以前の我ならんと、攻め來り究め去ることを怠つてはならぬ。譬へば各自自心に實窮すれば、即今我が足の踵から頭の腦天まで、庖丁を以つて切り刻むとも、唯だ泣き叫ぶ聲のみであつて、其の人は命終るのである。さすれば氣根挫けず屈せずんば、實に父母未生前の我は、終にこの無我の境にして、全く無我の我に遭遇することを得るのである。此の我と云ふは、たゞ我と云ふ聲ばかりである。かくて既に此の父母未生前の我に遭遇すれば、之れを呼んで直覺的安心立命と云ふのである。

此の中間安心の境地に於ては、佛もなく、神もなく、人もなく、畜生もなく、安もなく、不安もなく、地獄もなく、極樂もなく、男もなく、女もなく、草木もなく、國土も無いのである。水注げども着かず、火焼けども焦さず。正宗の名刀も、干城莫耶の名劍も、寸毫の入るべき餘地がない。富留那の辯も、加陵頻伽の聲も、一言の入るべき所なく、生死亦襲ふべき所もない。唯だ三千大千世界は、一團の自己の光明となるばかりである。

此に至つては、一切の怖畏、憂苦、不安、死生、其の他の諸問題は、泡沫夢幻の如く消散

して仕舞ふ。過去は際限なき以前の過去にして、未來は際涯なき未來の後までも、常住不變の掌中を見るが如く、實に明々白々たるものである。快哉と喚ばんか、快乎と叫ばんか、實に佛滅既に三千年にして、佛光隆々旭日の東天に輝くが如く、世の文明と伴ひ行くは、左こそと了知し得るのである。古人の「自笑一聲天地驚く」の如きは、恐三千年の往昔釋迦の明星一見、草木國土悉皆成佛と號びし心底も、其のまゝ親ひ知ることを得るのである。亦三世諸聖の大慈大悲も、是に於て了解し、其の恩恵に浴することを得るのである。

而して後眼を轉すれば、其處に山あり、川あり、世界あり、國土あり、男子あり、女子あり、佛あり、鬼あり、地獄あり、極樂あり、實に殺活自在にして、妙用無礙である。此殺活自在の境に住すれば、却て笑ふ死生煩悶の人ぢや。斯の如く直接に安心立命の出來得る妙法の有りながら、尙ほ木に縁りて魚を求むるが如く、自己の明玉を他所にして轉々東西に奔り迷ひ、煩悶する人こそ、氣の毒の至りとも謂ひ得るのである。達識の君子は、余が如上の説を信じて、速に此佛陲の慈光に浴せよ。若し余が此説にして讀者を誤らしむるが如き事あらば、余は如何なる奈落の底に沈むも、更に辭

せざるのである。既に吾人は此の境に到れば、大安樂の境であつて、死生全く夢幻空華、香爐上一點の雪で假令悲に遇うても、其の悲は其の悲の爲めに存はれず、樂に遇うても、其の樂の爲めに溺れざるのである。常にこの真空妙用は、貧富に關せず、君には渾身の忠節を捧げ、親には無限の孝道を盡し、夫婦仲好く、兄弟睦じく、博愛衆に及ぼし、益々己が本業を勵み、自利々他全く、處世安穩、又何をか愛ひ、何をか悲しまんやである。廬山は煙雨、浙江は潮、三千世界一圓自己を常に吐出す、一氣不言合萬象ぢや。古人も渾崙香、渾論吐と謂つて居る。

心さへ持つて生れて又死ねば

何不足なきものところぞ知れ

此の禪旨と云ふは、心の眞の像り形を、肉眼を用ひて見るのではなく、心で心を摺り潰して見る事で、之を悟と云ふのである。されば君が言々喋々の音聲の性質を能く探究すれば、一々其の音聲其の儘が、大光明赫々たる音聲である、又無量無邊の音聲である。故に吾人の聲が金色光明の聲である。實に吾人の音聲は、其の儘光明を放つのであるから、わしが耳に聞えるわしの聲も、君の心の光明へ其の光りが

届くのであるから、目で見るとは、心で見るとは、心で見るとは、故に心で心を研鑽すれば直ぐ其の儘が光明放つ活き佛であることを、自知自覺することが出来る。此の互具する所の光明は、圓通妙用して、無量邊の一大圓鏡であるから、其の中の人間は言ふまでもなく、假令蠢動含靈に至るまで、大小悉皆此の大光明裡に在つて、大はただけの働を現し、小は小だけの働を示して居るのである。其の中間は、五體の構造より、精神の活動まで、靈長と謂はれて居るのである。吾人に其の見る所では、個々別々に相異つて居るけれど、互に這の所謂大圓鏡中に入つて、同じく一光明を放つて居るのであるから、唯だ因果律の大綱に依つて差別するのみ、實は一味平等である。本來同一佛たるのである。見よ、其の大光明を。

固より吾人の心性は、宇宙の一大原理であるから、智慧光の光明に依つて、一度び活眼を開いて開覺すれば、三千大千世界は、觀見法界草木國土悉皆成佛で、即身成佛、大光明現前するのである。

八、有情非情同時成佛

釋迦如來は、世界の人を救濟せんがために、東に西に奔走して、說法教化された。其の四十九年間の說法は、八萬四千と數限りもなき程澤山あるけれど、要するに釋迦如來が菩提樹下に於て、明星一見大覺の宣言に盡きて居るのである。曰く「有情非情同時成佛」と。吾等人類は勿論、山河大地より一切の含靈釋迦成佛の時、悉く皆大悟成佛せりと云ふ意味である。

此の釋迦の宣言に依つて、私も此の眼耳鼻舌身意に觸るゝ有情非情に、開覺させたいと云ふ病氣が起つて來てならぬ。凡そ一切天地間の物心は、不増不減であつて、常に清淨極樂國土であることが自得出来るのは、吾人の心性に依るのである。神も佛も外でない、即今即心活きたる神活きたる佛である。依つてこの即今即心を活きた佛にして、此の世を去つて、全く冷き土になる時は、有漏路から無漏路に入り、無漏の我が古郷父母の膝下に歸るのであるといふ、安心を持つて、此の世を渡らせたいと云ふのが、抑も私の病の原である。

一體有形ばかりの學問をする者は、有形的の上に一原理を見つけて、快樂として居るが、無形無象の上に横はる、眞の一大原理を發見する眼力がない。故に有形的

事物を研究する者は、無形の眞の極樂快樂を知る者は、極めて鮮少である。如何なる博士でも、碩學鴻儒でも、常に有形的學理を究めて居るから、彼我の僻見があつて眞實心の研鑽になると、科學や物理の淺い有形的原理のために、我と我が心を迷はして、不明境に陥り、眞の樂境に踏み込むことが困難である。之れは尤もの事ではあるが、無形の心性の研鑽には有形的科學の知識を打ち棄て、眞劍に研鑽しなくてはならぬ。博士論文を書くやうな氣では、とても駄目であるから、心の死に活きと云ふ大事の場合と思つて、惡命に取りかゝらねばならぬ。少し學問でもすると常には生れる前の事も、死に行く後の事も、世間内外の事も、或は宇宙始終のことも知れきつたやうな氣で、よくよく安心の出來たやうな顔をして居るものであるが、さて病氣にでもなると、死を畏れて愛ひ悲しみ、不運不幸でも重なると、淫祠邪教の見分けもなく、祈禱の神籤のと騒ぎ出すのである。總て一般世の人々は病を恐れ、死を懼れ、一生涯戰々兢兢として、一本橋の夢の世を渡つて居るのは、不憫の極である。或る日一人あり、來つて余に問ふ、

「有形と無形と何れが先にして、孰れが其の本なるや。」

と、余即ち應へて曰く、

「人の心は宇宙の根元である。心は人々本具個々圓成である。即今君の心は無形無象でありながら、有形有象を吐出するでないか。君自ら之れを知らざるかと。是れは心の研究をすれば、分明になることである。敢て多言を重ねべきものでない。先づ一轉して余が狂歌を聞きたまへ。」

年喰はいやでもあれど元日の

もち喰ひたし年はいやなり。

が友人の發句を密せて曰く、

元日や餅でおし出す去年の糞

又余は近日霖雨なるに、今宵は十五夜にて露月なれば、

雲晴れて月の眞顔に薄化粧

たゞなづかしき父母の面影。

われ人のふせがわらやのちりまでも

皆なみはとけの京なるらん。

禪は枯木死灰を好むものぢやと言つた者もあるが、一旦は枯木死灰になり切つた所に花あり月あり櫻臺ありと云ふやうに活々とした自己の光明を認むるのである故に古人も萬物生光輝と謂つて居る。余も亦人に示して、

吾是非我 彼亦非渠 脱體現成 己靈合玉。

と云つた。此の脱體現成とは、人皇五十二代嵯峨天皇の後、檀林皇后の歌に應ずるもろこしの山のあなたに立つ雲は

こゝにたく火の煙なりけり。

又己靈合玉とは、余が狂歌で示したこともある。

煩惱を打ちわりて見よ寶月

つゝむは常の京なるらん。

余が朋友に安藤居士と云ふ人がある。同人の妹俄然として不歸の客となる。同人もいたく落膽のおもひにて、余に歌を寄せて曰く、

定めなき世の浮橋をわたる身は

けふは人事あすは我が事。

死んだ人は更にものを言はぬ、其の冷たきこと石の如くである。そこで同人も亦、

こと問はん幽谷響にこたふ山彦も

おのが聲をばおのが聞くなり。

又余も吾人の身の上をよみて一首、

我が物とおもふ間もなくいつの間に

のり合ふねの夜半のおきふし。

九、蟬の聲、鴉の聲

凡そ學問は、此の世へ生れ來て、世間を渡る道具であるから、なくてはならぬ。然も心性を自知するには、學問もいらぬ、文字も譯立たぬのである。何となれば、父も此の世へ生れ出ぬ前からの心であるから、唯だ此の世で覺えた學問や、此の世限りの文字は何程の資にもならぬのである。眞理には貴賤高下や古今東西の差別がない、この道理を辨へて見れば、私の這の喋々の聲も、蟬のツィ〜の聲も、雀のツ〜の聲も、鴉のカ〜の聲も、乃至は隣の婆さんの笑聲も、向の子供の泣き聲

も同じく眞理の現れなることが分るのである。先づ人の一生は生れるから死ぬ迄で危き獨木橋を渡るやうなもので、善き事が三分悪きことが七分の世渡りであるから、その心配せず、悪き時も善き時も、その道を通りこす時間の中のみと心得れば、極樂も地獄も、唯だ方寸の裡に在るのである。然らば禪を修むれば、どれだけの利益があるかと云ふに、甚だ大なる利益がある。

- (一) 禪學を修むれば、己が智を練磨し、世間の愛苦を忘るゝが故に、長壽を得る。
- (二) 人の思想をして極めて高尚ならしむるが故に、心境の範圍を遠大に擴充せしむることを得る。

(三) 有形の思想を養ひし人も、無形無象の別世界あることを知るが故に自ら心性に快感を惹起するに至る。

(四) 心性を徹見すれば、自ら安心立命を得、設令世の中の珍寶も終に比較すべからざるを知り、身心脱落の境界に至ることを得る。

(五) 此の形體は全く土の化物であつて、死は肉體の機用を離脱するを知る。

(六) 小我と大我とは常に互融して天地と我と一如なることを自知するが故に

娑婆即寂光淨土の安心を得るに至る。

然し現時流行する所の禪は、大概教相禪であつて、眞禪は寔に鮮い。其の眞禪とは不立文字禪であつて、父母未生以前、人々具足個々圓成の明珠を研鑽實究するので、文字には全く關係しないのである。古徳の歌に、

生れ來て祖鏡の二字は知らねども

うめの小枝に鶯のこゑ

とあるが、之れが眞個の禪味である。先づ吾人の心を知らんと欲せば、第一我と云ふ心を亡せねばならぬ。彼を思ひ此を想ふものは、見る聞く、喰ふ衣る底のものが銘々即今の心になつて居ることが分る。故に此の見聞覺知の四者を除けば、何處に吾が心があるか、譬へば座頭を呼び込んで、その盲人に杖は何れにありや、笛は何處に在りやと問へば、盲人は答へて、笛は何處にあり、杖は彼處に在りと云ふであらう、この理を一つ呑み込めば、そらく興味を覺えるであらう。なせかと云ふに、盲人の心に笛と思ふ時、直に笛になり切つて、その笛をてらすは、座頭の心である。又杖はと問ふ時に、其の杖になり切つて、杖を照すは盲人の心である。而して座頭と

に假りに言ふばかりで、心の外に笛もなく杖もない。尙ほ之れを喩ふれば、茲に一の玉がある。此の玉は元より拵へた者でないから、亡くならない。無くならないから増減も無い。吾人にも常にかゝる不可思議の玉があつて亡くならない。此玉は生きて居るやうでもあるし、又死んで居るやうでもあるが、之れが實に天地陽冥の本玉である。故に此の玉は、此處に在るが如くであつて、而もこゝと定まつた處もない。又その玉には目も口も鼻もない、而も目も口も鼻もある者より自由自在で、少しも繫縛なく、自由自在神力がある。其の自在神力の様子を説いて見ると、大阪の四天王寺を思へば、直に四天王寺の境主となり。京都の金閣寺を思へば、直ぐ様其の金殿玉樓の境主となり。乃至函館、長崎、支那、亞米利加を思ふも、同様である。實にこの心の自由自在無礙神通の味は、さながら探海燈の如くで、心の思ふ所、更にあいを止むることなく、誠に奇々妙々の玉である。此の玉固より無形なれば、無生無死であつて思ふ所の境に随つて、その境を體として、人が世界に唯獨り芝居をするやうなものである。故に此の無形の玉を識得せんと欲せば、長連狀上に跏趺坐してみよ、脱體現成の妙を得ることであらう。

然るに今の世に在りて、智あり才ある人にして、此の玉と常に起臥して居ながら、此の妙玉を識らず、唯だ比較的の考を以て、唯物だ唯心だ、二元だ一元だと、騒いで居るが、是の寶珠の全體を自得することに至つては、甚だ以て稀である。又お互の所持する玉も、拙老の玉も、亞米利加人の玉も、佛蘭西人の玉も、決して變りはなく、全く一つ玉であつて、一木一體である。然るに世の多くの人は、化物の土人形同様、漸く五十か七十の形體に迷うて、此の眞の寶珠を研鑽せぬと云ふは、おろかの至りではないか。そこで吾人は、全く此の玉の中に住んで居るから、權兵衛も八兵衛もおさんもお鍋も、蛇も蜂も、皆な同様の神通力がある。碎いて言ふと、唯形體の大小と、智力の深淺とに由つて、是非なく大は小を呑むと云ふに至れど、此の同一の玉を所有する限りは、大も無く小もなく、皆一つで所謂一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛の活眼を開くに至る。此に至れば、此がお經を讀み、蚊が謠曲を唱へ、溪聲が長廣舌なれば、山色も亦清淨身であつて、更に奇とするに足らぬ。然れば、楞嚴經に、汝無始より今生に至るまで、賊を認めて子と爲し、汝が無常を先にす。とあるのは、餘程味ふべき語である。又拙老の歌に

我ありと思ひはじめし這の心

佛に遠くなるぞかなしき

と口吟したこともある。能く／＼思ふて見れば昔の昔其の又た昔過去幾萬劫の昔から吾人も共に今身に至るまで、賊を認めて子となして居るから主人にはなれぬのである。今吾人の心は常住の位置に在りながら、かり物の如くに考へ、我が眞如の月を天上の月と思つてをる故に、今にも閻魔の御使がくれば、連れられて行かねばならぬなど、思つて、心の常樂の地に住することが出来ぬ。古語に、空却せんと擬する底の心、是れ生死の大兆也とある。之れも迷はなくてよいに、自ら迷ふのである。人は病氣付いて居ると、他所では夫れ／＼の親類縁者が、見舞に來て、其の病人の枕邊にて必らず全快するでせうなどと云ふと、病人も其の言葉を眞に受けて、嬉しがり、早や既に生と死との二つの迷が出来てくる。遂にいつまでも生死の大海に浮きつ沈みつするは、憐なる者である。但し此の道理はなかく徹底するが難いことである。余がさる高僧の許へ、

見て聞いてものいふ聲は天地も

知らぬむかしの父母の面影。

蝶一羽つばさ破れて霜おける

色なき花に身うごきもせず。

と云ふ二首を送つたことがある。實に此の邊の所になると、曰く言ひ難しで、冷暖自知するより外仕方ない。鴉はカア／＼、雀はチツ／＼。諸君子會せりや否や。

一〇、世人不識の活佛

余が毎々言ふことを能く聞き、而して研鑽實究した者ならば、個人が個々に三千世界を舞臺にして居る所の一軀の活佛を備へて居ることを自知するであらうが、世人大抵の者は之れを知らぬ。然し吾人の自性は無自性であつて、洞然明白なものである。今頌を以て示さんか。

吾有一軀佛、世人皆不識、無一點彩色、人畫畫不成、賊偷偷不獲、

體相本式體、分身千百億。

(吾に一軀の佛あり、世人皆識ず、一點の彩色なく、人畫けども畫ならず、賊偷めど

も偷み得ず、禮相本より式體にして分身千百億なり。

世人不識の活佛、全く之れを識らずして逝く、亦憐ならずやである。之れを經に從苦入苦、從冥入冥と説く。世に生るゝ者、誰れか無常の風を免れんや、貴賤貧富男女老幼を擇ばぬ。昔肥前の國に有名の財産家があつて、實は山ほど積んでありながら、天にも地にも懸け替の無い、唯だの獨り娘が、十六の花の雷の開かぬうちに、はかなくも死んでしまつた。彼の近松門左衛門が、唐津近松寺に初住の時、此の娘に引尊を渡した。其の語に曰く。

二八の春秋一夢の間、無常の風色紅顔を破る心に、叶はゞ道へ共に手を携ふべし、月に歩み獨り行く死出の山。

と。實に無常の風は公平な者である。決して富者のために待たぬ。貴者のためにまげぬ。之れほど公平なものはない。而して其の何時此の風の吹き來るかば、亦得て知るべからずである。要は速に分身千百億の活佛を識り、自ら三千大千界を遍照する大光明の主人公となるにあるのである。

一一、我が心の一攫的實窮

禪に於ける不生不滅と云ふことを、現時の人々は、未だ眞實の研究が無いから、解り悪いやうである。昔時の孔子や釋迦や、其の外英雄豪傑などの物語を聞いて、各自の耳底に残つたり、或は讀んで記憶して居る所から、次へ漸が段々傳はつて行くから、其の人は永遠に不滅で有ると云ふは、當今の人々の所解らしく聞えるが、此の禪で謂ふ所の不滅は、此れとは其の趣が違つて居る。之れを譬へて云へば、各自最も大切に、して可愛がつた、唯の獨り息子が、死んだりしますと、其の父母の悲は如何ばかりか、寝ても起きても忘るゝ間はない。そこで其の父母が思ひ慕ふて、暫時の間目を閉ぢ口を噤んで靜坐し、死んだ息子の像を想觀すれば、心の裡に直ぐ其の息子の像や姿や、其の形貌が、其の儘心の中に影現する。其の影現する端的の其の物を實窮する事、凡そ英才至智の者ならば、二三晝夜不斷相續して想觀實窮することとを要す。即ち其の影現せし所の像や容貌となりし一物、果して正に死んだ我が子の心か、將た又我が心なるか。眞に死んだ息子にも非ず、又我が心にも非ず、然ら

ば我が心とは何ぞやと云ふ研鑽の極度に到達すれば、全く吾人の呼吸の一息のみたることに想到するであらう。而して其の同時に下婢來つて旦那様と呼ぶ、其の聲に應じて眼を開けば息子の像は忽然として下婢の容貌と化す。這個の一物、果して如何なる怪物なるか、之れを放てば六合に涉り、之れを捲けば絲髮に收まるものであつて、即ち是れ天地の主宰者、實に興味極まり神通力を有する吾人の心性である。我と呼び彼と呼ぶ、眞に不可思議の一物であつて、六合をも包み、永劫不生不滅の一乘法で、無二無三の眞田地である。之れを自得するのが、即ち禪の修養法の入る口である。但し凡庸の人には、十年坐禪するも其の極度に到達すること難いのである。唯禪旨は渾沌未分と實窮するの道である。其の渾沌未分とは譬へば朝より暮まで千言萬語を費して喋々するも、其處に一言半句の辯説も在らず、百億千億の文字を書くも、唯其處に一劃存するのみ、更に二三四劃も残らぬのである。這の眞正の理に到着すれば、一劃を書すれば萬字に達する思ひがある。世の求道者は能く這の興味を味ふべきである。余も亦實に親の子を憐んで、其の醜を識らずと云ふ古語に倣つて、焉を書きつゝあるのである。

斯くて研鑽其の功を累ね、全く不生不滅の端的が分れば、鶯の歌も柳の色も、梅花の香も水車の音も、古今の聖賢英雄豪傑も、皆な悉く嚴然として其の目前に存在することが分る。總ての疑念も懷疑も、一切此に氷解して、一佛場に安心するを得るのである。神佛と云ふは元より個々の形體は無いから、實窮すれども至らぬ。譬へば極寒に當り、一水滴を落せば、忽ち一滴凍氷するが如きである。這の邊に至つては、聞く人なく、言ふ人無く、木人自ら歌ひ、石女立つて舞ふの趣がある。又禪語同様に云ふ言葉に、觸目悉く佛事、舉足是れ道、飢ゑ來れば飯を喫し、困じ來れば眠るの外他事なしと。之れ即ち眞禪には似て居るけれど未だしである。十中八九は皆有心禪、文字禪、理窟禪であつて、口に任せて此の語をなすのである。眞實の活きたる心を以つて言ふのでは無い。故に博學英才の君子は、文字は道を學ぶの利器であるから、直に此の文字より進み、眞に安心立命を得んと欲する人は、佛敎は萬法具在の唯心論であるから、心を離れて宇宙森羅、一絲一毫も有ることは無い。念佛も題目も陀羅尼も坐禪も皆な之れ心性を自得するの公案であることを了解するであらう。現時の學者社會に於ては、古今の禪坊主などが、無闇に不生不滅など高尙

の哲理を談ずるが一體禪坊主の癖で、大膽至極の事であると批評するが、それも尤もなことである。常に物質を論じ、物理を談ずる者から観たら、それもその筈であらう。然し禪坊主に取つては、之れが生命である。此の心性の研究に未到の所あつては一大事であるから、真劍に實窮するのである。余が狂歌に、

生れるも死ぬるも夢の浮はしを

渡るはむねのよい月のそら。

と詠じたことがある。當時の賢人君子と呼べる人達でも、這の世界の森羅萬象を見るに、單に目で見ると思ふのと、心で見ると思ふのとの違がある。此の見ると思ふのは、全く月日の御光でない。心の真如の御心で見るのである。如何となれば、此に心無ければ、天地萬物妻子眷屬我他彼此一切無いのである。其の又無いと云ふ者も無いのである。故に心は日月であつて、見ると云ふも真如の月の光で照見するのである。目は心の奴僕に過ぎぬ。なせかと言へば、目に落ち込んだ微塵を、他人の目を雇ひ來つて取り出すでないか。故に吾人も折角萬物の靈長と爲つたからは、此の生死の道を研究して死際には有漏路から無漏路の古郷へ歸る心持

で、此の世界へ來た肉の姿を返したいものである。

要するに、心は彌陀である。心は大日如來である。心は無量光である。心は無量壽である。心は智慧光佛である。此の昔の佛達も、元より無始無終であるが、人具足の心も、亦全く此の佛達と同物同體であつて、無始無終である。又不増不減である。又不生不滅である。之れは理窟禪でも分り易い。而して又處變れば名もかばり、難波の「あし」も伊勢の「はまをぎ」と云ふことがあつて、佛敎の真如の月が、彼のエネルギーであらう。何と謂つても可い。眞理に古今東西の差別はない。故に吾人の心は煩惱も妄想も有りながら、皆悉く彌陀であり、大日である。心さへ持つて生れて來て又其の心を持つて死んで往きさへすれば、何處へ行つても不自由はない。

心とは宇宙森羅の原なれば

何不足なき物とこそ知れ。

一一、本來無一物

「至人は常念空洞にして象なし、總て我造にあらざるなし。夫れ萬物を會して、自己と爲す者は唯聖人かとは、但だ古語たるに過ぎぬ。然し禪旨は這の空洞の無極中に安住するを要するので、真理は又茲に存するのである。」

見我身者發菩提心聞我名者斷惡修善知我心者即心成佛聞我說者得大智慧之れは實に宇宙眞宰の語であるから、余が言うても誰れが言うても違ひは無い、毫末の相違が無い。此の眞理より見る時は、往古神代の時に於ける日月も、今歳今日も、日月も見る目古今があるばかりで、日月其の者には古今の別はない。明星も其の通り、釋迦の見て大悟した明星も、今日見る明星と變りは無い。同じく釋迦の見た明星で、同じく神代の日月である。此の思想を例の歌で表せば、

天である地である、われば山である

川であるのもみな我である。

此の「我である」と云ふのも、實は間違つたことではあるが、唯茲では假りに例へて言つたまでのことである。言葉などや文字に附いて廻はらぬ方がよい。總じて佛敎は唯心敎であるから、其の見聞覺知に觸るゝ所都て悉く吾人の唯心所現でないものはない。此の見聞覺知の四の者は、外界の萬境が心に觸るゝ其の時早く起る所の作用であるけれども、外界の萬境も、實は自己囊中の財を持ち出したに過ぎない。故に假りに心境二つと分けても、心境は不二である。杯と老人も言ふが、實はまたく迷が取れ切れぬため、言葉をかかりて言ひ現して居るのである。眞實佛敎の眞意は

菩提本無樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃。

と云ふ六祖慧能大師の心である。此の本來無一物と云ふは、諸佛の慧命であつて亦吾人の靈性である。自性と云ふも、自心と云ふも、皆同じことである。諸佛之を明らかめて、而も頭々非實物々眞空である。耳を以つて聞くのでもなければ、目を以つて見るのでもない。三際を推窮すれば、心境不二と云ふも、亦主觀客觀を超越すると云ふも、凡て之れ等の研鑽は、畢竟龜毛兔角である。決して達摩西來の直指無證無修の意では無いのである。

一三、道は近きに在り

世の中の人は、禪學と云へば、此の活社會から飛び離れた、往き來も出來ない山の奥の、朽ち果てた古寺の中に在るもので、所謂二十世紀の文明とやら云ふ世界には到底出せぬ代物と思つて居るが、斯う云ふ思想は、却つて十七八世紀位の思想である。禪と云へばとて、敢て少林寺の嵩山のみに行はれる宗教ではない、今日東京の日本橋の上で行はれる宗教である。既に古人は、

坐禪せば四條五條の橋の上

ゆき來の人を深山木に見て。

と歌つて居る。又必ずしも禪は坊主にならねば行なへぬことで、坊主の専用物であると思ふのも大なる誤りである。どの宗旨でも、坊主は其の教を傳説し、其の修行の方法を教説して、所謂理想境に引導するに止まつて居る。宗教は坊主のために出來てゐるものではない、三千世界の一切衆生のために出來たものである。故に其の眞實大道は、見難き遠方に在るのではなく、日常生活の極めて手近き處にあるので、殊に禪の如きは、一舉手一投足から、片言隻語を陳べる上にあるのである。

今朝起さること、顔を洗ふこと、洗面器に水を盛ること、顔を拭ふこと、手拭を掛け

置くこと、室内を歩く一歩々々のこと、佛間に至り朝時禮拜を爲すこと、食卓に向ふこと、一粒の飯を餓鬼に施すこと、施餓鬼の偈を念すること、合掌箸を取ることを、飯を喰ひ汁を飲むこと、茶碗を置くこと、呼と吸との間に茶の一口を呑み下すこと、總て禪ならざるはなく、皆な活々とした禪である。此の禪が意にも言葉にも動作にも充ち満ちて、一切の事件を解決し行く人を、眞の禪者とするのである。固より禪即人、人即禪、即心是佛、即身成佛を自覺し信解して居れば、禪の大道は、自然と其の全面を現して、手近き所に於て却て高尚なる禪理を體現するを得るのである。

一四、戀と禪

余は元來利發な坊主らしい事を言つても、元はと云へば、尾張の百姓の子であるから、却々今の口ほどにはいかぬ。夫れ故今熟々考へて見ると、成程余が幼少の頃より、無常の念には富で居たが、亦色情の念も、人一倍あつたかと思ふ。其證據は我十四五歳の時、或る家の娘が、非常に洒落者であるから、我は懸想して、世の中に此の様な嬋娟たる女もあるものかと思つて、明暮に戀ひ焦れたことであつた。夫れも

向の娘もさう思つて呉れ、ばよいが、さうではない。唯余が切に思ふばかりの片思ひ、娘は余の事などは少しも思つて呉れぬ。世の中に長持の蓋と云ふが、成る程向があかなけりや、何にも役に立たぬと思つた。其の娘を六年前で、五十四年目に逢ひましたがいやはや、大婆さんで、二度ビツクリ。昔の嬋娟たる娘は、今は怪物見た様な容で、頭は禿げ山に白雪で、齒は斑に二三本残つて居るさりで、腰は弓のやうに屈むし、顔には百波皺をなし、耳も目も疎くなり、如何にも昔の面影は少しもないから、流石に余も感せずには居られなかつた。乃で心の中で狂歌を詠んだ。

昔我がおもひこがれしその人の

いまは見る目に涙こぼる。

然し此の娘ばかりでない。吾人お互に、此の娘のやうになり果てるのである。御用心々々々。此の事を考へると、吾人も皆同一で、彼の女に恍惚、此の女に恍惚と云ふが、其の人に向つて、汝は彼の女の何所に戀慕するかと尋ねると、其の返答は、曰く言ひ難しである。此の心性の修養も、水を呑んで、冷暖を知る如く、曰く言ひ難しである。吾人も毎日、見たり聞いたり、境界を、其の境に轉せらるゝか、將た自

己の境界に歸るかの二途のみである。熟々考ふるに、時は流水の如くで、去年が何の間にか今年となり、昨日は酔夢の中に、今日と流れ行く、恰も汽車汽船の中に寝て居るが如きものである。今宵横濱を出づれば、明朝はナヤンと大阪に着して居る如く、茶を喫む間も、飯を喰ふ間も、休なく死ぬる方へ、一息々々に近寄つて行くのは、丁度此の流れで止まざるやうなものである。噫、少壯は老い易く、嬋娟の花は散り易しである。然るに浮雲の如き富貴を恃んで、此の世界に於ける心配と苦勞とは、わが一人の持前なりとする人がある。此の人は、縦令五千貫目の身代であつても、其實は糞溜の蛆虫が、雪隠を無上の世界として楽しみ、井戸の中に游泳する蛙の如き者である。井戸以外に、眞實安心立命の樂境あることを知らず、又我身の無常であることも氣付かず、死んでも命のある積りで、朝から晩まで、欲の皮だけ千枚張り、ドエラク厚く成つて居るのである。思へば昔の竹馬は、今の杖となり、籠のあつた髪も雪と化し、花の姿は散り果て、今の我は昔の我にあらず。否々、今の又今、その又今も、矢張り流水の我が命であるから、朝の露の朝日を待たで、消えなんとすることを思はなくてはならぬ。又人のことはさて措き、我身さへ其の心の儘な

らぬ浮世ぢやもの、よく考へ廻らさねばならぬ。誰れ人も心の儘になる浮世なら、誰しも年は取りたくないもの、何時の何時までも年は二八か二九からず、花の顔柳の腰に、櫻咲かせて梅が香を持たせて見たきものぢやわいなア。儘ならぬ浮世の有様は心ばかり己れやれと思つても、腰はかゝひし齒は抜ける、年に一度の豆撒きも、敷取るばかり何やら斯うやら鶉香にしても、顔は師走の乾蕪、耳は遠く目は疎く、樂の無き身となり果てるが、扱て誰をか恨み、誰れをか咎めんである。古歌に、

眼はかすみ耳に蟬なく齒は落つる

ふらねどつものいたゞきの雪。

皺がよる黒子は出来る腰かゝむ

天窓ははげる髪しるくなる。

手は振ふ足はひよろつく齒はぬける

耳遠くなる眼はうとくなる。

身に添ふは頭巾襟巻つる目がね

たんば温石しびん孫の手。

うとくなる氣短になる愚痴になる

思ひ出すこと皆くどくなる。

又してもおなじ話に孫はむる

達者自慢にむかし高言。

と云ふがある、如何にも能く寫して居るでないか。近日客あり謂つて云く、「私は坐禪しやうと思ふが、色々の煩惱が出て困ります」と。余答へて曰く、

煩惱を打ら割つて見よ寶月

合ひはつねの都なるらん。

元よりも無繩自縛の這の夢を

ほどけば直ぐに佛なりけり。

如何なるか是真佛。余答へて曰く、

われ人の呼吸のうちは無量壽の

つねに光をはきつ喫りつ。

なにごとくに人の心を迷はせぞ

罪やがて身にかへるとぞきく。

又近日眞宗大谷派の高僧にて、當時三河に住める人より、狂歌數首を送り來たれるその中に、

地獄いや極樂もいや娑婆もいや

生れるもいや死ぬるのもいや。

と云ふ一首があつた。余も返歌しておいた。

地獄よし極樂もよし娑婆もよし

生れるもよし死ぬるのもよし。

又彼の高僧より、

なむあみだ佛も我もではいりの

いさは其のまゝ極樂の風。

と言ひ越したれば、

心とはあつきおまゝにとろゝ汗

年はくつたが四五杯はやる。

と返して置いた。此の上人は年は未だ壯くはあるが得難き偉人であるから、書翰の遣り取り繁き其の中に、面白き雑話の端もある。拙とは無二の道友で有るから、其の一を擧げると斯うである。茲に達磨が面壁の圖を畫きて、其の文句に曰く、
おあしもないのに、線香立て、郭然無聖なからさわぎ。イザト書付差出され、財布必竟不可得で、九年滅法遊んだばちで、はりこ姿に浮身をやつし、店の軒にもたたずんで、流れくの身のはてが、火吹き達磨の姿かな。
と。戯言では有るが、其の實高僧である。拙衲も今以つて相見はせぬが、此の頃信州から濃尾三遠を巡錫するから、此の途次立ち寄る約束をしておいた。

一五、現異祈禱は眞法に非ず

余は文久の頃、美濃の國に居つたが、其の頃可兒郡邊には、御嶽講の信者夥多かつた。彼等が病人の爲に祈禱するのを見るに、中座の人白帯を持ち、頻に御嶽座王大権現と并に覺明行者を念じ、晝でも夜でも、丹精を凝らして祈念すること、凡そ三時

間餘りに及ぶ。(蓋し覺明とは元尾張の貧民であつたが種々困苦して遂に通力を得たと云ふ元和頃の人であつたと。愈々祈念終らんとするに際して彼の中座にある人の持つ白幣より自然に水の湧き出づること三四滴なり之れを利證の効驗として病者に飲ましめ平癒を祈るのである。

又木曾敷原宿と奈良井宿との間に鳥居峠と云ふ所がある。此の峠に御嶽講者の遙拜所がある。彼の御嶽山を距ること直徑六里と云つて居る。余は其の頃雨を侵して此の峠を越えたが信徒二三十人、數珠を揉み丸字を切り並に隱語を唱へて祈念すること眞に頻りであつた。往來の人なども之れを傍觀するものが多かつた。其の中の一人の言ふやうには暫時にして御山現れ出づるなりと。左もあることかなと不思議の感に打たれ余も好奇心に驅られ雨の篠を亂すも顧みず足を留めて之れを熟視しました。が、躑躅の如く山の裾を見たのである。之れ信徒が丹精を凝し心を山にして祈つた爲に遂に山の半腹を露はしたのであらう乎。

又世に寶生護摩と云ふものがある。火渡護摩と唱するものもある。熱湯をば忽冷水にする法もあると聞いて居る。是れ等は皆な其神力の致す所である。余

は信々之れを考ふるに其の行者の心専ら白幣を持つて水を求むるにあらば其の心凝り固まりて遂に此の奇特を現し倍々人心を壓迫するの念に基くものか。又御嶽山を篠つく雨の中に現はすも亦行者の心専ら山を露さうと念つて一心に祈るが爲めである。又紙上に火を焚き劍の上を素足にて渡るも亦専ら心を凝結するに依らざるはない。彼等行者の中心多くは奇特を露して人の心を硬くし信心をして倍々堅固ならしむるも畢竟其の行者は邪見を募りて惡業報を増すばかりである。人生に於て何の得る所があらうぞ。異を現し衆を惑はすは眞正法とするに足らずとは釋尊の教誨である。而して其の眞道とは何ぞや曰く水鳥樹林念佛念法念僧是れである。人々具足ある一念は萬法を具足する。久遠却より盡未來際に至るまで不生不滅不増不減である。増減なき故に常樂我淨である。此の四徳彼羅密に遊戯三昧をなす之れを眞の安心と云ふのである。縱令奇特玄妙を以て人を誑惑するも唯一段の妖怪場裡であつて眞實安心立命の地位でない。我が安心立命とする所は萬劫千生に涉りて變動無き所の圓明無相涅槃寂靜の地位を自知自得するにあるのである。

昔或る所に一人の老婆があつた。平素常に神佛を祈つて居つたが、終に奇怪の事を感じるやうになつた。毎夜唱ふるに神明佛陀の名號を以てす。會々病者の家中に在るも、此の婆子の心には、全く神佛の來現あるが如くに覺ゆ。而も老婆の心は恍惚として、夢に襲はるゝ如く、或は稻荷と云ひ、或は不動と云ひ、或は鬼子母なりと云ひ、或は守護神なりと言ふのであつた。又或る時の如きは、某者の六親姉妹の亡者であるなど、言ふ。人彼れに問ふ事あれば、答ふるに昔日の事實を以つてするに、事甚だ審である。依つてその老婆を信する四來の男女は、實に踵を接して居つた。又未萌の事を尋ぬる者、門前市をなす有様であつた。斯くて三四年を経たが、偶々老婆自ら病んで床に就くこと二週間ほど過ぎると、老婆が常に祈る所の神佛等が、夢中に現じて、須臾も枕頭を離れず、老婆悲鳴して襲はるゝこと益々酷だし。傍に人あつて呼び覺すに至れば、夢忽ち破れて、冷汗滿身を濕すこと屢々であつた。其の實子之れを白隠禪師に白して救を請ふ。時に禪師老婆を見舞ひ耳根に近づきて、大唱一聲せられた。時に婆子初めて夢の覺めたがやうに、禪師に謝して云ふには、私の病篤きに隨つて、神の來たれること益多し、寸時も安慮の思あるこ

とがありませんでした。禪師の曰く、汝元來惡魔の爲に魅せられると已に久し。汝の心を奪つて惡趣に誘致しやうとして居るのである。汝元來思ふ所、口走る所、都て是れ惡魔の所爲である。而して禪師の眞讀したまへる大般若の靈牘を四方の戸口に張らしめられしかば、其の後奇怪のこと頓に止みたりと云ふ。魔力が加はるから、既往の事及び未來の事を豫知豫言するのである。或は之れ人間の及ばざる所もあらうけれども、異を現するは眞法に非ず、眞法に非らざる者を信するは、所謂迷信であつて、愚の至りで、大に注意すべき事である。

一六、山間の清音

却説前段に於て演べた、信州鳥居峠で、雨中御嶽山の現出を見て、奈色井宿の太寶寺へ投宿して見ると、村の祭の翌日のこと、赤飯や牡丹餅が少し、ふの字で、臭みが付きさうな所から、和尚も澤山喰うて往けと言ふ。仰に隨つて、私も此の時だと思つて、親の讎でも取る氣になつて、喰つたともく思ふ様やらかした。夫れから鹽尻の方へ行つて一里ばかり來ると、頻りに雪隠へ行きたいから、どこぞと思つて

索した。どうも旅行にはこれが一番困る。所が往來はたの家で、お嬢さんと其の親御と二人で、椽側へ出て、縫物をして居るから、大便秘所を貸して下されと云ふと、ハイクと申す故、私が何處で御座ると聞くと、茲で御座ると云ふから、見ればお嬢様等の縫物をするすぐ後で、漸く二三尺も隔つた所であるから、私も何となく氣の毒のやうな氣がするけれども、やるせなき儘にやらかすと、腹の中でガラ／＼ブウ／＼の大雷公であるから、此のお嬢様達は、此の音を聞いて、なか／＼みだの光の音など、言つて、研鑽はなく、互にクス／＼と内へ飛び込んだ。私も手持無沙汰で、夫から諏訪の温泉寺へ行つて投宿した。其の夜雲水の坊様達は、日本聯句と云ふのを示した。

斯る事は、拙衲一向に分らぬ。然し余は此の山間の清音を喜んだ。普通雲水などは、徒らに世間嘲で夜明して、さて坐禪となるとコク／＼初めるが例であれば、斯る遊は好ものと思ふ。歌俳諧を好む者など、時に觸れては、其の實情を吟詠するも亦よきことである、拙衲は歌も詩も作れぬが、狂歌は好む所で、實感を狂歌にしたくなる。狂歌は誰れるも分るから、通俗的で、また平民的であるから、拙衲は好きぢやわい。何でも早く分らにや、當世向で無いと見える呵々。

一七、土偶人形の躍り場處

偕て吾々の五體は、全く四大の化物であつて、追つて元の四大に歸らにやならぬ。暫く此の身茲に現はるゝは、風前の燈の如く、朝にして夕をばからず。今日は達者で居ても、明日は葬禮といふ世相。凡そ此の世界中に十五億八千人ありと云ふが、一日に死する者十萬四千人、一時間に死する者四千七百五十人と云ふ統計である。さうぢや。實に死ぬ人も多いものぢやが、我も人も皆なこの土に歸らんとしつゝある者で、出づる息は入るを待たぬ習で、いつ死ぬか分らぬが、一息々々が死出の山に近づくばかりである。一休は、門松や冥途の旅の一里塚と云つたが、そんな遠い話でない、一息々々ぢや。古歌に、

老の坂登り／＼てあと見れば

急がぬ道に先の近さよ。

實に妙である。纔に此の線香一本燃る間に、線香一本丈の巾有る黄金を積んで、

過ぎつる時間を購求せんとするも、却々に得べからず。故に他人の事ではなく、我身に深切あらば、少しは善根もして置かにやなるまい。遅い早いの差はあるが、必ず死ぬる世の習ひ、此の身は土の化物で、再び土になるものぢや程に、正直正路の心を持つて、少しは來世の福徳植えて、犬猫などの種を蒔いてはならぬ。前のく世の夢が此の世に寫り、此の世の夢が來世に映する。智慧や力で行くことならず、之れは全く業報ぢや。利智の人も貧にして、愚鈍の者も富貴であると謂ふことも出来る。例へば伯叔の賢にして、餓死し、路蹠の兎にして、壽きも、皆是れ因果應報の理に依るのである。昨日は過去、今日は現在、明日は未來と云ふ如く、又昨日恩を施して、今日其の報謝を受くる如く、今日物を竊んで、明日縛に就くが如きものである。久遠劫より輾轉して、水の流れて車を廻すが如く、暫くも止る時なく、生れ替り死に替り、喰ひつ喰はれつ、千辛萬苦して、お互に今は人間の姿を受け、善惡邪正を分別し、聞き分けるだけの智慧を持つて來た。之れを幸に、其の智慧を、實の持ち腐りにせず、ナット聞き分けるがよいぞ。今拙者が斯くの如く喋々と、寢言に類したことを言つてゐるが、皆なは之れを聞いて居る。其の説く我と、聞く諸君の身は、茲で死んで何

國へ行くことか。今此の人間の幕を引き替ると、次の幕は何の芝居になるか、よく考へて見るがよい。人の一生は過ぎ易く、我や先き人や先きけふとも知らずあすとも知らぬお互此の身は、元の雫、萩の露の命で、晨には西施や、小町の姿があつても、忽ち夜半の煙と共に白骨のみを殘れる哀れさよ。既に無常の風に誘はれて、老幼男女の差別なく、麗しと誇りし其の容姿も、忽ち桃季の春色を失ひ、其の係は永く天を尋ね地に求むるも、再び見ること能はざる世の様ぞや。經には、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者なりと説いてある。あはれと云ふもなか／＼愚なり。久遠實成の阿彌陀佛は、不生不滅にして、寂光淨土に在ませば、至心に信受して、無量壽佛の名號を唱ふべし。口に念佛を唱ふるも、心は處々に散亂せば、恰も竹筒に入れたる風聲か、さらずば春の田面に鳴く蛙に異ならず、何等の得る所もない。故に念佛の行者は、一心一向に念佛を唱ふべし。一心一向とは、純一無雜で、餘念雜はらざるを云ふ。純一は思慮分別の色々の念の交らざるを云ふ。此の正三昧に住すれば、煩惱其の儘菩提となり、生死の妄想其の儘涅槃と變ず。念々刹那に報土往生は疑ない。但し往生とは、誰れ人も此の身死して後、魂魄獨り西方極樂淨土へ飛んで往

くものとはかり考へて居るが、之れは大なる誤りである。専修他力一念往生とは、釋迦の本意であつて、彼は淨土門に於ても、前念命終後念即生と教へる。故に無量壽經にも、「如彈指頃往生彼國。如一念頃即得往生」とも説いてある。而して其の一心一向、或は一心不亂とは、即ち三昧であつて三昧は禪定である。依つて禪定と念佛とは異名同體であつて、自他差別ないのである。此の三昧とは、絶對平等であつて、念々、是れ悟道の見性、念々、是れ往生淨土、念々、是れ無量壽、念々、是れ無量光、念念、是れ智慧光であるから、自他遠近を論すべきでない。禪定念佛全く同一である。經文にも明に、「極樂世界去此不遠」と説き、長者論には、無邊刹界、自他不隔於毫端、十方古今始終不移於當念とある。是れ即ち唯心は法界、法界は唯心であつて、十萬億土、六十恒河沙の佛身も、吾人のこの五尺の小身も、毫末の差違なく、一木一體の彌陀の全體であるから、浪の松吹く風の音も、長崎横濱の大砲の音も、此の活きたる佛の光明中に、無量光と智慧光の、全く無量の壽を、不増不減に保ち給ふことを自得して、懸て極樂の眞の境に入るのである。

但し茲に一言申し添へて置きたい。念佛を唱へる時は、唱へる聲なし、唱へるに

聲ある時は、念佛なしである。之れを眞の三昧と云ふ。

然れば此の如き無常の世に、徒に明し、徒に暮して、此の正三昧にも住せず、飛んだり跳ねたりして居る時は、土偶人形と異なる所がない。土より出で、土に入る、冥より來りて冥きに去る、獨りであつて獨りで行く。出て來る場處は恰も舞臺の如く躍る人間は全く土偶たるを免かれぬのである。土偶若し正三昧に住すれば、舞臺は一變して光明世界、寂光淨土となることを知らなくてはならぬ。其の時土偶人形、亦光明赫々たることを得るのである。

一八、宇宙を手毬と爲す

禪の畢竟の眞理より見る時は、宇宙萬象も、悉く皆な我が獨露身である。釋迦でも孔子でも、耶穌もソクラテスも、猫も杓子も、共に這の尊獨身でないものは無い。然しながら其の心性を自得せざれば、猫は猫、杓子は杓子に止まるのである。若し夫れ此の心性を自知自覺すれば、宇宙を執つて手毬とすることも、地獄を一毛に吊し上げることも、何んでもないことである。即ち心性を自得すれば、其の働さとし

て自ら本来の一念現じ來つて全體無心の上に現れ、よく萬境の主となるからである。此の境地に到らむことを望む者は先づ心性の研究に着手すべきである。心性は一以て之を貫く原理の存するのみである。一毛一糸一粟一塊の上に表れる所の妙月を見るまでのことである。その妙月とは果して何物ぞ、是れを聞き、是れを捕ふる者は果して誰れぞ、退いて熱烈に研鑽することを要す。例へば茲に一個の茶碗がある。此の茶碗に就いて、即今茶碗の形容を顯現する底の者は、必竟何者ぞと研究するのである。敢て遠きに求めなくともよい、この茶碗でよい。此の茶碗中、先づ妙月の宿れることを發見せよ。之れを發見し得ば、此の大自然を手繰にするのも容易の業であらう、之れ以上は言はぬ。

一九、浮世の真相

まわく浮世の様を見渡せば、貴賤高下おしなべて、苦勞苦患で朝より晩まで憎い可愛いで其の日を暮し、それでも少しは善いことあるかと待つだけ阿房で、苦勞に苦勞を重ねた末は、誰れ彼れ言はせぬ死の字で御座る。如何なる英雄豪傑殿も

死の字と來ては、蛭に鹽で、グツとも傳藏。さわくどうする。親と慕ひ子と愛するも、死の字の幕を引かれては、無線電信何のその、端書一枚の消息も出來ぬ悲しい別れ。泣いても聞えぬ、呼んでも通らぬ幕一重、それでも聲を限りに呼び立て、人目も耻ぢぬは之れも人情、無くてはならぬが、悟つて見れば、賊にをかしたもので御座る。

扱て悟るといふは、心の明月を見出すことで、此の明月皎々たる光を得れば、死出の山路も、三途の河も、全く透き徹つたものである。而して又其の心の明月を見出すには、此の禪定三昧の力に依らなくては駄目である。この明月を皆な人に持たせたい、平素より曇らせたくない、常々照り輝して置かせたいと云ふのが、老衲の病の原で、四六時中病み通しである。老い坂越しても、こんな真似して、一言半句を陳べ立てるも、皆な此の病から出た言葉。皆な人は、互に寶の月を持ちながら、持ち腐らして居る程に、老衲の病は募るばかりで、此の寶の月を自知自得せしめたいばかりに、この老の身のやるせなき儘を書いたり言つたりするのである。最早や老衲も、此の世には離縁されて、冥土の籍に入つた七十餘の老人であるから、今となつて

は嘘言も言はない、自ら嘗めた辛さを陳べるばかりぢやほどに、少しは本氣で聞い
ても下され。

先年美濃の或る居士より、老衲に鑑定を乞ふとて送られた書は、居士の云ふ所
は、白隠和尚か一休和尚かとの事であつたが、兎に角此の世へ暫くでも客に來たか
らには、お互に孫子の末を思はぬ者はない。然るに當今は學問が開けて來て、孫な
どが云ふには、日本の統計表に依れば、三十五六が定命だが、最早我が祖父も五十、六
十となられたから長生きの方だ。依つて今度も壽命限りだ、杯と云つて、ロク／＼
醫者にも見せねば、看護もしない。愈息引き取ると云ふ間際になつて、之れでは世
間の聞こえも悪し、埋葬書を貰ふ都合も悪いと云つて、やつとの事で醫者に見せる
が、此の時遅しで醫師の力も及ばねば、之れを幸と此の世の御暇で、形ばかりの葬式
を出すと云ふ風な所もある。眞に報恩謝徳と云ふ實義は、親子の間でさへ此の通
りで、紙より薄い。それが報いて三四代も過ぎると、其の家が潰れ、破産となつて
しまふ。故にドゥしても、此の五體を貰つた親は大切にしないで、はならぬ。親を
大切にするには、この美濃から送つて來た、大善知識の教訓が、誠に善い御示しであ

る筆者は白隠和尚であらうが、一休和尚であらうが、其んなことには關係せぬ。眞
によい教訓であるから左に掲げて見よう。

怒り腹立つ其の元知りやれ、兎にも角にも身最負を、人のわる氣は皆我わる氣、人
と我とは別ではないぞ、我を産んだる親佛數を唱へる念佛よりも、慈悲の心が彌
陀如來行かう／＼と極樂ねがふ、願がふ心に鬼がすむ、鬼はどこから迎にこうぞ、
はしや憎やが火の車、明日は知られぬ朝露の此の身、けふの思案が一大事欲をへ
らせば此の世は淨土、十萬億土は茲ぢやもの、死んで行くのと思ふは迷ひ、不生不
滅の道の心、不生不滅の心を知れば、いつも月夜で米の飯常に、慎み忍辱慈悲が直
ぐに佛の御座處なんの佛が助けて呉れよ、我が身助ける我が心、我と云ふもの元
よりなけりや、大千世界も胸の裡、我と云ふのは皆假の名で、神も佛も我にてあ
れば、死ぬる間際に皆うるたへて、若しも車で迎に來たら、己が心で造りし鬼へ、己
が心で引きゆくものぞ。」

是れは大方白隠禪師であらう。縦令白隠禪師で無いとしても、超佛超祖の大偉
人でなくては、言ひ得ざることである。今日の赤凡夫が早合點して、神も佛も頑愚

無智と見る時は地獄へ入る事矢の如しである。其は何故かと云ふに、心が全く天地の大原理に到着歸一した者は、實に這の宇宙森羅萬象の間に、全く罌粟の實一粒程も他物なく、眞實性心眞如の月光輝き渡りて玲瓏玉の如く、天界の日月星辰も、地界の山川萬象も、悉くこの眞の月の光でないものはなく、實に天地宇宙に充ち満ちたる大圓明鏡であることを自知自覺するのである。然るに赤の凡夫に於ては、其胸中眞如の月のありながら、地獄や鬼や、極樂や佛や、其の他差別淨穢善惡の見を以つて、其の月の光を覆うてあるため、わたら月の面の現れず、光も照りそはぬのである。さればこそ大智の者は心の研鑽を忽にしてはならぬのである。

生れるも死ぬるも夢の浮橋を

わたるは胸の霽月の影。

極樂も地獄も紙のうら表

佛も鬼も吹くいきの風。

禪學は針の穴からふじ山も

須彌も虚空も一目にぞ見る。

更に一步を降りて歌ひ出せば斯うである。

天である地である、あれは山である

川であるのがみな我である。

當時は禪學を研究するとか坐禪をすると云ふ連中は追ひく多くなつて來たやうであるが、之れは善い事ぢや、書生などでも吉原通をする者に較べれば、よほど善い。然し頭の中だけで、やれ客觀的だの主觀的だのと推考して居る間は、約り理窟屋の間屋で、眞禪は更に見えぬから、禪學でもやらうと思ふ者は、先づ理窟の頭を切り捨て、からにやならぬ。禪學と云つても別物でない、銘々各自の心の研究を云ふので心は鏡に物の寫るが如く、一切萬境を寫し取る。我は常々外界より來る一切萬境を細大漏らさず寫し取る大圓鏡を持つて居る。其の大圓鏡と心とは本來不二一體一物であるから、其の心の鏡に一切萬境の寫り具合を研究實鑽するものが禪學である。

見て聞いてもの云ふ聲は天地も

しらぬむかしの父母の面影。

凡そ見聞覺知は全く一なることを自知するが近い。念佛を唱ふるも眞の三味に入れば念佛に聲なしである。我が口で唱ふる念佛を聞くのは聞く人と唱ふる人と二つである。此の能聞所聞能唱所唱二つに分れて居る間は眞の念佛三味に到らぬので眞實の念佛三味とは唱ふる時に聞く人なく聞く時に唱ふる人なき境地に到達したるを云ふので、こゝに始めて唯心の佛も見得られ極樂の捷徑も茲に開けるのである。

唯心で搦きかためたる此の宇宙

うちそともなき月のさやけさ。

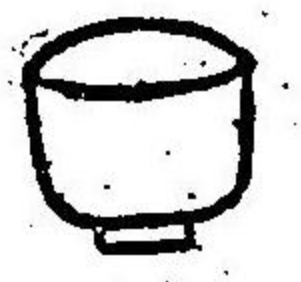
老人が道友に和田古泡氏と云ふ人があるが生死には關せざる心性を詠じて、古歌に比較して示された。

燈の消えて何國に行くやらん

濱の松風山寺の鐘。

燈の消えて何國に行くやらん

明の鳥と入相の鐘。



一個茶碗大海汲盡
一見光明遍照億劫

以上を端書に認めて送られた。燈の歌の原歌は「燈のきえて何國に行くやらむくらきは元のすみかなりけり」と云ふのであるけれど、前の如く下の句をかへて、斯道の妙を悟らせようとの老婆深切であらう。又某禪師の道歌に、
燈を早くけせくけし見れば
障子にうつるかけだにもなし。

と云ふのがある。前の燈と此の燈と果して同じきや、同じからざるや、こは老人の讀者に問はんと欲する所である。請ふ直下に之れを答へよ。先づ初心の者は、斯ういふ所へ手を懸けて見て上れるか上れぬか、自分で試みて見るも善いことである。敢へて問ふ「前燈と後燈と是れ一なるか異なるか」。

二〇、殼見識の見越入道

昔見越入道と云ふ者があつた。此の男は首を伸べると、いくらでも伸びて、高い

雲の上までも届く實に驚歎するに堪へて居る。されば此の見越入道は常に自慢して高言を吐くこと限りがない。我れ一度此の首を伸ばせば、日月も眼下に見え、唐天竺は申すに及ばず、萬國までも一目に見ることが出来る。されば國內の如きは、如何なる津々浦々に至るまで悉く知り、何事が起つて居るかを、知り盡して居る。然し世の中の人々は、皆井中の蛙で、唯だ僅ばかりを見聞するばかりである。故に我が見る所と世人の見る所とを比較すれば、萬分一にも當らない、百萬分一と云つても、まだく足らぬと、痛く自慢して居つた。或る時其の朋友來り、餘りに自慢するゆゑ、『然らば只今唐天竺に如何なる事件が起つて居るか、早速之れを見て我に語り聞かせよ』と請うた。入道打ちうなづき、『そはいと安き事である、暫し待ちたまへ』と言ひつゝ、さも自慢げに其の首を伸ばして、唐天竺は言ふに及ばず、萬國までも一目に見える面白きこと限り無しと、高言壯語はすれども、注文の唐天竺の出來事も語らなかつた。朋友は大に立腹し、入道の兩足を取つて打ち倒し、其の長く伸びたる首筋に打ち跨り、『汝は萬國までも一目に見抜くほどのしれ者であるに、我が如き無能者に打ち倒され、斯くも難儀して苦しむは何故ぞ、いかにく

と責めた。入道は首筋を踏み付けられ、苦しみながら言ふやう、『我は萬國を一目に見抜くけれども、悲しきことには我が首が高くなるに随つて、肝心の足許が遠くなつて來て、見ることが出來ぬ。汝は遠くを見るには出來ぬけれども、近き足許が見えるゆゑ、汝の方は我に勝れて居る。是を思へば、汝の如く遠見の力なきも、足許の見ゆる方がましぢや。我が如く唐天竺をも見抜いても、足許が見えぬから、遂にかゝる憂き目に逢ふのである』と、涙を流してさめくと泣き悲しんだと云ふことだ。

偕て今此の世の中を觀るに、博學多識の學匠にして、肝心の身を修むる所の足許の見得ぬ見越入道もあれば、諸藝は何事も巧者であつて、近き足許の家業に疎い見越入道もある。或は又横文字の二つ三つも覺えて、それで西洋諸國の事情にも通曉して居るかの如く、無闇に其の鼻を高くして、家事の整理も出來ぬ、妻女の見越入道もある。其の他當今は色々の見越入道があつて、互に首較べをして居る、所謂見越入道の寄り集りであるけれど、さてくこれ等の見越入道も、其の足許が見えぬから、足許にある寶も見へねば、足許に潜む敵も分らぬ、いと惘然なる者共である。

道は近きにあり、之れを遠きに求むべからず、真理は手近な足許で十分究めることが出来る、わざ／＼遠きに求めなくともよい。例へば極樂浄土も十萬億土の向に求むるは間違で、極めて近き我が胸中に在るのだから去此不遠とも經に指してゐるのに、指先ばかり見て居る。たい遠き所を見ようと首ばかり伸して居るのは、大に注意すべきことである。自伐者無功、自矜者不長と云ふも、是れ此の事を謂ふか。

此の頃の禪坊主などを見て居ると、やはり此の見越入道が多い。其の言ふことを黙つて聞いて居ると、ツに乗つて、やれ死んだ先がどうだの、かうだのと、如何にも明り／＼見えるやうに、高慢臭いことを言ひ立つて居る。今宵雨が降るか風が吹くか、それさへ知れぬ癖に、遠い死後のことまで彼れ此れ言ふ。斯んな坊主は片端から用捨なく、殴り付けてやりたい。昔の一休和尚すら、

妻や子がそばでなげくも聞き入れず

死んで行く身になんの引導。

と狂歌を以つて、誠めてをられるでないか、少しく志のある者は、先づ足許より堅め

て行かねばならぬ、薄氷を履んで堅氷を見るぢや、一足に堅氷にはならぬ、先づ我が心をして、如何なる事に遇うても、更に動搖せざる、金剛堅固の心とすることが肝要である。

二一、所謂ハイカラ思想

或る新聞に斯う云ふ事が記載してあつた。某曰く、余の平素念頭を離れざる疑問は、禪宗に於ける師家、其の者の悟りなるものである。今無遠慮に彼等の正體を現さば、先づ彼等の學問を奪ひ、彼等の口を箝し、彼等の議論を制し、彼等の強情我慢を抜き去つたならば、果して剩る所のものは何ぞ、唯醜穢の身體あるばかりであらう。縱令幾百倍の顯微鏡を持ち來つて之を照らすも、其の所謂悟りなるものは、見出すことが出来ぬであらう。不字文字はどこか、見性成佛はどこか、一超直入如來地はどこか、其の了解に苦しむと云ふやうな記事であつた。

さて此の記者は如何なる見識を以て、斯る言を吐くか、一向知らぬことであるが、之れ等は所謂ハイカラ思想とでも批評して置いたらよからう。兎に角、智者は愚

者の言を選ぶと云ふから、おながち捨てたことでもあるまい。先づ此の事を銘々各自の胸裏に向つて、自問自答して見るがよい、如何なる答が出るであらう。實際世の中には見性々々と云つて鳴く鸚鵡が澤山ある。先づ自己の研鑽をして見るがよい。

三二、瓜々の一聲

昔釋迦如來が一の金婆羅華を拈出された時に、唯だ迦葉尊者一人のみ微笑をもらしたと云ふが、今拙衲が茲に一枝の梅の花を持つて居る、更に釋迦如來と違ふとはない。又此梅の花と金波羅華と違はない、拙衲が其の儘摩訶迦葉尊者である。此の理が會得出來ねば、眞理は見えぬ。眞理には古今東西はない、常に一にして不變である。然るに世人は何のあの馬鹿坊主が寢言を云ふと思ふ時、既に東西の別をなして居る、差別の見を懐いて居る。此の法螺吹き坊主めが何を云ふかと思ふ時に、心裡には地獄が現れ極樂が出る。眞理が分らぬから、随つて疑問が出来る、迷が出る、見る物もあれば聞くものもある又思ふものもある。實に先から先と、際し

なく迷悟染淨差別界が開かれるのである。眞理は瓜々の一聲中より既に現れて居るのに、其の瓜々の一聲を揚げてから白頭重ねて霜を見るに至るまで、這の眞理が分らぬから、彼れの此れのと當てつ比べの考を起し、妄想分別するのである。己が心性の原理、瓜々の一聲さへ了解すれば、古今東西を指頭に見ることは出来る。然るに西洋の哲學者は斯う言つた、やれ倫理學者は斯う云つて居ると、眞に濱の眞砂を算うる様に擧げ來つても、日も尙ほ足らずで、そんなことをして居るうちに、目も見えなくなる、耳も聞えなくなる、足腰も利かなくなつて、いやでも應でも燒き場へ擔いで行かれるのである。要するに宗教とは、其の自己の心性を尋ぬるのが根本である。此の心を離れては、一毛たりとも存在する物はない。心は實に萬法を具足する、萬法には此の心が遍滿して居る。故に其の一以つて之れを貫く所の心性を探求することが何より大事である。古人も、

萬眼本非色、滿耳學非聲。

文殊常觸身、觀音塞耳根。

と言つて居る。故に若しこの心性を知り眞實の悟りに至れば、盤陞赤壁の賦を談

ヒ、木人歌ひ石女舞ふも、更に疑ふ所なく首肯し得らるゝのである。此の境界に至れば玲瓏たること明月の如く、而も其の光は三千世界を遍照するのである。和田泡氏の歌に、

坐禪して見たは見たなり阿陀如來

そのばそのまゝ見たは見たなり。

二三、禪は骨董品也

田舎に引き籠つて、耳を傾けて聞いて居ると、色々なことを言ふ者がある。先づ聞いたまゝを列擧して見ようか。興味津津々たるものがある。

△「當今文明開化の世の中で禪學などするのは要らぬことだ。斯んな馬鹿氣たことに無駄骨を折るのは愚の至りである。」

□「イヤこの世事辛い世の中で、禪學をするのは物好きでやるのだ。禪學なんかを本氣でやるのは如何にも馬鹿らしいけれど、一寸と骨休めにやつて見る位は好いもんだ。」

○「なに禪學か、禪學を物好きにやるつて、そんな馬鹿なことがあるものか。一體禪學は一種の骨董品だよ。骨董品なんか吾々の買ふ物ではない、あれは骨董店に陳列してあるのを店頭に立つて見て來ればよい。」

黙つて聞いて居れば、何を言ひ出すか分らないけれど、一は無知の徒の批評で、一は誹謗的に言つて居るのである。何れにしても不憫の奴ばらである。然し禪學は骨董品であると謂つたのは面白い。禪學は骨董品に違ない、先づ年代から云つても古い品物だ、仲々サビが附いて居る。總じて錆が附いた位の物でなくては價値がない、東京の日比谷公園見たやうなものぢや。さて世の中と云ふものは、文盲千人目明一人と云ふほどあつて、目の利く者は實に僅少なものである。骨董品なども目の利いた者が求めると、實に無上の重寶となるけれど、目の利かない者に取つては一毫の價もない。禪學も亦然りで、耳の明いた者が聞けば、心底に徹透して有り難い教法であると信仰するけれど、心なき者に説けば、如響如塵で、一向屁を放つた程のこともない。寔に如響如塵の徒輩のみ多くて、目利きの鮮いのは不憫の至りである。拙柄なども老耄の身を以つて、斯ることを言ふのも、約り不憫さのあま

りから出たのである。

二四、明闇裡中の眞理

拙衲近日某所に在つて、訥辯ながら一場の演説を爲した。大衆中に一居士あり、出で來つて拙衲に問うて曰く、

「只今師が演説中に例へば此の室内に、一つの洋燈を點すれば、一燈だけ明かである。又二つの洋燈を點すれば二燈だけ明かである。乃至三つ四つ五つの洋燈を燈せば尚ほ更明かである。又此の室内一盃に燈せば一層明かになる。然るに此の燈火を一時に吹き消す時は、眞の闇となる如く、現世の相對的明は闇に歸し闇は明となる。唯だ吾人心性絶對の明は闇なくして常に明であつて、此の明は古今東西を貫き渡つて居る。實に吾人の心程、眞實明かなる物はない。」と。此の演説に就いては余は不解である、願くは師之を再び解きたまへと。拙衲乃ち、

「明なるを明と知り、闇なるを闇と知らば、それでよし、柳は緑、花は紅、その通りに見

ることを得るのは、心性の明玉を所持するからである能く、此の理を了解し給へ。

と言へば、居士漸く首肯して、略此の旨を了解したやうであつた。何事に依らず、禪は分らぬ事を言つて、人間の思想以上の事を考へねば、禪にはならぬと心得て居る者が多いが、それは誤解も亦甚しいと言はねばならぬ。禪だとして、寒を暑と云ひ、暑を寒と云ふ譯には行かぬ、唯だ其の寒暑を寒暑とし、寒暑到來變化する間に、一貫したる眞理を發見するに止まるのである。明來闇去、闇去明來と云ふことがあるが、其の明來闇去の理より眞理を把持して行くので、其の眞理を捕捉し得た所に、心性の光明赫々として輝き渡るのである。常に云ふ如く眞理と云へば遠き所に向つて、個然たる一個の物のある如く思ふけれど、眞理は常に近き所に流れつゝあるのである。身毛一本抜き取つても、其中の中より眞理の光明を探し出すことが出来るのである。人多く洋燈を點じ、瓦斯燈を輝じ、或は電燈を用ふるけれども、未だ其の明闇裡中の眞理を把持し得たるものあるを聞かない。依つて今之れを舉示して、話題としたのである。

二五、古釘一束

(一) 人情は萬國一也

凡そ人間の最も満足に思ふことは、他人が我を知ると云ふことである。之れは即ち人間相互に肝膽相照すと云ふことで、同情を以つて我を能く知り、遺憾なく我が人に知らるゝと云ふことが、最も愉快に、また最も満足なことである。先づ此の天地間に於て、最も大切なものは、我が父母か否父母でもない。然らば我が妻子か否我が妻子でもない。然らば果して何物が最も大切な物であると、能く調て見ると、我れ自身が最も大切な物である。我が命である。故に此の天地間に最も大切な命を君の馬前に捧げると云ふは、此の上もなき美事善事で、忠の極度である。斯かる忠節を盡して、美事善行となすこと其の物が既に精神的愉快で満た満足であるべきであるけれども、其の死に臨んで、遺言するのを聞けば、其の多くのものは、我が亡き跡を思ひ出し給ふことあらば、これに過ぎたる本望はないと言つて居る。之れは萬國も同一で、之れ亦人情である。故に人情は萬國も同一であ

るけれど、若し眞實宗教に依つて居れば、人情を超越して居るから、かゝる女々しき遺言はのこさず、白刃の下に春風を歌ふやうになるのである。

(二) 一片の回向

人の死期臨終に於ける一言は、實に悲しきものである。我が爲に一片の回向を賜らば、たとへ草頭の露と消ゆるも、我が心の満足何事か之れに如かんとは、多くの人の臨終に於ける最後の一言最後の欲望である。此の斷末間の一言を聞けば、我と云ふ物より外に、何等の貴重物もないのである。故に其の我なる者は冥途に在るも黄泉に在るも、或は天國に在るも草葉の蔭に在るも、何れに在るにせよ、其の名を呼ばるゝを以つて、無上の歡喜とするのである。されば此の一片の回向も亦無上の功德となることを思つて、朝夕友人知己等のために、回向をなすは、何よりの善根功德である。

(三) 其の種を選べ

農夫は穀物を得んとする時、先づ其の種を選択して之れを蒔く。之れは尤ものことで、其の種を選択せずしてよき稔を得やうとするは、山に遊んで魚を求むるよりも困難なことである。人間も亦然り、平素畜生のやうな心を持つて居れば、牛馬犬猫などにも生れる。之れは我が獸心を以つて所作した報いであつて、決して神佛のする所ではない、俗に所謂身から出た錆で、如何ともし難いのである。之れを佛法では自業自得と云つて居るが、凡て業因の報果であるゆゑ、先づ其の種を選んで善因善業を蒔かば、自づから善果善報を得らるゝのである。然れば其の理を誤ることなく、よく其の種を選択して之れを行へ、必ず芳草美花を見ることが出来るのである。

(四) 夢幻泡影の世の中

老人が夢は、此の日本と云ふ夢。天地萬象陽冥と云ふ夢。相模高座郡新磯と云ふ夢。原僧運と云ふ夢。本より貧乏寺であるから、喰ひたい飲みたいと云ふ夢。生きて居ると云ふ夢。亦た死ぬると云ふ夢。斯かる夢を見て居るが、之れ等は皆

本來の夢であつて、此の夢、實は永劫に涉つて不増不減身である。常樂の都に住することを自得するのは、全く信仰と云ふ夢の神通力である。之れを自知自得するのが安心立命と云ふ夢であつて、全く此の世は夢と夢の連鎖で出来て居る。外の人々各自に就いて言つても同じいことで、皆な夢の世の中に夢を見て居るのである。故にこの世の中のことを夢幻泡影と云ふのである。

夢の世とおもふ夢路に夢さめて

又夢を見る夢のうきはし。

(五) 三千世界を一呑にする

悟道と云ふも、別の事ではない。全く際限なく廣がつて居る所の三千大千世界を一呑に呑み盡して仕舞ふことである。三千世界を一呑にするなど、云へば餘り大きな法螺を吹くやうであるが、之れは決して法螺でない、眞實一呑にするのである。諸君賢人も、毎日この世界を呑んだり吐いたりして居るのである。之れを知ると知らぬとで、釋迦達磨吾人、凡夫と云ふ様に、差別が出来て来るのである。故

に之れを自知自得すれば、釋迦や達磨と同じやうになるのであつて、此の外に別の仔細は無いのである。余が歌に、

まゝ喰ふも寝るもおきるも働くも

鼻と口とのいきばとけなり。

(六) 坐禪念佛一的に對す

世の學者の如く、徒に理論の高尙なる斗りを喜んで實着なる心に開業の行爲がなかつたならば、學問は畢竟一種の玩弄物に過ぎない。然し學問は知るための學問でもなく、論ずるための學問でもない。全く學問する目的は道を得るにあるのである。故に古人も朝に道を聞いて夕に死すとも可なりと言つて居る。先徳も道は貧道を尊ぶと云つておかれた。老人などは別して無學の方であるから、洞の濟のと云ふ名の標準を用ひず、念佛でも何でもよい、唯吾人の生命の一息を研めて自ら慰安を得た如く、人にも慰安を得さしめたいと思ふばかりである。念佛から射た矢も、坐禪から射た矢も當る的一つ的で、少しも違つたとはない。頭日、佛性

居士よりの狂歌に、

念佛も坐禪も同じ法の道

迷はで進め無爲の都へ。

二六、追善の心得

所謂功名花上露、富貴草頭霜、爭甚麼豪強、智力逞甚麼驕傲兇頑。『博物新編』故人の年回法事を營み追善供養を爲すに當り、草葉の蔭に在るも、或は七寶蓮臺に在るも、故人をして最も満足せしむるものは、誠心誠意を以つて故人を追懐すると云ふ一事である。去る者は日々に疎しで、敢て忘れようと思ふのではないが、日顔を見ざれば、自然に疎うなるは亦已むを得ぬことである。誰れしも世務繁多にして其の別れし當時は悲嘆もしたが、日數積るに隨ひ、漸く其の人を想起することも薄く、二年三年と經るまゝに遂には年に一度の祥月命日をも忘れ果てるのである。如何にも其の當時こそは、故人の面容も髣髴として目前に現じたけれど、漸く遠ざかるに隨ひ、思ひを凝して其の當時を追想し、辛くも其の面影を想ひ起すに

至るは、人情の常である。されば一度の年回若しくは祥月命日に當つて、身を清め心を深くして、故人の生前を追懐し、赤心誠意、冥想默慮、幽明相通じ、其の故人と語るが如く談するが如くするは、是れ故人に對する恩を忘れず、又故人の愛を忘れざる唯一の法にして、人情の美之れに過ぎたるはないのである。故に其の心を深くし、虚榮の心を去り、偽善の念を抛ち、天真流露の境界に至つて、故人を思へば、必ず其の至情故人に感應し、又故人は其の己を忘れられず、に、懐想せらるゝことを歡喜し満足し、其の喜悅の至心亦我に感應するのである。かくて故人の上生福樂を祈念すれば、故人は必ず上生福樂の功德をも得るのである。然れば追善の心得としては、唯だ世間人道の儀式、人前の法事、或は虚榮的の年回御祭的の式典とせず、誠心誠意故人を思念すると云ふ心掛でなくてはならぬ。之れに反して、人真似的に、或は人前的に之れが追善を營み、虚榮的に、或は御祭的に供養を致すも、誠心誠意故人を思ふと云ふ一事を缺いたならば、千百の香華燈明も、遂に路傍の花と同じく、全く無意義のとなり終るのである。當時文明の風として無線電信なるもの流行す。故に靈性なる人間至誠の電火を放たば必ずや幽冥界にまで感ずると疑ない。

二七、槿花一朝の榮

禪理の研鑽は、我が心を以つて中心とするのである。若し此の心を研究し盡せば、其の境界寔に七縱八横、自由自在、上に釋迦なく下に提婆なく、三千世界無量の佛達も、盡く我が一舌頭に收まつて仕舞ふのである。譬へば大都會の人幾百萬あるも、我が心を以つて之れを觀れば、口なき眞の土人形に異ならぬ如くである。雀も飛ばず、鳥も鳴かず、花も散らず、賤の女の碯打つ槌も振り揚げたばかりで、全く造り付けである。獅子一度び哮ゆれば、百獸皆其の影を隠くすと云ふが、昔は將軍御成りの節は、萬戸悉く業を休むと云ふ如く、一度心光を放つて、三千界を照せば、一色同音唯だ我一人、其の中に立てるを認むるのみで、是を唯我獨尊佛と云ふのである。此の天上天下唯我獨尊の境地に於ては、全く無風帶であつて、ソヨとも吹く風が無い、又ガタとも響く音がないのである。故に先づ我が心の研究を第一として、其の奥の奥底の底まで研鑽し、實究し、徹透せねばならぬ。若し其の處に徹透すれば、古人の所謂一喝大地震動、一棒須彌粉碎と云ふも、何でもなきことゝなるのである。

古歌に、

もとよりも心の法はなきものを

夢のうつゝと何をいふらん。

雲もなく月も桂も木もかれて

はらひはれたるうはの空かな。

と云ふが、心性の研究もこゝに至れば、安心なものである。實に此の世は泡沫夢幻であつて、飛鳥の瀬の昨日に變るけふの習ひ、ソロモンの榮花も、平氏二年の夢も、徳川公の全盛も、野に咲く權花一朝の榮に異らぬのである。此の變化多く、昨是今非の世の中に於て終始一貫の大真理の横はるものがあるけれども、之れを看破する者は僅少なものである。其の真理は敢て遠きに求めず、憎い可愛い、飲みたい、喰いたい、好きだ嫌ひだと云ふ我が心の上に於て求め得べきものである。表面から見れば春の野を採色する千草百花美を争ひ香を競ふけれど、大地を離れて芳草美花もなき如く、我が心には千劫萬劫些の變違なき性あるので、之れを自得自知したるを悟りと云ふのである。余は狂歌に此の意を歌つた。

昔より今に變らぬ十五夜の

牡丹餅月の照りのかいやき、

親しきは親より子より孫よりも

いつもかはらぬ十五夜の月。

宇宙の萬物森々羅々として居ても、其の中に變らぬ原理を含み居る。盈つれば缺くる世の習ひ、月は新月より晦まで、夜々に變りつゝあるけれど、十五夜の月は古今變らない、時を違へず東山に圓鏡を懸けるのである。かく満月全面を向き出した所に、一點の私なき如く、禪の眞風發露の所にも、亦一片の私情なきのである。故に常に引き出す古徳の歌に、

生れ來て祖鏡の二字は知らねども

梅の小枝にうぐひすのこゑ。

と云ふ。今老人亦寢言して曰く、

無我無心などゝいふのも理窟禪

誠の無我はいふにいはれず。

二八、鬚一毛で諸佛を縛す

禪の眞風には文字もいらぬ學問もいらぬ。唯吾人の父母の其の太祖先等の眞面目が、其の儘眞禪である。余は無學文盲の老人であるから、我田引水の得手勝手を云ふ様だが、決してさうでない。全く禪に於ては、教外別傳不立文字と云つて、文字言句などに拘泥しない。眞實の禪は有心を去つて、全く無心無我になりきつた所に現はれる。無心になれば、鴉はカア／＼と鳴く、其の儘が眞風である。雀はナ／＼、犬はワン／＼、赤坊の泣く聲も、姑婆様の小言も、飴屋の太鼓のドン／＼も、總て吾人の耳目に接觸する所、悉く眞實物陀の説法、佛陀の相好でないものはない。舉足是れ道とは、此のことをいふので、決して之れに間違はないのである。夫れ故に此の佛が嫌ひになつて佛と離縁したいなど、云つても駄目なこと、萬劫千生此の佛と離縁の出来るものでないことを自知するのである。而して此の佛身を自知すれば、實に廣大無邊であつて、三千大千世界に遍滿して居ることが、自然と悟了されるのである。

故に先づ本來眞正の大道を證得把持しようと思はゞ、吾人の鬚一毛を抜き來つて、此の一毛を一日乃至一時間、一分間眺めて、一心不乱に此の鬚三昧に入り、自分の此の鬚になり切つて見るのである。若し此の鬚三昧に入つて、全身鬚になり切つて見る時は、此の鬚一本は、手品師の手箱の様に、種々雑多に變化し來るのである。男ともなれば、女ともなり、猫ともなれば、杓子ともなる。或は花、或は月、或は山、或は川、宇宙の萬象は、此の鬚一本より現れ來るのである。是を以つて經には、於一微塵中見諸世界と説かれてある。諸佛世尊も、此の鬚一本なれば、諸の菩薩聖賢も、悉く此の鬚一本である。然れば、此の鬚一本の研究に依つて、僅に鬚一毛を以つて諸佛菩薩をも縛し得るのである。拙著『禪學早わかり』にも申す如く、彼の飯喰ふ茶碗の研鑽を初むれば、そ／＼と其の眞境に到り得るのである。

總じて學者の禪旨を研鑽する所を視るに、凡そ理窟が多くて、眞風は顯れ難く、本來の面目坊も、其の相を隠くして仕舞ふかと思はれる。此の理窟禪を離れ、文字禪を脱し、眞實無我無心の境地に入り、無聲の聲を現すを禪の修養と云ふのである。學者は學問になり切つて仕舞へばよいけれど、學問になり切らずして、却つて學問

におし使はれて居る。之れが有我心の證據である。又理窟になり切つて仕舞へば、其處に理窟も無くなる道理であるのに、理窟になりきることが出来ずに、却つて理窟の支配を受けて居る。之れも亦有我心の證據である。依つて學問に取り付かれて居る其の心理窟で縛された其の心を研究して、自由自在の身とならねばならぬ。手近い所で云へば、其の心と云ふも、元は鼻と口とから呼吸して居るのが原で、此の源に溯つて研究し、此の源泉より萬流の生ずることを自得すれば、其の處は即ち不可思議光明世界であつて、其身は其の儘盡十方無礙光如來である。我が身は本來宇宙の主宰大王であつて、億兆の民其の麾下に集る事を自知し、是に初めて安心立命すること疑ひないのである。

二九、耶蘇も達磨も我肚裏の一物

佛と云ふも、其の佛に縛さるゝ時は、忽ち是に塵境生じ煩惱起り來るのである。塵境煩惱固より佛の塊りであるけれど、其れを見分くる眼は盲じて仕舞ふ。誠に佛と云ひ煩惱と云ふも、二あるにわらず不二である。不二にして而かも亦活宇宙

を成して居つて、生死を離れたる實在である。故に今我此處に死するも、宇宙も萬象も尚は依然として存在する。而して此宇宙及び森羅の萬象は、全く我である。此の眞實實在者を指して佛と云ふのである。神と云ふも亦差間はない。神と云ふも、佛と云ふも、全く我を云ふので、我は即ち神である。又佛である。是れを知らざる者と呼んで、凡庸と云ふのである。先づ我が心を知つて佛となり安心立命すること、は敢て六箇敷きことではない。「いろは」の一字の音聲を知れば、それで心の奥底までも、全宇宙をも明むることになる。「い」と云ふ一音中に、萬音を攝し、全宇宙萬象を悉く包容して漏さないものである。故に此の一を知れば、自ら十明にして我が心も明となるのである。若し此の境界に到達すれば、高慢の角も、我慢の角も、自他平等であつて、萬里一條の金色如來である。眞に此の場に至れば、有も無も、變りなく平等一味有る者は有るが儘、無き者は無きが儘、眞に極樂淨土である。余は七旬六才の老眼多病の者である。唯々後昆の爲に、此旨を領得せしめんと、思ふのが、又其の上に持病となつて居る。若し此の旨を領得し、其の境界に到着すれば、耶蘇も達磨も、共に我藥籠中の一物である。吾人の心性と云ふは、固り我ではない。

異靈神も、造化神も、三世諸佛も、常々我が此の眉毛の先で、蜻蛉返りをすることであると自知すればよい。何事も全く自己の外に一物も存在するものは無い。我を離れては砂石一箇も存在しないのである。是れを知らざれば、本來の面目を得たと云つても、未だしである。隻手の聲を聞いたと云つても、難しである。知行合一だとか、或は良知だとか云ふ者もあるけれど、畢竟するに、是れを云ふに過ぎぬのである。人畜鳥類總て自分の體を此の上なき善き形だと思ひ込んで居るけれど、一歩退いて之れを觀れば、水面に於ける波の如きものである。若し達得した者より觀れば、夢の世中に夢を見るやうなもので、實際の所水面の漣漪よりも便りないのである。たい心性のみは千古萬古變らぬのである。

三〇、蛆虫佛同一體

宗教と云つても、世界中に色々の宗教があるが、其の中我が佛敎は、殊に人心に慰安を與ふるのが本分である。彼の藤村操の様に、疑惑を抱いて、華嚴の瀧に投入すると云ふは、まだ、眞實の宗教の、暖い花園に遊ばなかつた爲めで、誠に氣の毒な

ことである。彼はいさ少し其の疑惑を解決する爲めに力を盡し、且つ又彼の疑惑を解決し與ふる人に接したならば、斯かる愚なることをなさず済んだであらう。宗教は人の疑惑を解決し、人心を明晰にして、實に愉々快々たらしむるもので、之れが全く宗教の本分である。先づ厭世的の人の考は、此の覆載の間には、一物として自由なものはない、意の如くなるものは無い、吾が境遇は萬物不如意である。經に愛別離、苦怨憎會、苦と云ふ如く、人生も鳥獸も、都て強食弱肉で、全く修羅場であるから、斯る修羅場不如意の境に長らへんよりは、如意安樂の淨土の妙境に生じた方がましである、不束にも單にかゝる厭世的思想を以つて、天壽を完うせず、自ら死地に投するのである。當今の者は一體學問知識がありすぎて迷ふのである。智者は智あるが故に惑ふといふが、根柢なき知識は人を惑はし、人を害するので、却つて善くないのである。先づ堅固なる根柢を造つて、其の上に學問もし、知識をも磨けば、決してかゝる厭世的觀念は出來ぬのである。其の堅固なる根柢を心の中に造ると云ふは、其の心を明むること、人の心は心の思ふ通りに、他より力を添へずして、眞直ぐに進ませればよいのである。元來心は明々品々として居て、些の邪なき

ものである。夫れを還つて外界からおし曲げやうとするから善くない。現時心理學など云つて、人の心を研究するやうであるが、心は實に靈妙なものであつて、學的に研究しても、眞實の處には達し難い。心は無形無象であつて、物に應じて形を現はすものであるから、吾人が朝起きて顔を洗へば、其の水も心であれば、盥も心である、手拭も心である、又娘の笑顔も心である、子供の泣き聲も心であれば、都て心でないものはなく、やがて朝飯を喫して雪隠へ行つて、其の中を臨けば、白蛆がウヤクとして居る、之れも心である。故に心は皆一木一體である。釋迦の説に、十萬億土の彌陀は、六十萬億由旬の御身の丈けであると云うてあるが、其の極樂淨土の彌陀如來と、此の吾々が生息するため、二六時中鼻と口から吐いたり吸つたりして居る息と同じ物で、今老人が吐き出す一息も彌陀如來の一息に入り、又西方で阿彌陀様が、お寢氣でなさる大欠の一息が老人の一息になつて居る。實に活潑々地で、暫時も休む間もなく、常に活動して居るのである。又三十三天の帝釋天や、第六天の大魔王等が時々時候の爲に風邪に悩んで、嚏をして、鼻と口から吐き出す其の息が、又其のまゝ吾々の鼻腔から吹き出す息と、毎日々々互融して居るのであるから、

全くこゝが不増不減である。又人間は萬物の靈長であると、人間界だけで、自稱して居るけれど、吾々の境界もさしたる善い境界ではない。彼の雪隠中の蛆虫を、如何にも汚穢の處に居るからと云つて、之れを憐んで絨毯か毛布の上へ揚げてやる、渠等は此の毛布の上が却つて地獄でもあるかの様に厭ひ、彼の糞溜の方を喜んで、天にも地にもない樂境であるとして居るのである。此の蛆虫も、又蚤虱蚊蜂も、共に鼻も口も耳もあつて、吾々人間や、乃至神佛と同様に、口からと鼻からと吐き出す息は同じで、一木一體の眞如の明月を、各所持して居るからである。此の眞理は王公貴人も穢多も平太も、此方で吐き出す息を、直ぐ向の彼の貴顯紳士や妙齡の淑女が吸ひ込んで居る。

斯ることを言ふと早合點して、心は風である、空氣であるなどと思ふ人もあらうが、然うではない、是は十萬億土も四維上下も、行き涉りたる無垢の光明佛の全體に名づけたる水晶界の中の住居であるから、此の裡の衆族は、人畜鳥獸、蠢動含靈、皆悉く同一の光を受けて居るのを、吾々は別の心を各一つづつ持つて居るやうに、思つて居るのであつて、之れが抑も迷の初めである。之れを無明と云ふ。明な光ある上

より之れを覆うて、其の光を無からしめて居るのである。此の覆を撤去すれば、本来の光明一時に現前輝き出すのである。此の世に於てこそ貴賤貧富大小不同ではあるが、戦々兢々念起念滅の其の儘が、這の活きたる大光明の探照燈を一々所持して居るので、之れを真如の明月とも云つて居るのである。

南無と云ふ聲も我にはあらざれば

さて名はなんと付けて由兵衛。

斯く人間も鳥類も虫蝶も心は一つのものである。唯だ其の構造と機械とは因果律に依つて違ふ、智慧の有る無しが違ふばかりである。人間界より言へばこそ、我は萬物の靈長であるけれども、因果と云ふ捷木に當て、見れば、一分一厘も曲げることが出来ぬ。誰れが何と云つても、捷木が明瞭に之れを證明するから、乘引ならぬのである。

三一、人喰虫の福德世界

釋迦如來の如く、既に悟を開いて、大光明を以つて照して見れば、觀見法界草木國土、悉皆成佛であつて、一物として成佛せざる者はない。前に云ふ如く、糞壺の蛆虫も吾々も、王公紳士も、乃至帝釋天も、暫く形體尊卑の皮相的差別はあるけれど、同一の大圓鏡と云ふ玉の中に居るのであつて、其れ相應の働を示して居るのである。彼の蛆虫は糞の中を善き世界と樂しみ、外に如何程善き金殿玉樓があつても、此の糞の裡を安養淨土と感じて居る。此の蛆虫になり切つて見れば、全く此の糞の中が、其のまゝ、眞の極樂世界である。又蚤や虱は、人間の體を富士山の如く、我が生れた所は、食物は多量である、實に福德世界であると思つて居る。而して矢張り蚤や虱の心になり切つて見れば、是より外に善き世界はない事と思つて居る。其の他の有情を見ても同じことで、彼等は皆な、其の生れた場所や棲息して居る土地を、無上の極樂淨土と心得て居て、何れも夫れに執着して居るのである。此の執着心があつて、而も飲みたい、喰ひたいと思つて居るのは、迷つて居るからである。若し悟を開けば、斯んな執着心が脱れて、平等眞如の光明を放つであらう。固より釋迦如來の如く、悟つた眼を以つて觀見すれば、法界の有情非情共に佛になつて居るとも見

得べく、又其の佛の大作用として、各自働を現前して居るとも觀らるゝであらう。勿論其の本體論から云つても、釋迦とか蛆虫とか、山とか川とか、一々差別して居らう道理はないので、悉く這の眞如の水晶玉の玲瓏たる、平等の佛體である、古歌に、

千早振る神の社は我身にて

出入の息は外宮内宮。

身はふいと出入の息は風なれや

うち割つて見よ風も火もなし。

とある。然し言句と云ふものは、誠に便にならぬもので、此の歌の通り、眞理は之れで間違が無いが、風も火もなしと云ふと、其處に直ぐ無しと云ふ聲が残つて居る。此の無しと云ふ聲が耳の底に残つて居る間は、眞實此の歌の意も取れねば、悟りにも入り兼ねるものである。若し此の無しの聲になり切つて、無しに同化してしまふと、其處に自然と入口が開いて居て、悟りに入ることが出来る。其れにはやはり研鑽實窮が要るので、些の研鑽なくして、疑念は氷解しないのである。やはり風來つて門自ら開くで、門は風が来るか、人が押すか、門自身が開くべき仕掛にしてある

から、外來些少の力に依つて開くのである。吾々も修養親參其の功を積み、悟の門の開くべき仕掛に出來上がれば、風も火もなしと云ふ風で、フウツと門自ら開き、法界平等の眞實極樂淨土が現前するのである。

三二、朝露人生中の長壽法

人生は實に無常である。紅顔の美少年も、絶世の美人も、全く朝露一瞬の間であつて、忽ち冷たき土に歸つて血液の運行を止むるのである。彼の楊貴妃も、小野小町も、皆これ既に昔の人、百年の生命誠に覺束なく、人生七十古來稀也で、七十の坂を越える者が鮮い。縱令五六十と生きて居つても、花の色はうつりにけりないたづらに、我が身世にふるながめせし間に、嘆聲を洩らさずには居られぬ。泥んや此の死なる者我が前面に立つた時には、逃げんと欲して逃ぐることが出來ぬ。避けんとして欲して避けることが出來ぬ。世が文明に進むにつれて、避雷針と云ふやうなものも發明されたけれど、如何に人智開明になればとて、到底避死機の發明を見ることが出來ぬ。實に此の死の運命に接した時は、如何なる王公大臣も情ないも

のである。憐むべし無常河邊の骨、猶是れ春閨夢裡の人である。然れば人間は一年でも永く此の浮世に長がらへたいと云ふ所謂生命慾があつて、此の爲めには殿方も浮き身を要すのである。然し徒に悶々苦惱をしても、既に死の神の我が前に立てる時は如何んともすることが出来ぬから、平素より衛生に注意して、先づ色慾食慾を慎み、而して他方に於ては精神的修養をなして、此の何時死地向ふか分らぬ心の中に大安慰と大快樂とを得て、たとひ一年はおろか、一週間でも長壽し、以つて心持よく本の郷里の土に歸つて行くがよいのである。而して其の精神上修養の心得として、老人は是に唯だ三箇條だけを呈して置く。

第一條 吾々は毎日、少しでも善いことをして、少しでも悪いことは爲さぬこと。

第二條 悲觀的の心も樂しき方におし向けて、常に樂天的に面白く、且つ幸福なる日を送ること。

第三條 人間萬事塞翁が馬と心得て、此の會者定離の世の中に處しても、惣て諦めの心を持つべきこと。

此の三條に就いては別に説明を要せざれども、吾々人間の本性に就いては古來多

説學者間にあるが、要するに善とするより外に考へられない。故に人の性は善であるから、吾々各自相應の善をなせば、自然に其の心に愉快を感じ、寝ても起きても心持ちよく、氣も伸々とするものである。是に反し、人と不和をなし、喧嘩口論でもすれば、既にかゝることが善いことで無いから、自然と心に不快を感じ、互に心持悪くなりて、會うても別れても、常に不愉快なものである。又此の世に於て悲しきこととに遭遇するも、人力は神佛に及ばざれば、其の悲しき事柄を變換することは出来ぬ。依つて其の悲しく思ふ心を、樂しき方に向けかへて、所謂方向轉換をすることが必要である。人間萬事は塞翁が馬で、善いことも悪いしき事になり、悪しきことも善い方に越くものである。吾々は通力を有たぬゆゑ、明日以後、否々此の一息後のことは分らぬのである。吾々の運命が此れより後如何に繰つられて居るか知ることが出来ぬのであるから、善いことあらば、其れを見て歡び、益々善いことを爲し、悪いことや、悲しいことがあらば、之れを諦めて心を樂觀的に取りなし、心をして常々大安樂、大安心の境に居らしむることが必要で、之れが即ち人間長壽法の第一秘訣である。一休和尚の歌あり、曰く。

よしことを聞いたり見たり悪き事
見ざる言はざる聞かざるがよし。

三三、唯有一乘法無二亦無三

唯有一乘法無二亦無三と云ふは我が心である。迷悟二と見るも二あるにあらず。佛法王法と見るも二あるにあらず。唯一乗の法あり我が一心あるばかりである。譬へば一枝の花を見るに花を見る時は我ながら、我の時は花なしである。諸君が迷ふのも彼と是との二つを見たがるからで、是と彼れとの二つは同時に人間には見られぬ。故に彼の時は彼となり、是れの時は是れになれば、此の二は二にして二にあらずである。有りとも云ふも無しとも云ふも同じことで、拙老が有りとも云ふと、其の聲に應じて有りと思ひ切り、無しとも云ふことを思はぬ。又無しとも云へば其の聲に應じて無しと思ひ切つて、先の有りと思ひ出さぬ。それでよい。此の有りと無しを同時に思はうとするから、迷も起るのである。有無二にあらずして一である。都て花を見る時も、花の時は花になり切つて、我が心は花になつて思案して

居る花の外に心はなし、一である。又我の時は花が心になりきつて、心の外に花は無し、全く花と心とは一である。此れを心得て萬事に應用すれば、決して憎い可愛いの迷に陥らぬのである。心を離れて世界に一物なく、一絲一毫も心の上には存するもので、元は我が心である。

○法華經曰、唯有一乘法、無二亦無三。(譯して曰く、唯だ一乘法のみあつて、二も無くまた三も無し。)

○仁王經曰、形無常、主神無常、家。又曰、有本自無、因緣所成。(譯して曰く、形に常主なく、神に常家無し。又曰く、有は本と自ら無なり、因緣の成る所なり。)

○法華經方便品曰、知法常無性。又曰、法無我性。(譯して曰く、法は常に無性なるを知る。又曰く、法に我性無し。)

○大日經曰、心主自在、覺自心、本不生。又法無我性。(譯して曰く、心主は自在にして自心の本不生を覺る。又曰く、法は無我性なり。)

○弘法大師曰、以無住爲諸法本。又曰、法界即是諸法體。(譯して曰く、無住を以つて諸法の本と爲す。又曰く、法界は即ち是れ諸の法體なり。)

○大日經曰、是法無有盡、無自性、無住。(譯して曰く、是の法は盡くること有ることなし、無自性にして住することなし。)

○維摩經曰、生死涅槃爲二、若見生死性、無生死。(譯して曰く、生死涅槃を二となす、若し生死性を見れば生死無し。)

○華嚴經曰、了達生死猶如夢、故經一切劫無怖畏。又曰、佛以法爲身。又曰、如來法身、非是身、湛然常住如虛空。(譯して曰く、生死猶如夢の如しと了達するが故に、一切劫を経るも怖畏なし。又曰く、佛は法を以つて身となす。又曰く、如來法身は是の身に非ず、湛然として常住すること虚空の如し。)

○涅槃經曰、衆生心體從本已來不生不滅、自性清淨。又曰、一切衆生悉有佛性。(譯して曰く、衆生心體本よりこのかた不生不滅にして、自性清淨なり。又曰く、一切衆生悉く佛性有り。)

扱て次に王法を以つて佛法を見るに、佛法即ち王法で、王法と佛法と二もなく一致して居るのである。先づ教育勅語を拜讀するに、忠孝を以つて國體の精華とし、教育の淵源とし給ふこと明であつて洵に此の忠孝の二は日本帝國固有の公道で

ある。而して今佛敎の教勅を見れば亦この忠孝の二道を以つて王法の大本としてあるのである。暫く諸經の聖文を擧す、誠に看よ。

○華嚴經曰、國有君王一切獲安、故君王爲一切衆生安樂本。(譯して曰く、國に君王あれば一切安きを獲故に君王は一切衆生安樂の本となす。)

○又曰、王者民父母、以法攝護令衆生安樂故。(譯して曰く、王は民の父母なり、法を以て攝護して衆生をして安樂ならしむるが故に。)

○心地觀經曰、世間以王爲根本、一切人民爲所依、猶世間諸舍宅柱爲根本而成立。(譯して曰く、世間王を以つて根本と爲す、一切人民の依る所たり。猶は世間諸の舍宅の柱を根本と爲して成立するが如し。)

○又曰、一父母恩、二國王恩、三衆生恩、四三寶恩。(譯して曰く、一に父母の恩、二に國王の恩、三に衆生の恩、四に三寶の恩と。)

○又曰、若有人民能行善心、敬輔仁王、尊重如佛、是人現世安隱豐樂。(譯して曰く、若し人民有つて、能く善心を行ひ、仁王を敬輔し、尊重して佛の如くなれば、是の人現世安隱にして豐樂なり。)

○又曰、父有慈恩、母有悲恩、若我住世、一切說不能盡。(譯して曰く、父に慈恩あり、母に悲恩あり、若し我世に住すること一切なるも、説き盡くすこと能はず。)

○妙法聖念處經曰、見國王時、起尊重想、見父母時、起親愛想。(譯して曰く、國王を見る時、尊重の想を起し、父母を見る時、親愛の想を起こせ。)

○自愛經曰、國之無君、猶體之無首。(譯して曰く、國に君なき時は、猶は體に首無きがごとし。)

○勝軍王所問經曰、王以慈心觀諸人民、既如子想、彼一切人民亦復於王如其父母。(譯して曰く、王は慈心を以つて諸の人民を觀る、既に子の想の如し、彼の一切の人民も亦復王に於けること其の父母の如し。)

○梵網經曰、孝順至道之法、孝名為戒。(譯して曰く、孝順は至道の法なり、孝を名づけ戒となす。)

○報恩經曰、父母最勝福田。(譯して曰く、父母は最勝の福田なり。)

○寶積經曰、汝等當知、尊重供養於父母者、是人常有釋梵護世之所扶持。(譯して曰く、汝等常に知るべし、父母を尊重供養する者は、是の人常に釋梵護世に扶持せらる

こと有らん。

○本事經曰、假令有人、一肩荷父、一肩擔母、盡其壽量、曾無暫捨供給、衣服醫藥種々所須、猶未能報父母深恩。(譯して曰く、假令一肩に父を荷ひ、一肩に母を擔ひ、其の壽量を盡して曾て暫くも捨てず供給し、衣服醫藥種々の所須猶は未だ父母の深恩を報ゆること能はず。)

以上は佛教徒として實踐すべき忠孝の徳義であつて、之れは釋迦如來の訓誨し給ふたのである。而して此の徳義は日本古來の公道道德と一致すべき所以のものである。然るに當今の所謂ハイカラ連は、色々と理窟をつけて言ひ廻はして居る。即ち親子は順送りである。子が親に向つて産んで呉れと頼んだ譯のものでない。それだから、子として親に孝を盡すべき義務が何れに在るか。親が子を勝手に拵へたら、親として子を養育することは當然でこそあれ、子として親に盡すべき義務は少しもないのであるなど言つて、父母に直接議論をおし向けるものさへある。斯う云ふ子を持つた父母は、必ず蔭では隠れて泣いて居るに相違ない。既に教育勸語の上に於て、之れを直へたまひ、忠孝を以つて修身の根柢とする教育

を受けた功果は無いのである。故に世の教育者となり居る人々は、殊に此の點に留意して其の職に當るべきである。

三四、金色の佛とは吾々の事

昔は愚失愚婦を論し教ふるには、神や佛と云へば、金色の光明を放つ身軀を有つて居て、神變不思議飛行自在であると云ふと、大變有難く思つて居たものである。之れは唯其の人の憶想であつて、實は然うでない。吾々が現に活潑に活動して自由自在に此の十五貫目の形體を東西南北己の行かんと欲する所へ自由自在に持つて行かれるのが、即ち眞の佛である、眞の神である。金色の光明を放つ神佛と云つても外にない、此の吾々のことである。

昨日も厚木町の方へ行く途中、或る家で休息して居ますと、其の家の頼に心静得^〇天真と書いてある。是れ等も可い、先づ少し心性の修行をして見ようと思ふものは、第一に心を静にして行くと云ふ、此の邊から這入るも可いのである。但し達磨宗に於ては、各寺の畫像にある達磨和尚のやうに、皿の如き眼を剝き出して、天地を

一睨にして居る、此の姿が、其儘一宗の氣概を描寫して居るのである。之に依つて吾人君子も、己が心性を自知自得して、天真の原理を得て、眞の慰安を自得しようと思ふ者は、先づ吾々が茲で死すと云ふことを想うて、是れに對する心を定むるのが肝要である。之れが抑も坐禪の初門であるから、一心不亂であつて、彼の昔の屋島境浦の戦の如く、寸毫も餘念に亘らず、入息出息の這の聲三昧に入る時は、約り臨濟大師所謂五千餘軸の經卷も不淨を拭ふ反古紙と申されし如く、誠に自性を識得すれば、文字理窟にのみ奔つて居る人こそ、畫餅である。古人も直心是れ道場と云つて居られるが、之れが即今の窮理法である。譬へば人の呼吸に付いても、呼の時は吸はなく、吸の時は呼はない、之れが眞理である。直心即ち道場で、此の身即ち金色光明の佛體である。更に他所に向つて之れを求むるには及ばぬ。

三五、我は無極の中に遊ぶ

凡て世上のとは、一理を證得すれば自ら萬理に通ずることを得る。古人は其の悟を自知自得の儘吐き出して居るが、其の吐き出し方が違つて居るけれども、其の心

性の悟境は同一である。故に前念命終後念即生と云ふ自性は無自性と云ふも同じこと。又我は常に無極に遊ぶと云ふも、夫れ達人は空洞にして象なく、萬物我が造にあらざるはなしと云ふも、同一であれば萬物を會して自己と爲す者は唯だ聖者のみと云ふも、又は王陽明杯の如く、善と雖も心中にあれば金沙の眼中にあるが如しと云ふも、同一の悟りで、至人の胸中を其の儘描出したのであるから、吾々も此の一言を自得すれば、悉く萬理を自得することが出来るのである。

又世の中には、禪學と云ふものは、現今流行して居る催眠術の如きものであらうとか、或は何か神秘的のもので、もあるやうに考へて居る者もあるが、禪學は決して然んなものではない。禪旨と云つても、外に無い、達磨がいかにも憎くさげな鬚面で十方を一睨にして居る姿である。常に我々は此の一息截斷した時の心を自知する、之れより外に何物もない、眞の無一物である。なか／＼素人の思ふやうに坐禪するには、厚く蒲團を敷き、温く／＼として漸く寝む氣付いた時に、心持のよい夢でも見るのが、坐禪であると云ふやうに思考するのは、雲泥の相違である。禪旨は宇宙の眞相を知る、天地の主人公を知る、其の主人公は我である、己であると云ふ

ことを自知自得するのである。老人の狂歌に、

我と云ふ心を廣くのばし見よ、

そらも月日もわが鼻のいき。

三六、土人形も立ち躍る

凡そ人間を萬物の靈長と云へど、其の靈長と呼稱する所以のものは、此の世へ生れて來た朝より晩まで、目で見たり耳で聞いたり、或は知つたり覺えたりして、吾々が互に持つて居る所の十五六貫目もある形體即ち地性水性等で出來て居る土人形を暫く右轉左轉して、厭く咳くと此の長き日も短き夜も、左程重きとも輕きとも思はず、持續して居る所の、這の形體の中へ、出這入りする所の心と云ふものを、昔より今に至るまで、賢君子等は研鑽實窮して居らるゝから、萬物の靈長であると自負してもよいのである。當今は別して開明の聖世に稀遇して、吾人も我も、生れてから唯今まで、空しく光陰を送り行くと、厭でも應でも、必然として冷き土に歸らねばならぬ時が來る。それ故殊に平時に於いて各自其の心を究めて置いて、斯る場合

には潔く其の本土本郷に還歸するの覺悟がなくては、萬物の靈長たる名に恥ぢるではないか。吾人の心性を自知自得すると云つても六ヶ敷いと云へば六ヶ敷いやらなもの、我を離れて外に遠く在るものではなく朝より晩まで此の我が身を離れず、此の日々起り来る慾の皮の直ぐ下に在るのである。即ち見れば見る物になり切り、聞けば聞く物になり切つて居るのだから、此の心さへ自知すれば、此の世へ生れて来たことも、自ら明になる。又是れより後死んで行く先も自然と自得することが出来るのである。此んなことは、此の老人が事々しく證明しなくても、三世十方の諸佛諸聖が立ち並んで居て證明し給ふ所である。かくて人に慰安を與へるのが佛教の骨目でもあり、且つ宗教の本領でもある。

此の大勢の中に、萬一唯一人でも、此の事を眞實衷心から聞き取り、之れを實窮する者があれば、其れで老人も満足する次第であるけれど、斯う云ふ人は、即ち常樂の都へ出て来るので、其の常樂の都と云つても決して外に在るのではない、我が心の中に築かれてあるのである。たとへ幾百萬の財産を所持しても、此れは假りに持つて居るのであつて、妻子珍寶は持つて行かれぬ。我を離れず、常に持つて居

る所のものは、此の心より外にない。我が心が即ち、我の一切の寶よりも貴きもので、之れに優つて寶はないのである。然るに此の立派な寶を持ちながら、更に心の研究をせざれば、寶の持ち腐りになつて仕舞ふ。此の心の寶を研究するのを禪學とも云へば、念佛とも云ふのである。又此の寶を研究し盡して見れば、其の處に、自然と不増不減の境界を得て、自由自在、活潑々地の働をなすを得るのである。土人形の立つて躍ると云つても、此の境界に至れば、其の土人形の働さも活々として意味あるものとなるのである。

三七、悲觀的より眞理に入り、眞理に入つて活動的となる

總て世の眞實の信仰は、悲觀的境遇より入るのである。悲觀的と謂へばとて、決して厭世的の意味でなく、死の問題に想到する時に、誠の信心が起るのである。即ち世想は有爲轉變で、生者必滅會者定離である。這の夢の浮橋の世の中は、無常であつて、殺鬼常に往來して居るから、貴賤老少を擇ばず、世縁盡き次第に死の神の手

に渡されるのである。而して其の世縁の盡きるのは前世の宿業力に因るのであるから、固より凡夫人の知り得ることではない。故に何時世縁が盡きるか更に分らぬのである。若し今日世縁盡き果て、死の神の手に渡されるとしたならば果して其の後如何に成り行くか、現在此の心は何れへ行くかの問題に結歸され、唯一の心に萬事歸入した時に、大信心が起り來るのである。此の大信心こそ實に眞理であつて、悲觀的より入り來るものである。

然るに現今は、人智開進であつて、自己の性心の根原は如何なる性質の者であるかを眞接に研鑽することを要するのである。其れには此の大信心底の人となり、眞理に悟入して、性心の活動することを知らねばならぬ。譬へば彼の團十郎の芝居を見るに、見物人の眼と心は唯團十郎一人に集注して居ることは、何人も疑はない。然し、我と團十郎と二者別して居ると見るのは、未だ皮相の見であつて、眞實の見解ではない。眞實の見解は、此の團十郎の芝居を躍るのは、實は吾々が團十郎と成つて躍つて居るのである、大に吾々自身が活動して居るのである。賢君子能く思慮せよ、此の團十郎と吾々とは、元より一木一體であつて、縦横無盡線の眞如の玉

の中に互に住んで居るから、團十郎も其の玲瓏たる玉の中に在るので、それを吾々が見ると、手を動かし足を運ばせて活動するので、吾々の心が活動するから、團十郎も活動するのである。例へば鏡の前に立つて我が躍る故に、鏡中の像亦躍るが如きものである。即ち吾々が線りの糸を引くが故に、團十郎は夫れに従つて、或は起ち或は坐し、或は笑ひ或は泣くのである。此の眞理が分れば、自然と無常轉變の世の中に在つて、大活動が出来るのである。

而して其の機械の線り糸は、お互に目には見えなけれど、之れを研究さへすれば自然と心に分るのである。其の糸が分るやうになれば、又自然と大活動を作し得るやうになる。其の無盡線は無線電信で、管に團十郎ばかりへかゝるのではない。此の無線電信は、欲界色界無色界の有情無情へ悉く通するので、此の線は無盡無盡に線つられてあつて、其の線は大抵土の化物で包まれて居る。其の證據には、其の鼻と口とから出入する一息を止めて見れば、直ぐ分る。直に其の二つの穴を塞ぐや否や、土になつて仕舞ふのである。此の道理を自知自得すれば、禪學之れで十分であつて、此の眞理の土には、又は大活動を備へて居るのである。故に悲觀的

より大信心に入り、大信心より眞理に入り、眞理より、又大活動に入るのである。尙ほ一例を以つて示せば、彼の西施や小野小町や、其の壯年の頃美人であつたと云ふのも、其の嬋娟の姿、笑顔の容貌、總て我が心の上に於ける働きであつて、吾が艶、吾が容に外ならぬ。要するに萬物一體であつて、眞理は此の萬物一體の原理、一以て之を貫いて居るのである。萬物は一毛一糸更に優劣の差なく、平等の眞理に悟入すれば、釋迦靈山會上に在つて、花を拈じて衆に示したことも、耶穌が百合の花を持つたことも、同一眞理の興味あることを自知するを得て、手を打つて躍り出したくなるのである。古人が木人自ら歌ひ石女立つて舞ふと云ふたことも、了知されるので、其の後は實に大用現前で、七縱八橫の大活動も自ら現はれ来るのである。

三八、誠心を缺きし現時の社會

老人が今考へて見ると、世の中の信仰心が減退して居て、如何にも寂しい感じがする。今より二三十年前は、此の田舎(相州高座郡)でも朔日か十五日杯には、御宮様と云つて、朝早く起きて參詣をして豆を撒き、又は白米をまいて、祖母が孫を引き連

れて、おまゐりを致したもので、やがて今日では、漸くのこと元日か祭禮杯に、鑼口や鈴の音が聞える斗りで、信心と云ふことは絶えてない。實は神も佛も吾が誠の心より出るものであるのに、世は既に斯う云ふ形勢になつた。此の有り様で行くと、益手前勝手氣儘我儘の狀態になつて仕舞ふ。近く譬へて見ると、我子が嫁や嫁になつて行つて居る處へ、眞の父母が九死一生の知らせが來たからと云つて、左程に驚く者はない。唯其の心の中では、我が父母も五十六十になつたから、死なれても壽命限りだ。然し向へ何か土産物には、兄が好物の鮭の一本も持つて行くとする、いや豚の切身の方がよからうと言つて、全く病人には其の心當りもなく、兄や兄嫁を歡喜ばすと云ふ心得で、誠の父母には無頓着の有様である。淺間敷い世の中となつたと云つても、實に慨嘆の至りである。此の様な惡風が習慣になつて行くと、末には君の大神をも打ち忘れ、家僕として主恩を思はず、弟子として師長の恩を餘所にして、唯だ我が身の在ることのみを知つて、實に冷々淡々たる心になつて仕舞ふ。現に我身のことを思ひながら、現在腹を痛めて産んで呉れた父母の恩を忘却して仕舞ふ。誠心の缺乏したと云つても、之れに上越したことはあるまい。

古人も「誠は天の道なり、之れを誠にするは人の道なり」と言つて居る。故に道徳と云ふは、此の誠の心が根本となつて、忠孝仁義も行はれるのである。既に誠がないから、同情心など云ふ美しい心の起らう道理は無い。「我が身を抓つて人の痛を知れと云ふ、但諺すらある。此れは人の同情心の美しい所を云つたのであるが、父母の九死一生の場合には、我が身の上で考へて見ることが出来ない。之れを廣く言へば、譬へば道を歩むにも、老人が向から腰を屈めて来れば、此方より先づ道を譲つて老人には善き道を通らせ、我は道の悪い方を取ると云ふやうな心掛は、人の人たる道である。人間は四つ道にはならぬ、禽獸と違つて、立つて歩む所の萬物の靈長と自稱する人間の道である。然るに人間が人間の道を履行するとは出来ずに、禽獸に近き行をするやうでは、とても此の世は如何に成り行くか、未恐ろしく感するのである。此の一つが實に人間の心得で、此の心得が、やかて萬事に及ぼすのである。

同じ勞動者でも、先へ立つた親分になると、少し働いて多く働いた様な顔がした。骨を折らずに居て、骨を折つた人よりも上になりたいと云ふやうな風に變つて来た。之れが誠に大事な所で、古は決して其んなことは無かつた。然るに今日では、殆んど百人は百人ながら、斯う云ふ具合になつて、其の思想が日本中に行き亘り、眞面目に働く者が無くなつて来たやうである。是れでは國民の實力と云ふものが無いから、國家と云ふものも、立ち行く筈はない。此の誠の心と云ふものが、斯く萎靡しては、敵なくして而も自然と瓦解自滅すべき原因となるのであるから、今日に於て之れを矯正するのが最大急務である。若し之れを今忽緒に附して等閑に過して仕舞つたならば、それこそ終に救ふべからざるに立ち至るのである。

愛國の士わらば眞に此の點を考慮して、根本誠の心の養成に留意すべきである。今や我が國は、日露戰勝の賜物として、世界第一等國の列に加はつたが、却つて之れを誇りとして、華美の風ばかり行はれて、上下舉つて外觀を装ふことにのみ心を寄せて行くやうである。

今上天皇陛下に此のことを御愛慮遊ばされて、戊申詔書を下し給うたのである。然れば此の詔書の御趣意をよく體して、苟くも華奢な風なく、實力を養成せねばならぬのである。若し此の詔書の御趣意に背くやうなことあつては、國民たる

者の道を缺き、外面の花のみ美しくして、其の實なきものとなり終るのである。之れでは眞に國家の柱石もいかゞと案せらるゝのである。故に能く誠の心を以つて、戊申詔書の御趣意を貫徹しなくてはならぬ。若し此の誠の心を以つて萬事に當らば個人としても、國家として、必ず神佛の加護を受るに間違ひないのである。

心だに誠の道にかなひなば

いのらずとも神や護らん。

と云ふ古歌の如くである。東郷大將が僅かなる海軍力を以つて能く敵艦を日本海に殲滅して海上權を握ると共に、能く滿韓出征の陸軍を守り、十分なる活動をなさしめたるものは、一に天祐であると絶叫して居られたが、此の天祐なる語の裏面には、誠の心を以つて竭したと云ふことが現れて居ると、私は感佩して居るのである。誠心誠意を缺いた所に、天祐の下るべき道理がない。依つて眞に國家百年の計をなさんと欲せば、大に其の根柢たる誠の心を涵養すべきである。誠の心には必ず眞實の孝道伴ひ、忠義溢るゝことゝ信するのである。然れば誠は最も強いもので、誠に打ち勝つ敵もない。誠は實に絶對の力を有つて居るのである。

三九、絶對的快樂世界に遊べ

山田一水と云ふ人も言つて居るが、人間は此の世で如何に五欲を逞して快樂を求めたとして、之は皆な相對的快樂であつて、いつかは苦痛の來るべき快樂である。即ち日々夜々に、芳野嵐山の花盛を眺めて其の眼を歡ばし、耳は絲竹管絃の美聲に接し、鼻は蘭麝の馨を聞き、口は山海の珍味に飽き、身は綾羅錦繡の襖の内に在りて、毛燻西施と巫山戯樂しみ、無上の快樂なりと歡喜するも、實に一睡の夢であつて、此の夢は直に覺めて、曉風冷たく身に感するのである。古人も歡樂極つて哀情多しと言ひし如く、此の世に於ける歡樂は暫時にして滅じ、却つて永き苦痛を醸すのである。是れを知らずして、かゝる相對的快樂のみを欲求し、徒らに明し、空しく暮して一生を送り、さて此の世の御暇と云ふ時に及んで後悔しても、時既に遅れたり、と云ふべきである。元來かゝる相對的快樂を欲求する者は、僅に五十年六十年の年月中で、此の五尺の身體を歡ばさうとして居るので、其の目的が實に近く小さいのである。かゝる目的の上に快樂を求めようとするから、限りがあつて十全なる快

樂を得ることが出来ぬのである。凡そ限りあるものは總て相對的のものであつて、無常變遷常に移り變るものであるから、いかに美しい花でも春風一陣、忽ち散りはてざるを得ない。如何に快樂を盡すと云ふも、眞實の快樂でないから、其の快樂も忽ち苦痛に變じて仕舞ふのである。若しそれ絶對的快樂に至りては無始無終更に變ることなく、痛苦を超越して居るのである。

昔平相國清盛入道の妾に、祇王祇女と云ふ二人の美女があつて、清盛の寵愛限りなく、飛ぶ鳥も落ちると云ふ、全盛を極めて居つた。然るに別に佛御前と云ふ妾が出来て、清盛の寵遇を一身に集めて仕舞つた。すると前の祇王祇女の二人は形勢一變して、全く清盛の愛顧を失ひ、淋しく月日を送り、世の中の果敢なきを歎きて、

佛も本は凡夫なり、我等も情れば佛なり、

三因佛性具しながら、隔つる心の愛たてさよ、

と云ふ今様の歌を遺して、縁の黒髪プツリと切り捨て、二人共に厄となり、心靜に念佛三昧の身となつたのである。然るに後より來りて、意外の寵愛を受けをりし佛御前が、彼の祇王祇女の嘶を聞いて、さて、氣の毒のことかな。我さへ無くば、彼

の二女もかゝる愛目に遇はましものぞと言つて、彼の二女のことを思ふにつけても、之れも決して他所事ではなく、我が身の上も亦斯かることになるべし。今寵愛淺からずと雖も、之れも暫の夢の浮き橋、やがては同じ愛目を見ること炳然として明なりと獨り心に思ひつゝ、

萌え出るも枯るゝも同じ野邊の草

いづれか秋にあはではつべき。

と云ふ一首の歌を詠じて、奢る平家の遠からず亡ぶるのを後に見て、彼の二女の跡を追ひ、彼の二女と諸共に念佛三昧の身となつたといふ。

實に、いづれか秋にあはではつべきとは、好き悟りである。此の世は榮枯盛衰悲喜昇沈を以つて眞相とするので、かゝる世にあつて榮花を求め快樂を求めんとするものは抑も迷である。此の迷を離れて寂靜無爲、未來永劫十方法界に透徹して、無上最尊の悟りを開けば、是に自然と絶對的快樂現はれ、不變不動眞實絶對の歡喜を得るのである。故に人々の最大目的とすべきは此の悟りである、此の絶對的快樂である。

〇、斷煩惱とは煩惱になり切る事

扱て悟りを開いて絶對的快樂世界に遊ぶには煩惱を斷せねばならぬとは、古來禪宗等に於て、殆んど口癖の如く言ふ所である。然しながら此の世へ生を受けて來た吾々は朝から晩まで此の煩惱のために迷うて居るので、仲々此の煩惱を斷盡することは、吾々に取りては至難中の至難である。私も初めは大に迷ひまして、此の煩惱は斷盡せねばならぬと思つたが、よくよく考へて見れば、此の煩惱とは、元より菩提のことで、煩惱も菩提も佛陀も、一木一體であつて、煩惱を離れて菩提も佛陀も無い。故に煩惱を除けば佛も除かねばならぬ道理になるから、其の煩惱の眞正中が、其の儘佛である事が分つた。譬へば吾々が目を剥き出して、腹を立て、手を振り上げて居る所が、其の儘佛であつて、吾々が一番憎いと睨み附けた處が佛である。又吾々が一番人を可愛がる處も佛である。故に佛とは敵と組み附いて居る處とか、人を憐み助けて居る處とか、何でも心が一番凝り固まつた處が佛の一番よく現れた所と思ふ。

尤も分けて言へば、煩惱のためには佛が相手方であつて、佛のためには煩惱が好き相手方である。此の相手が迷はするのであるから、其の相手方の佛になり切り、或は煩惱になり切つて仕舞へば、相手方が無くなつて仕舞ふ故、煩惱も其の儘佛となるので、唯だ其の一方になり切るといふことが、最も肝要なことである。而して其の一方になり切つた極度はどうかと云ふに、曰く、一念生ずる所本來現じ、全體無心にして萬境の主人公となるのである。大迷は即ち大悟である。煩惱も菩提も元來泥に染まぬものである。故に古人頌出して曰く、

春有百花秋有月、夏有涼風冬有雪、

若無閑事掛心頭、便是人間好時節。

傀儡師首にかけたる人形箱

鬼を出さうと佛出さうと。

又此の煩惱と菩提とを二つに分けて見るのは、之れ凡夫より云ふことであつて、此の相手方を持つて居るのが煩惱である。我と渠と二つにして居るのは迷で、二つにして居る間は、我も渠も共に三界に流轉する因果律となるのである。眞の道人

の境界に到れば、澄み切れた明玉中に住居するので、些の差別なく一色平等である。毫末も我と云ふべきもの、渠と名づくべきものはないのである。所謂大地無寸土の境界で三界を見ること今日の如しである。此の如く言ふと、何となしに高尚で解し難いが、要するに善と云ふ名も悪と云ふ名も、其の用ひ方に依つては善もなれば又悪しくもなるので、此の二つを分けさへせずば、天は之れ、地は之れ、地で見れば、奴が聞いた奴、聞いた奴が即ち見た奴で、約り二つはないのである。之れを唯一乗法無二亦無三と云ふので、何でも一になり切つて仕舞へば、夫でよいのである。

四一、人生第一の窮理

静に推考するに、心を研鑽して、一切衆生自己の性心を以つて、永久不滅の絶對的樂土を求め、宇宙の本源に歸着して正覺を慕ふのは、即ち之れ無上の大道である。故に佛者が宇宙の真相を知るは、畢竟窮るに非ずして感ずるのである。探るに非ずして観るのである。又宇宙を知るのではなくて、宇宙に知らるゝのである。真相を悟るのではなくて、實物に證せらるゝのである。今吾人は本來實相に證せら

れつゝありながら、之れを自知せざるまでのことである。故に本來の心を開發すれば、坐禪も、念佛も、戒律も、唱題も、其の他倫理より哲學科學等の一切の學問は、自己の實相に入得するまでの教である。實相自己に入得すれば、自己は即ち實相、實相即ち自己で、其の端的全く離言絶慮である。不可稱、不可說、不可思議である。機法雙滅、能所二つながら亡ぶとは此のことである。強ひて之れを宇宙と爲し、實物となすも、約り文字言句を雇ひ來つて、暫く虚空を圖畫するに過ぎぬ。又世の中では、自力だとか他力だとか、やれ唯心だとか、唯物だとか、それ客觀の主觀のと言ふけれど、之れも理窟の凝結したもので、いざ鎌倉と云ふ場合に臨んでは、何等の役にも立たぬものである。

佛心は元より無自性であるから、又無佛敎である。故に吾人も此常に口と鼻とから吞吐して居るので、其の念起念滅の極度に徹底して見れば、心性は其の儘永遠無窮であつて、光明無量の新宇宙を出現するのである。如今學者の所謂此の五尺の小我より宇宙の大我と常に互融するを正に貫徹すれば、其の儘自己の智慧光の光りに照されて、己心は全く無量壽を自得するのである。冀くば諸賢君子、此の眞

實の家郷は吾々の性心より外に無いのであるから、他に向つて求むることなく、唯だ自己を鑽究し給はゞ、幸甚々々である。祖鏡禪師投機之歌に曰く、

生れ來て祖鏡の二字は知らねども

梅の小枝にうぐひすのこゑ。

と、また日蓮大士も、

妙の名は八巻ばかりに限らじな

梅松櫻當位即妙。

と。此の如く眞實の家郷に歸つて見れば、百非の法門も百如是である。故に余が今茲で一言すれば、即ち萬言となつて響き渡り、萬言は即ち一言に收つて仕舞ふ。古人曰く、意は書に非ずと。依つて余が又白髮の一毛を擧げて示せば、宇宙萬象は悉く這の一毛に生じ、又這の一毛に死するのである。森羅萬象凡て這の一毛に生じ、又這の一毛に死するのである。神佛も亦此の一毛に生じ、此の一毛に死するのである。昔し太陽玄禪師上堂して衆に示して曰く、

夜半鳥雞鳴卵を抱き、天明起き來つて老鶴を生ず、鶴毛膺嘴鷲鷲の身却つて烏鴉

がために侶伴と爲る、高く煙雲に入つて柳岸に飛ぶ、向晚還來す仔細に見れば、恰も似たり雲中の雁。

と、自由自在、凡眼を驚すのである。然るに世の學者等より、此の愚老をさして、法螺を吹く禪と心得て、悟り顔をする杯と彼此するが、余が眞實の精神は法螺を吹いて快しとして居る者では無い。今日老體を以つて、而も此の如く諸賢君子に見ゆるのは眞實赤誠の親切を以てするのであつて、唯だ人をして其の家郷に還歸せしめたいと云ふ一念あるのみである。上に云ふ萬物一毛上に生じ、一毛上に死すると云ふのは、生死一如であつて、生の時は死にして、死の時は生、元より不増不減の宇宙森羅の眞相を云ふので、世人の言ふが如く、有形的の物を標準として、理窟を言ふのではない。此の他『碧巖集』『無門關』『從容錄』并に一千七百則の公案と雖も、皆悉く此の天眞の眞理が元であつて、眞理には東西古今は無いのである。若し夫れ、余が斯く言ふことに對して、不是と云ふ者あらば、須く余が存命中に出で來つて、余と相見せんことを要す。余は老體を吝まず、爲めに説破するであらう。茲に余が狂歌がある、試に擧す之を看よ。

元よりも無繩自縛のこの夢を

ほどけばすぐに佛なりけり。

我人の呼吸のうちは無量壽の

つねに光を吐きつすゝりつ。

われ人のふせがわら屋の微塵までも

唯みほとけの都なりけり。

粟粒も宇宙も替りなきものを

吐き出し見れば天地萬物。

右四首の中に「粟粒」の一首は和田氏の作、次の二首は又余の出放題

一圓の眞如の玉に寝起して

土となつたり人となつたり。

まゝ喰ふも寝るも起きるもはらたつも

鼻と口との生ばとけなり。

世人日々日光を受けて日輪の恩を知らず、又佛の光明中に在て其佛を見ずちや。

二、死生天に在り

凡そ此の土の形體の機械機用を失はざる間は、此の形體を固く我と思ひ込んで居るのであるが、是れが全く眞理より言ふ時は、迷の元祖である。眞理より云ふ時は、機械も形體も眞空にして空華の如くである。空華とは空に従つて生ずるも、空性を滅することなきを知得する必要があるのである。之れを知得せざれば、所謂安心立命は出来ないのである。故に死と云ふも永き離別ではない、明日又彼は來るのである。生も天なれば死も亦天であつて、此の天の全部を兼備するは吾人であるから、生死は同時に持つて居るのである。故に吾人生れたいと思つて生れ來るのでもなく、死にたいと思つて死んで往くものでもない。之れは我と云ふ古郷を司る所の天に一任すべきである。吾人の形體も思想も、悉く天より受くる所のものであるから、謹で天に従ふべきである。縱令此の形體を我物であると思惟しても、我物を我が自由にせざる間は、未だ全く我物になり切らざるのである。我物になり切らざる物を自由にしようと思ひ煩ひ惱むのは、誤である、また迷である。

故に我が物と思ふ心を捨て、生きなば生きよ、死なば死ねと、宜敷天に一任して、我は悠々自適自然の成り行に任すべきである。

然しながら、誰れしも此の形體を保つ限りは、仲々此の苦勞悲哀を拂ひ去ることが出来ぬことがある。かゝる場合に之れを忘れ切る方法は、無念無想になるのが一番善い。此の無念無想の修練も、さまで六箇敷くない。之れは同一なる事に心を凝めて一心不乱になり、之れを幾度もく繰り返へしく言ふことである。故に念佛も唱題も、共に此の無念無想に入る所の、最も善き所のものである。此の迷の根元たる我と言つても、元の住家は、我と思ふ所の聲斗りである。此の聲も素より天から生じたもので、又天に歸つて行くものである。而して其の天と云ふも我を離れて在るのではなくて、元より我は其の天である。我が胸の裏に時計の針の動くが如く存在する所のもの即ち天である。故に其の我なる天は我に離れずして、三千世界に遍満して、光明を放つて居るので、之れを自得すれば、直に常樂の都其の人の前に現れ、極樂世界は其の處に開けるのである。

此身本來幻中物、逆順機縁不足論

無我無人無壽者、塵々刹々是全體

四三、鐵牛哮えず

(一) 道を得ること甚だ難し

余が母の歿した時は、余は七歳であつた。夫れ故余は七八歳の頃から死の一字を念頭より忘れたことがなかつた。十七八歳の時代には、晝夜不臥、三日三夜より一週間位は、夜も墓場や又は深山幽谷の、彼の天狗の住むと申し傳へて居る所の地に坐り込んで、坐禪念佛して、此の死の問題を考へた。廿一歳の年臘入接心會に五日目の鷄鳴の頃些少入所を得た。是より刻苦碎身して、凡そ二三十年を経て、漸く達磨門下、眞傳血滴の活祖意を得るに至つて、宗風を擧揚し、祖燈聯續の人となるを得たのである。余も師家より仲々高く買はれた者であるが、今熟々推考するに釋迦が拈華の時、幾萬と云ふ大衆の中で唯獨り迦葉尊者のみ破顔微笑と云ふのであるから、如何なる高尙の眞理を説いても、眞箇徹底する者は、百中の一にも至り難いのである。依つて余も高尙の眞理を説くことを止めて、無學文盲の者に理解し易

からしむる方法を以つてする時は多少其の功驗があるであらうと思ひ、極めて卑近なる所に就いて理を談ずるのである。

(二) 死即生、生即死

佛は大圓鏡に住して、一粒の粟米にも一圓理を説き給ふのである。而して佛は常に生死に住する故に、佛には別に生死ないのである。扱て吾々の此の形體は土の化物であつて、此の形體といふ機械機用の働を止し時、即ち死なるものである。吾々の形體は死んだからと云つても、我は眞實死んだのではない。主觀の客觀のと分つて、之れを研鑽する理窟屋の言ふことは、尙ほ迂遠なことである。先づ吾々の形體が其の熱を失つて死んでも、尙天地萬象は依然として存在するのである。而して其の天地萬物は、元より我が物である。吾々の心は眞空であつて、空を破壊する物がないから、此眞空とは硬の極である。縱令百萬の文字を書するも、唯一劃のみを得る者は、一言發する時、無憂樹の裡たる事を知らば、幸甚なることならむ。

(三) 余が性癖

余は性質として、此の年に至るまで、紳士居士其他に對つて、諛言を呈して錢を貰ふことを好まない。唯だ吾々が宗教に志あつて、持ち來す者あれば、嘉納するばかりである。余は田舎の茅屋に住して、今日では我が住所より二里歩行すれば、汽車で出京することも出来る。往復總に六七十錢あれば足りるのである。然れば何ぞ貴顯長者の慈悲を煩さんや。我が食分は我が畑にて足れり、又天祐もあるであらう。知足の法に依り、我れは之れにて足るのである。希くは諸賢君子等は、宗教を信念するを志し、直に眞實の道に入れ。宗教と云ふても、天地の一大原理に歸着するをいふので、其の門戸標準には神儒佛耶といふ標目が出來て居る。然し此の標目に惑ひ、所謂牆壁溝濠に陥落して、復び出づることの出來ざるやうにならぬことを要す。然るに賢人君子は、此の標準を牽る脱却して、心と云ふ家郷に住し、常樂の都に臻らうと欲求する者は、余に來つて問ひ給へ。余は七十六歳にして、命旦暮に迫るも、余に問ふ者には必ず答を果すであらう。設ひ余は出張するも、宿泊の厄介など掛る心は毛頭ない、必ず一切を自辨して往復するであらう。又訪ね來る者あらば、麥飯にて二晝夜は施行するであらう。之れも眞實信者であつて、求道の

士でなくてはならぬ。唯だ余は包まず隠さず露骨に余の本懐を陳べて居るのである。但し余に固疾あつて命期旦夕に迫つて居るから余に質問せんと欲する者は先づ余に一葉の葉書を投せよ。若し一週間にして更に回答なき時は余は歿命せしものと御了察ありたいのである。

(四) 此の世の御暇には笑つて行かう

凡聖共に遁れ難きは無常免れ難きは宿世の業因である。依つて之れを分り易く言ふ時は人間はこの浮世へ客に來た者であるから御馳走も澤山喰べ、又面白い處を見たり聞いたりして、少しも心残りの無い様にして、古來の聖者賢人も釋迦も達磨も私も御前も皆な共に、一つ處の心の家郷へ歸るのである。其歸りがけになつて、彼れ此れ言ふことの無いやうに、心持ち能く行くのが、此の世からすぐ極樂の遊樂町の木戸口である。此の世の御暇には笑つて往くのが何よりである。修養だの何だのと云ふても、此の笑つて往かれる身になつて置く事ぢやから平素から笑の研究をした方がよい。

(五) 釋迦の來迎

斯かる事を言ふと、未入の者は迷ふかも知れぬが、よく／＼思案をめぐらして見るがよい。眞實蟻の頭にも、蚤虱の鬚にも、一々に大光明を放ち給ふことである。是れは余が今嘘言を吐いて人を惑はすのではない。今釋迦如來が即今再來して、余に向つて、如何が大光明を放つと、御尋になつても、其返答に困る様では、見性では無い。故に余が觀る所の者は、凡て大光明を放つて居るので、諸君の胸中に浮ぶ所のもの、即ち無盡意菩薩無垢清淨如來である。又釋迦如來の來迎である。此の來迎が分るやうにならねば、修養した甲斐がない。狂歌に、

眞實は針の穴から富士山も

須彌も虚空も一目にぞ見る。

(六) 地獄極樂の辻談義

如何なる人も、金錢の欲徳と心性の研究には迷ひ易いものである。譬へば心境

不二と云ふも、見聞覺知と云ふも、皆な一つで二つない。唯だ恨むらくは、吾人が信不及なるがために、凡と聖との名が分るゝのである。余が廿一歳の時、些少の安心に住した時に言つたことがある。「一念生ずる所本来現じ、元と無心にして萬境の主となる」とは即ち是れである。之れは全く嘘でない、全く無我である。時に人有つて問うて言ふには、其の無我と云ふても、師が即今無我と云つた一聲があるでないかと。余は答へた、此の聲は百千萬劫千生にも、此の聲ばかりで、此の聲が盡くる處なき處に到つて、初めて安心立命が出来るのである。此の聲は畢竟神とも佛とも云ふ聲である。又は煩惱とも菩提ともなる聲である。故に此の聲になり切れば安心立命である。若し此の聲がなければ、永劫生死長夜の闇路を照すことが出来ぬ。若し此の聲がなければ、無明煩惱の雲霧を拂ふことが出来ぬ。實に此の聲が天地宇宙の太祖であつて、又森羅萬象の根元である。吾人が常々煩惱妄想と思ふのは、約り此の聲の光明界を見誤るから、煩惱とするのである。縦令見誤つても、其の實は心と心とであつて、心の真空の理は無我である。見聞の二も二にして二に非ずで、見た奴聞いた奴で、聞いた奴が其の儘見た奴である。泣くが其の儘笑ふ

ので、笑ふのが其の儘泣くのである。團十郎の踊るのは、即ち私が茲で踊るのであつて、更に隔つべきものがない。ソロモンの百合も、釋迦の拈華も、是に至つては淺深の別はあるけれども、唯だ一理である。

四四、心性實窮の捷徑

古の伏羲神農や、神武天皇の時代の山も川も海も、庭の梅も櫻も、今と更に變りなく、古も今のまゝ、今も古のまゝである。山の高く聳え、川の底きに流れ、梅の寒中馥郁たる香氣を發し、櫻の春風を待つて開くこと、古今東西些の異なる所はない。之れが天則に依り、天真の原理あるからである。故に余も此の天則原理に法つて話するのであるが、聞く人が誠の心で聞いて呉れなければ、朝から晩まで喋々と辯じて、全く無駄骨となつて仕舞ふ。然し若し聞く人に信があつて聞くなれば、私が茲で鉛や錫を以つて銜つても、聞く者は真金程に聞ひて、之れをたしかに受取つて呉れる。故に信があれば、鉛も黄金黄金も鉛である。私は片田舎の辻堂に居る身であるから、店も小居である。小居であるから、賈物ばかりであると思つて呉れては困

る。能くく大店の品と我が小店の品と、何れか真、何れか偽と、吟味して貰ひたいものだ。先づ貴賤高下の主角を放擲して、眞實眞理の存する所を聞き開くだけの智慧を第一に備へて貰ひたいのである。法には古今東西の別はない、常住々々である。山河大地も、日月星辰も、夜明の明星も、釋迦が悟られた明星も、全く同一である。夫れのみか、鴉のカア、雀のチウ、亦同様である。其の聲が其の儘、吾の心中に於て或は煩惱とも、忘想ともなる、少しも混り氣のない、太古の真相である。故に之れが趙州の無字、或は白隠の隻手の聲も、全く同一である。但し私は天保の八厘生れで、却々百にはならぬ。今の青年衆の如き、文字素養は更にない。唯此の我が心性の實窮を、其の儘斯道を研鑽する人の爲めに、之れを書き残して置くのである。

心より外に入るべき道はなし

たいこゝろこそ天地の親

極樂を西や東と尋ぬるな

むね一方で十方が彌陀

我と云ふ心を廣くのばし見よ

そらも月日もわが鼻の息

ものとはん幽谷の響も山彦も

おのが聲にておのが聞くなり

始めなくをはりなければこの玉の

こゑの光を無量壽といふ

見て聞いてものいふ聲は天地も

知らぬ昔の父母のおもかけ

生れるも死ぬるも夢の浮き橋を

わたるは胸の宵月のそら

また一休和尚の歌に

世の中は貧ぢや有徳ぢや苦ぢや樂ぢや

何ぢやかぢやとて未は無茶苦茶

四五、世の中を見るに芝居の如し

世の中は芝居其の儘であつて、上に立つも役であれば、下に居るも役である。舞臺に現れてこそ其の役々々で、貴賤高下の別をなして躍つて居るが、樂屋へ廻つて見れば、殿様役をした者も、下郎役をした者も、同じ役者である。此の世に於ても、尊貴卑賤と區別して、或は殺す役者、殺される役者とあるけれど、之れは皆な前世の宿業によつて躍つて居る夢の影法師たるに過ぎぬ、

世の中は芝居の役者そのまゝに

上も役ならず下も役なり。

と云ふ古歌の通りである。吾々は此の世で難儀苦勞をする役に當るから、此の憂い目辛い目の膝行勝五郎非人施行の役でも何でもするのである。

能く／＼考へて見れば、人の五體の上に就いても、亦夫れ／＼の役がある。目や鼻や耳は殿様役である。又口となれば金満家の息子の如く、平常美味ばかりを喰べて居るから、一番割の善い役である。又足となると、一番割の悪い役で、何れへ行

くにも足が一番骨を折つて、重い體をつれて行き、其の上ならず坐るにも、尻に敷かれて痛い目にあひ、時々臭いお尻を嗅いで、窮窟な目に逢ふ役者である。

然れば吾々は世の中にあるのも、また五體の上でも色々と役割が付いて居るので、一度息絶えては其の役上りで元の土にかへるのである。故に土になる身の源の心さへ研鑽すれば、永遠氣樂に安心して居られるのである。

心さへ持つて生れて又死ねば

何不足なき物とこそなれ。

四十一年の秋、沼津で一泊して汽車に乗り合した英人が居て、日本語を能く操る。此の英人と名古屋で離別する際、余が送つた狂歌がある、

わしが身は日本出来の土人形

君伊吉利で同じこのゆめ。

四六、鸚鵡か猿か

凡そ人間の幸福といふことは、貴賤貧富や健康不健康やなにかで斗り定まるも

のは更になくとも這の天然自然の絶對的快樂を自得して暗々靈々たる常樂の都に安住する者こそ眞實幸福と云ふべきである。

如何なる人でも今斷末間と云ふ其の際まで至つて我心性に杖となり柱らとなるべき眞如の化身佛がなかつたならば賢人君子と呼べる者も何程此の世で衆人から尊敬を受けて居てもまた金銀財寶を山程積んで置いても此の場に至ると我が心より外に頼むべきものは更に無いのである。此の場合に平素より心性の研鑽のない者は恰も今迄で貴顯紳士の獨り息子であつた者が突然アフリカの沙漠へ投げ出されたやうなもので方角も分らねば憑りにする者も無いやうなものである。

然れども平素より天真の原理否宇宙の根元を時々刻々に磨き上げて置けば心に迷ふこととはなくて我が心より大光明を放つて其の方角を示し正しき道に直進することが出来るのである。如何とならば其の宇宙の根元と云ふも其の儘我が心であることが明白になるから我が心に迷ふと云ふものは更に無くなるからである。是れ全く純正の哲理を明め見性悟道の功驗であると思ふ。禪宗では見

性悟道と云ふことを言ふが見性々々と妄りに口先ばかりで言つても眞實吾と我が心に這の興味を覺えざる者は鸚鵡の如き人である或は猿の如き人であると謂はねばならぬ。

四七、見性の活意義

禪に於ては一般に見性と云ふが何をか見性と云ふやと問ふに性を見ると字に書いた通り己が心性を見知識得する之れを見性と云ふのである。其の心の中に些々たる迷でも既に迷があつては見性でない。此の紛々擾々たる煩惱妄想の起り来る所の根元を的確に見知するのが即ち見性である。蟹へば今雷の鳴るのも風の吹くのも横濱の大砲の音も蜘蛛が尻から絲を出して己が天地を造るのも亦蟹が横に這ひ去るのも其の儘既に成佛して居ることを識得すれば自然と己が心に分つて来るやうなものである。見性と云ふも亦之れと更に別ではなくて自心を識知するのである。即ち吾々は夙夜寢ても覺めても慾の皮の離れぬ心が其の儘佛である。吾々のこの形體の主人公は煩惱や妄想ではなくて其のまゝ活佛の

入れ物であつて主人公は正に其の家の主人公で即ち佛である。天地宇宙を常に
 馳け廻つて居て、少しも茲と居所を定めぬ吾々の心が、其の儘佛である。故
 に其の心の源さへ知得すれば、其の煩惱妄想の其の儘が、光明放つ佛である。其佛
 は未來永劫前滅後生しながら、念々毎に成佛して居ることを知得するのである。
 其の研鑽また極度に達せぬから、其の佛も煩惱として現れ妄想として示されるの
 である。

諸賢君子は、心と云へば何乎替つた物が個然としてあるやうに思ふが、それが抑
 も誤りである。心と云つても、何にも個然したものがあつたのではない。心とは即
 ち我れである。我は即ち天地萬象となつて現れて居る。畢竟するに吾人の思ふ
 我は假りのもので、眞實の我でない。然し其の我でない所に亦我がある。我と思
 ふのは、我と云ふ聲ばかり存在するので、其の聲は天よりも高く、地よりも低くして、
 十方國土中、其の身を現せざるはない。是れを即ち佛と云ふのであつて、之れを見
 知識得するを見性とは云ふのである。

四八、一念彌陀佛、即滅無量罪

南無阿彌陀佛と云へば六字六音であるけれど、其の六音は六音を待たない。南
 の一音に歸し、或は無の一音に歸し、其の他の一音に歸して仕舞ふことが出来る。
 而して其の南の一音、即ち具五の一音さへ眞實に了解出来れば、成佛は疑ひない。
 極樂淨土の阿彌陀如來も、全く此の一音である。故に一念彌陀佛であつて、

南……と云ふ時既に成佛して仕舞ふのである。更に
 無……の聲を待たぬ。是れを眞正に實窮せぬから、
 阿……の聲を待たねばならぬ。若し一心三昧に入れば、
 彌……の一聲でも十分であつて、疑念の雲霧忽ち晴れて、
 陀……の音聲に無量の興味を感じ、神力自在に、
 佛……と常樂の彌陀佛になつて仕舞ふのである。

分ければ此の通りであるけれど、其の實南の一念、無の一念、阿の一念、其の場
 で阿彌陀佛になつて仕舞ふ。而して其の一念早きこと電光石火と言はうか、實に

息をも次がせぬ。其の一念の間に十萬億土も、百萬億土も、一時に現じて、我は光明遍照十方世界の無垢清淨なる無量光、無量壽の佛となるので、其の罪惡は山積して居つても、一念彌陀佛となる時、同時に消滅して仕舞ふのであるから、一念彌陀佛即滅無量罪と云ふのである。一遍上人の歌に、

唱ふれば佛も我もなかりけり

なむあみだぶつなむあみだぶつ

是れを禪では萬里一條の鐵と云ひ念佛門では前念命終後念即生とも云ふのであるが、兩者言葉殊つて居るけれど、其の目的とする意は略同一である。依つて居士等が態々遠路を顧みず、此の茅屋に訪ね見えし時は、直に此の呼の時吸滅し、吸の時呼の滅する旨と前念命終後念即生の理を以つて教訓するが往々功驗が現れるやうである。唯心の彌陀己心の淨土も亦之れによつて談ずることが出来る諸子能く〜考究したまへ。

四九、草木國土悉皆成佛

此の世界は總て是れ諸神諸佛の刹土であるから、悉く之れ活佛や活神ばかりであつて神佛で無いものは一物もない。牛がモーと云ふのも蟹が横に這ふのも迷つて居るのでない、皆な神佛の活動である。之れを釋迦如來は、觀見法界草木國土悉皆成佛と申して置かれた。此の世は唯だ塞翁が馬で順と逆との相違があるのみである。それを譬へて云ふと、今夜金の千萬圓も盗まれる人のためには、此の世は地獄であるけれど、又都合よく其の金を手に入れた盗人の爲めには、之れが又極樂となるのである。唯胸一つの濟しやうばかりで、地獄も現れ極樂も現れるのである。然し少し眼を高くして世界を見れば、順逆共に其のまゝ成佛して居る佛及び佛の所作で無いものはない。

孔子曰く「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」と。余は不徳短才の者であつて、一として人の範となるべき點は無いけれど、孔子の此の語を以て自己の觀念を修するのである。世人凡庸の人は、空と謂へば空に迷ひ、無と答ふれば無に迷ひ、所謂文に依つて義を解する者が多いのである。故に象山陸氏の語亦興味あるではないか、曰く

惟顏曾傳道、他未有聞、蓋顏曾從裏面出來、他從外面入去、今所傳子夏子張之徒、從外入之學也、曾子所傳、至孟不復傳矣。

と。凡て吾人の胸中に時々刻々心に思ふとは、畢竟聲無き聲である。光なき光である。吾々の心の一念發起するのは、また之れと同様であつて、心に云々と思ふのであるが、其の心と思ふとは、一つことであつて、二つではない。それを二つにして持つから凡夫となつて迷ふのである。釋迦如來が四十九年の間、五千四十餘卷の經文を説きても世の學者は此の理、彼の理と、文字や理窟にはかり迷うて居るから末になつて、四十九年一字不説と言れしに驚駭し、益々迷に迷を重ねるのである。今言ふ如く、心に思ふとは、誰も知る如く、我心ではかり知つて、他人は知らぬのであるが、其の我が心で思ふとは、己が思ふのである。其の思ふものになり切つて仕舞へば、我も心もない。我も心も無くなれば、其處が無我である。無我になり切つて仕舞へば、海と云ふも山と云ふも、二つ別物はない。總て世人は我と云ふ者が存在すると、其の我に對して山も海も現れ、山と思ひ海と想ふ心も出來て來るので、之れは生來持つ所の迷である、又誤謬である。眞正の理よりすれば、山は山、海は海、男は

男女は女であるけれど、其の上にてはの字を捨て、しまへば山海男女、其の儘一色差別なく平等々々である。其の處には佛の大光明も輝いて居れば、大音説法も聞ゆるのである。之れ即ち草木國土悉皆成佛の相狀である。

五〇、柳は緑、花は紅

△前念妙終、後念即生、之れは念佛門に於ける、念佛修行者の、最後命終時に獲信して極樂に往生して行くことを言つたのであるが、我が禪門上よりも亦之れを觀ることが出来る。之れを日常生活の最も手近な所に持ち來れば、呼の時に吸滅し、吸の時に呼滅して居る。之れ即ち前念命終、後念即生の貌である。

△自性は清淨である。本來清淨である。故に自性は無自性であると言得る。自性は差別界に於て見るやうな差別のあるべきものでない。自性は無差別平等である。唯だ外面より一寸覗いて見れば、差別して居るやうに見ゆるけれど、清淨なる事法身佛の如きものであつて、平等平等である。故に自性は無自性である。又差別即平等とも謂ひ得る。

△禪は無時間なり。禪には時間無し。時間とは制限されたものである。而して禪は無制限のものである。故に禪は無時間と云ひ得るのである。一念起れば、一念に三千世界を想起し得る。吾々の心に思ふとは、心が其の對象物に移照するのである。然るに一念に三千世界を思ひ、其の間唯だ一念を要するのみ。故に禪は無時間で、一念即三千法界である。

△吾々の一念に三千法界を思ひ得る故に、吾々の一念には天地を一時に念起する。三千法界など、云ふよりも却て天地と云つた方が分り易い。然らば念起の時即ち天地を造り、念滅の時即ち天地を滅す。故に天地は吾々の念起念滅と伴ひ相往來して居るのである。而して吾々の一念は呼に起つて、吸に滅する。既に一念呼に起つて、吸に滅するならば、吾々は常に天地を吞吐すと言ひ得る。其の咽喉の大なる驚くに堪へたりであるでないか。

△地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、之れを六道と云ふ。六道は迷界であることは、言ふまでもなし。古來六道に生死し輪廻すると云ふけれど、六道其のもの、吾々の外に存在するのであらうか。佛教一般より云へば、此の六道を上四界

と共に立て、十世界の存在を談するのであるけれど、今禪理を以つてすれば、六道何ぞ簡然として外に存せんや、六道と云ふも全く我が心を離れてなし。我は六道を輪廻するのではなくて、我は六道の主となるのである。造六道主となるのである。敢て六道に限らない、佛界亦然りて、我佛界に到るのでない。我は佛界の主となり得るのである。此の原理が了解出来れば、六道の迷相とこしなへに消えて放光明の佛智見に住することを得るのである。

△芳茶一碗、香天地、味在、淡然無味、中天地と云ふは代表者で、此の代表者は何の代表者であるかに氣付かざれば、此語も無意義になり了るのである。敢て茶に限つた事もない、其の他の者も皆な然りである。一聲之中、洞然明白である。伊川曰く、

默識心通

余曰く

隨緣現此身、任緣入死地、本來無常相、出沒如浮雲、清風與明月、
明青山綠水。

(緣に隨つて此の身を現じ、緣に任せて死地に入る、本來常相なく、出沒浮雲の如

し、清風明月と與に青山綠水と明なり。

古語に曰く

柳染觀音微妙相、松吹說法度生聲

(柳は染む觀音微妙の相、松は吹く說法度生の聲)

一念彌陀佛現來で、一念滅すれば亦彌陀佛還來である。吾人呼吸は吹鞴の如く前滅後生、新陳代謝である。心は尙探海燈の如し、試に夜洋燈を消し、褥の上に横つた時に、靜に思ひ見るべし。天地明なる事、白晝の如く、又掌紋を觀るが如くであらう。

見我身者發菩提心

聞我名者斷惡修善

聽我說者得大智惠

知我心者即身成佛

只道空山深夜夢

秋風吹入白雲邊

六時不斷稱名聲

萬巖松濤洗夢清

(譯して曰く。我が身を見る者は菩提心を發す、我が名を聞く者は惡を斷じて善を修す、我が説を聽く者は大智惠を得、我が心を知る者は即身成佛す、只

道、空山深夜の夢、秋風吹て白雲の邊に入る、六時不斷稱名の聲、萬巖松濤夢を洗つて清し)

△和田氏と石井氏とは歌禪の消息を詠出して居る。

人は皆ねむりのうちにながらへて

夢の浮世をすすものかは。

(石井氏)

心からむらがる鳥になやむなり

かゝしとなりて申す念佛。

(和田氏)

生き死にはのどをではいる息にして

たい此のうちに天も地もあり。

(石井氏)

宇宙をば呑み吐く息の真中に

わが根元はあぐらかくなり。

(石井氏)

天地をおのがからだと思ひなば

生死無常もなき筈となる。

(石井氏)

△未得對顔なれど、手紙の上では互に往復して居る、東京淺草に南枝氏あり。

同氏の書中に、

あはなくも心はかよふ新磯の

潮のよるひる忘れやはせじ。

老の身は花見る毎に思ふ哉

また来る春はありやなしやと。

天地も森羅萬象そのまゝが

三世をちぎる親子兄弟。

△西行法師の歌に、

さま／＼に花咲きたりと見し野邊の

おなじ色にて冬枯にけり。

余が熟々考へると、若い時は隣のおりんさん、阿君さんも、十七八のその時は、互に負けず劣らず衣裳を着飾つて、物見遊山、芝居御祭にも出掛けました。が、只今では早やその人達も、同じやうに其の昔の艶な姿はなく、目をパチ／＼するうちに霜枯の空で、見るかげもない婆々になつて仕舞ふ。此の有り様をよんだのが今の西行法

師の歌である。

△余は生れつき不徳なもので、てにをは杯を知るまもなく、老坂越して仕舞つた。やれ／＼それでも常に歌を詠んで居る、聞いてもくだんせ。

尊きもいやしき身にもおしなべて

死ねばつめたき土となるなり。

かたみにと残せし石に跡問へば

唯おとづるゝ小夜嵐かな。

きのふまでわれをおとのふその人は

けふはつめたき土となりしか。

如何なる英雄豪傑も行末は悉く此の冷き土と爲る。世は無常迅速であつて、其の中に居るお互の身の上である。誰れも彼れも、悉く此の會者定離は免がれることは出来ぬ、

生れるも死ぬるも夢の浮橋を

渡るは胸の宵月のそら。

元より生れるも夢なれば死ぬるも夢である。その夢なることを實窮するのは、胸の月真如の月である。

△まだく歌ならぬ歌は澤山ある。然し外見よりはなかくに禪旨甘きものがあらうと思ふ、

心より外に入るべき道はなし

たいこころこそ天地の世や。

思ふとは心の月にうつるなり

こころと月と二つなければ。

さのふ見し人はと問へばけふはなし

あすまた人は我を問はまし。

短さも長さも夢の浮橋を

わたるは胸の宵月のそら。

わが庵はふせがはら屋の住居

獨り寝て見る秋の夜の月。

わが庵は柴の扉に虫の音を

聞いて月見るさのへ子のあき。

わがものと思ふ間もなくいつの間に

乗り合ひ船の夜半のおきふし。

天である地であるわれは山である

川であるのが皆な我である。

月と日は子供のおもちや風車

またくうちに又年をとる。

まゝ喰ふも寝るもおきるも働くも

鼻と口との生き佛なり。

我物と思へどまゝにならぬのは

かりたこの身の土人形かな。

無我無心など云ふのも理窟禪

誠の無我は言ふにいはず。

△長崎縣の佛性居士より、
念佛も坐禪も同じ法の道

まよはですゝめ無爲の京へ。
我わりと迷ふ心の雲晴れて

つきの光を見るぞうれしき。
入り難き教の外法の關

みをつくしてやうち開きみむ。
○心外無別法

心より外に佛はなかりけり
ゆめさめて見よ彌陀の光を。

○心境不二
山見れば山となりぬる我が心

さぐりて見れば一物もなし
問はれても何と答へはよしの山

名をすてゝ見る花のすがたは。

○隻手の聲をきゝてよめる

なりもせぬ隻手のこゑも聞ゆなり

己が心をそのまゝにして。

悟らんと思ふ思も消えはてゝ

ならぬ隻手の聲もきこゆる。

△越中生地町有年居士より

面白や夢の舞臺で土人形

すがた見せずにつかふ化物。

ゆめのよに土人形の身と知れば

のぞみも消えてらくな日遊び。

△唯心庵佛性居士より寄せし詩數首あり、

舜應尊者徳風高 身隠新磯憶我曹

平素悠然修善行 麻衣托鉢不辭勞

舜應尊者徳風高し身は新磯に隠れて我曹を憶ふ平素悠然善行を修す麻衣托鉢勞を辭せず。

參學工夫未見真

空迷岐路夢中身

老師一喝驚酣睡

頓悟無常安亦貧

參學工夫未だ眞を見ず空しく岐路に迷ふ夢中の身老師の一喝酣睡驚く頓に無常を悟つて赤貧に安んず。

歲月空過蝶夢中

妾容俄變白頭翁

死生有命何須患

端垂安然學遠公

歲月空しく過ぐ蝶夢の中妾容俄に變ず白頭翁死生命有り何ぞ須く患へん端坐安然遠公を學ぶ。

常住唯心庵室裡

安然端坐究吾宗

正看脚下黃金地

仰慕永平千古蹤

常住唯心庵室の裡安然端坐して吾宗を究む正に看る脚下黃金の地仰ぎ慕ふ永平千古の蹤。

他門成佛豈難成

一念專心即往生

教義元來不優劣

應知要在盡凡情

他門の成佛豈成じ難からん一念專心即ち往生教義元來優劣せず應に知るべし要は凡情を盡すに在ること。

△又廣瀬壽山和尚一詩を寄せて曰く、

津々妙味咬何窮

肝膽傾來啓衆蒙

莫道沈淪葛藤窟

誰知紙背有清風

津々たる妙味咬むに何ぞ窮らむ肝膽傾き來つて衆蒙を啓く道ふこと莫れ沈淪葛藤窟誰か知らむ紙背清風あることを。等何れも這般の禪旨を誦ふ以つて諷誦玩味するに餘りありぢや。

五一、御幣擔を打す

陸奥宗光氏の談に曰く今の時の人宜しく悲しき歌或は戀愛を描せる書物を見るべからず若し之れを見るときは自然にあやかりて吾れ亦た戀愛の人となり悲

しく不仕合の人となるのである。依つて現時の活世界に處せんと欲するものは、勤めて立身出世、所謂成功者等の實歴を示せる書を見て、吾が範となさねばならぬと。

今此の語を批評すれば、一面の眞理ではないが、之れを一般的に言はうとなれば、世の謂はゆる御幣擔の徒に雷同せる言と謂はざるを得ない。尤も釋迦だつて、御幣擔の親分かも知れない、世の人の過たんことを恐れて、色々と心配したことを言つて居るから。然し此の御幣擔ぎの人は、譬へば臭い物に蓋をし、漬い物を掩ふやうなものである。表向きは立派なやうでも、其の内部には却つて臭氣横溢して居る。然うかと言つて、たゞ悲喜の情を無くし親が子に死に分れる時も、子が親に別れる時も悲哀戀慕の情無く、戀愛の情禁する能はざるべき妻妾と死別する不幸に遭遇するも、亦更に愛情の起り來らざるやうでは、飛禽走獸に近しである。今佛教はたゞ此の吾々と離ることの出來ぬ悲喜の情を、蓋を以つて覆ふて置くのではない。其の心頭に紛々として起り來る情愛の根本に就いて、其の原理を自得するのである。故に悲しむべき時には共に悲しみ、喜ぶべき時には共に喜ぶので

ある。若し其の心の根元を知得すれば、決して之れにあやかることはない。然るに徒らに其の窮理を捨て、己心の狭い料簡から、卑しい人情は抑へようと壓伏する時は、却て其の情は其の壓迫に抵抗して爆發しようとするのである。故に佛教に依つて、其の心の根元を明むれば、物に因縁ると云ふことなく、而も人情自然である。御經に十方諸國土無刹不現我身とあつて、佛教は如何なる物の上に於ても、光明ある佛を認むることを得るのである。譬へば螻蛄の眉毛にも、一々活如來が現身することを自知する道である。之れが吾々の俗情を起しつゝ、修養し行く上に於て、非常に善い教である。斯ることを言へば、佛教は徒は可笑しきことを言ふとか、虚言を弄するとか云ふが、之れは實際のことで、之れを知得するのは、所謂見性悟道である。此の眞實見性の境域に到れば、悲しきことも、嬉しきことも一つになつて仕舞つて、悲喜の差別を見ないのである。今迄で泣いて居たのが笑つて居るので、笑ふのは泣くのである。此の原理に到入して見れば、我が心の裡に人情を隠蔽して、その曇り霞が自然に出來て、夫れがまた迷の源となるのである。昔臨濟大師も、聖を愛し凡を憎まば生死海裏に浮沈すると言はれて居る。陸奥氏の説も善く

行つて、其の浮沈の中間に位するので、超然脱體の場には至らぬのである。

又陸奥氏の説を固執する時は、悲哀極まる葬式などは、常に避けねばならぬ。又目出度の婚禮などには、見るに任せ聞くは従ひ、列席せねばならぬ。日常生活の上

に於ても、成るべく甘美い物を喰べて、美食せねば、心も引き立たぬ道理である。然しかゝることは一般に望み得ざることで、強て之れを實行すれば、一家を保つことも困難になつて仕舞ふのである。

世の所謂成功者と呼ばるゝ者も、其初めの動機は、戀愛の情の破れたるが、悲觀極まる不仕合の末、千辛萬苦の溝を泳いで、彼岸に到着した者である。故に艱難勤苦が人を玉にするので、困難艱難に打ち勝つて、初めて成功者の中に入るのである。此の浮世には、盛衰興亡常なきものあつて、吾々が此の原理に左配されるのである。今青年輩の有様を見渡すと、多くは勉強して、金を溜めて、甘い物を喰ひ、美しい衣服を着て、美しい妻君と立派な家屋に住んで、驕で奴僕を使つて、威張つて見たいと云ふのが、其の理想となつて居る。實に、淺墓な量見である。若年の時代に於て、斯る氣隨氣儘の身を持つと、約り生命を縮めて、天死する元である。之れ當世成り上

りの金満家を見て、買ひ被り過ぎて居る結果である。其の證據には、大都會の裏町などで、朝起きて顔を洗ふと、直ぐ南無不動明王、南無觀世音菩薩、南無大師遍照金剛、南無天滿天神、南無水天宮と合掌して、其の利益を蒙らうとして居るのは、何故であるかと、能く其の祈禱の根本的精神を尋ねて見れば、金が欲しい、富貴に成りたい、出世がしたいと云ふ望み計りで拜むのである。實は、神様や佛様より、金儲けして富貴にさへなれば、それでよいと思ふのである。要するに、神佛は金儲の中介者たるに過ぎぬ、全く神佛を使役する者と謂ふべきである。

又陸奥氏の仰せられたことに、誠に結構なこともある。是れは風教上に關することであるけれど、有益なことであるから、掲げて置くことにする。开は病人と同衾すること勿れと云ふ一事である。病人と交接すれば如何に服薬し、如何に治療するも更に其の効が現れぬのである。病中一度交接すれば、百日の薬を飲むも無になる。無になるのみならず、却て益々病氣を重くするのである。故に夫婦で互に看護したり、仕られたりすることを厳しく止めねばならぬ。夫婦は病中別居するが何より善い。若し夫婦で湯治や海水浴などへ行くと、即ち夫の病氣に妻が看

護のために附き添ひ、妻の病氣のために夫が同行すれば其の病は治らないのみならず却て重なり遂に死亡するに至るのは往々見聞する所である。殊に心臓肺病等には大なる禁物である。

五二、光陰は百代の過客

死生の問題は吾々に取りては最も大切な問題で、此の問題さへ解決出来れば、苦んだり迷つたりすることはいらぬ。先づ死生は一貫のものと思ふべし。元來此の生死と云ふことは、此の現在世の始り終りに名付けた所の名であつて、其の本體の心より云ふ時は、生もなく死もなく、始もなく終もなく、常に法界に遍満して、何國にも常に存在せざるはない。之れを不生不滅とも、無始無終とも云ふ。吾々は此唯現在の一世を見て、過去も未來も無いものとするのである。吾人も御存の通り、今日あれば來日も亦あつて、東の方から、心の月、心の大日如來が現れる。又吾々が死ぬと云へば、此の形體が、土の人形のやうに、其の機用を失つて、冷たき土になる。たゞ斯う見るのは肉眼でばかり見るので、若し、心眼を開いて見れば、死ぬの生さる

のと云ふ事が無いのである。心は固り無自性である、無自性であるから生死は無、何にも動かない、唯有るのは此無自性だから生死もないと云ふ位なものである。古人は天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客と云つて居る。逆旅は旅舎のことであつて、過客とは御客で即ち旅人のことである。天地の森羅萬象も、悉く形體のある物は、皆々大旅舎の一部を成して居るのであつて、其處へ、光陰の御客が始終立替り入替り往來するが、其の儘死に生きである。此の天地の旅舎へ、銘々も御客に來たのである。本家の古郷は眞如の京であつて、暫く此土の化物が、此の世へ御客に來たのである。故に生るゝのは此の旅舎に入ることであつて、死ぬとは此の旅舎から出發するのである。僅に一夜の宿りであるにも係らず、人は一生一代と思つて居る。されば禪理を研鑽すれば、生死は一貫であることが分る。此の生死一貫とは肉眼で見て云ふのでない、心で心を摺り潰して、心で實窮すれば、心の本家は眞如の京である。

わが物とおもへどまゝにならぬより

かりた此の身とさとれ世の人。

五三、國王の十徳

今日我國は、宛に角世界の文明國に列せらるゝに至つたのは、抑も誰人のお蔭で有らう。萬國各其の國の歴史を異にして居るから、風俗習慣等も異にして居る。然し我が國位其の歴史の美しく且つ芳しきものはあるまい。我が國は申すまでもなく、皇祖皇宗の國を肇め給ひしより、歴代の聖王御心を國運の發展に用ひ給ひ、或は支那の文明を輸入し、或は印度の文物を應用し、近くは西洋の勝れたるを擇びて維新の大業成り、外國の文明と全く同化して、我が國の文明を産出し給ひしものである。故に我が國今日在るは、一に皇室の力にして、近くは 今上天皇陛下の御盛徳の然からしむるところである。佛經中心地觀經に國王の十徳を説いて居る。今此の十徳を以つて、陛下の御盛徳の萬分一を顯彰し奉らむんと欲するのである。

(一)に能照の御徳 文明の先覺者と成り、智慧の眼を以て、能く國民の迷妄を破り給ふを云ふのである。

- (二)に莊嚴の御徳 之れは國家を裝飾する意味にて、汽車汽船電信電話美術工藝等の發達も皆是れ國家の裝飾である。
- (三)に興樂の御徳 國民をして心安らかに枕を高くして、泰平を樂しましめ給ふをいふ。
- (四)に伏怨の御徳 國家に怨みなす一切の敵を征伏し、内は獨立を經營し、外に國威を震張し給ふをいふ。
- (五)に離怖の御徳 人民の生命身體財産等に對する權利を確保し給ひ、國民をして些しも恐るゝ所なからしむる御徳である。
- (六)に任賢の御徳 諸國より賢人を擧げて國家の政を議せしめ、又實際に之れが政務に當らしめ給ふお徳をいふ。
- (七)に法本の御徳 憲法を制定し國法を定め給ふのみならず、國民道德の本たる教育勅語を下し給ふをいふ。
- (八)に持世の御徳 此の文明の國を維持し、敢て外國の笑をも招かず、又更に侵かさねざるお徳をいふ。

(九)に業主の御徳。一般國民所業の主となり、一切の責任を持ち給ひ、民の心を以つて心とし、民の罪を以て自ら責め給ふをいふ。

(十)に人主の御徳。一般國民の主權者となり給ひ、一切の事に亘りて、更に遺漏なく大御心を以つて治め給ふをいふ。

以上の十徳は其の項目心地觀經に依りし者にして、我が國歴代の聖主、皆な然るべきであれど、殊に吾々は 今上天皇陛下の示し給ふ所の御徳を崇敬し奉るのである。實に 陛下は維新の大業を成し給ひしより四十有六年、一日の如くに國民を慰撫愛護し給ひ、夙夜國家發展の策を按じ給ひ、或は國家の大難に遭遇することあるも、陛下の御徳は益輝き渡りて、今や我が國は世界第一等國の列に伍するに至つたのである。然れば吾々も此の御盛徳を仰ぎ奉ると共に、國運發展の一端を盡し此の御恩徳の萬分の一に報い奉らねばならぬのである。

五四、即心成佛門

此の僧運も一年々々老い來つて、今年は七十六翁となつた。毎年老老するばかりである。然し去年は少しはたしかであつたかも知れぬ、元より自分は老いて益々盛にやり度い積りぢやが、世間から見たら、さうも行くまい。そこで禪門極意の即心成佛門を開示するから、聞いても下だんせと、白隠和尚風に言うておく、

頽齡七十六新年、

心元より世界の始め、

無形無象の真空寂も、

是れもヤツパリ吾腹の膽

父母の寫眞が天地を包む

俺が此頃井戸替へすれば、

掘れば掘る程盡さない佛

地獄極樂難波の蘆で、

諸行無常の響の聲も、

鳴や鳴らぬはソリヤ後の事、

撞木打つ時鐘はなし、

僧運坊の寝ぼけの夢は、

森羅萬象物相親し、

有漏と無漏にて樂しき世界、

餘り戀しき遺物に残す、

逢て嬉しや全胎兩部、

一攫毎に金粟如來、

是れちや奈落のどん底までも、

伊勢の濱をき品替はらねば、

鐘が鳴るかへ撞木がなるか、

鐘が鳴る時撞木はお留守、

茲が天真原素のはじめ、